

奇譚クラブ

新時代の風俗雑誌

1954.1



奇譚クラブ

1

定價 百円



9人のモデルを駆使して得た未発表の秘作

縛られた女ばかりの三十二態

美しき縛しめ 第二集

辻村隆構成・塚本鉄三撮映

頒価 一冊 五百円 (送料五十円)

(モデル嬢)

木田雅子嬢・村田那美子嬢・高瀬忍嬢
雲井久子嬢・川端多奈子嬢・厚狭春江嬢
杉美嬢・坂口利子嬢・中富綾子嬢

◆責め写真は欲しいが印刷紙に焼付けたのは高くて困るとおっしゃる方は是非この傑作集をお求め下さい。印刷紙と変らぬ極鮮明なる高級印刷により絶対他の追随を許さぬ低廉な値段で堂々三十二態のあらゆる姿態の責め写真がお手元に届くのです。市販はいたしませんから直接代理部へお申込み下さい、厳重荷造の王急送申し上げます。

責めのアルバム 第二集 完成

この一冊を買えば皆さまは他を必要としない位満足されることでしょう

本誌が一摺に他の諸々の責め写真を圧倒すべく半年前より企画周到なる準備の結果ここに驚嘆に値する超絶版の完成を見ました。

【豪華な責めの色刷画帖が極めて安価に皆様のお手許へ届きます】

極彩色美術オフセット
多色印刷特アト使用
絵の大きさ B 6 版
画帖の大きさ B 5 版

装釘、縦6寸横8横5分
横トジ豪華美本

三条春彦・画

画帖 時代物責絵巻

〇〇各葉説明文句入り〇〇
絶対市販致しません〇〇

内容	
一、山法師と	二、静御前
三、女スリと	四、岡引き
五、淀吉と千	六、姫
七、侍女	八、犬公方と
九、七の最期	十、新撰組と
十一、芸妓	十二、七郎左エ
十三、門と腰元	十四、小紫と悪
十五、旗本連	

特価 三百円

(送料五十円)

奇譚クラブ臨時増刊号

【原名 THE GLOOMY EXPERIENCE】

縛られた女ばかりの16態

豪華アルバム 美しき縛しめ 第一集

(各葉解説文句入・美術コロタイプ印刷)

美濃村晃構成・塚本鉄三撮映

工足高麗芋 濃く滑床紙紅荒目横縞
手小 燭さ重 の置 と の性欄
責柳手打虫 責り吊物念白縞綾台目わ

【全部未発表】

四人のモデルを使つて完成した縛られた女の集大成、優美さと緊縛感の秀れた代表的な責め写真集、痺れるような妖しい雰囲気は素晴らしい反響を呼んで瞬く間に限定部数を突破、これは同好者のために若干増刷した分です。
何卒売切にならぬ中にコレクションの一端へお加え下さい。
曙書房代理部

(頒価一部 500円 送料60円)

アリスの人生学校

(定価百円)

十二月月上旬 全国一齊に発売！
吾妻氏の麗筆により心にきき透執拗に描写されたサディズム文学の決定版
美少女に対する折檻と凌辱の世界を描くサディ・ブラツケイズ◎吾妻 新訳
堂々五百枚に垂んとする長篇サディズム小説口絵(色刷・単色)カット・挿絵多数挿入
第一部 純潔教育 第二部 貞操教育
書店にてお買渡れの方は直接発行所へお申込み下さい。送料共

月 刊 **KK通信** 定価 20円 半年100円

(既に第十六号迄毎月) (休みなしに発行)

奇譚クラブの誇る特別会員の機関誌

本誌愛読者を中心に楽しいグループB 6判十六頁に新聞用扁平活字にて記事満載挿絵、写真等毎号多数掲載、本誌愛読者の欠かすことの出来ない伴侶です。一般市販せず予約者にのみ送付、目下三千の会員を擁し毎日増加の一途を辿っています。本誌をごらん下さった方は是非KK通信も併せて御愛読下さい。絶対他の真似の出来ぬ内容を誇つております。旧号は第六号より第十五号迄在庫しております。【六回分送共百円にて急送】
僅か百円の会費で半年分(送料当方負担)毎月B 6判十六頁の機関誌をお送りいたします。〇見本は切手二十円にて急送します

【曙書房内KK通信係】

本誌6,7,8月号の3回に亘り連載大好評を博したクリスチーヌの受難の全譯遂に成る！

再版出来！

クリスチーヌの受難全訳
キトロードシユトツク 被虐の家
新・訳 吾妻

可憐なる美女クリスチーヌに対する緊縛と狼ぐつわは汚辱と鞭打と凌辱の地獄図絵サディズムの粋をつくしたクリスチーヌの全訳、画壇の一方の雄、某氏のアブノーマル挿絵相俟つてここに完全なるサディズム・文学の金字塔が打ち樹てられた。

定価 三二〇円(送料四〇円)
申込所 曙書房代理部

緊縛寫眞の分譲

断然卓絶した特写
群を抜く素晴しき傑作
類例のない犠牲的安価

◆女体悦虐寫眞集◆

光沢面焼付 手札型
五枚一組(一集分) 二百円
第六篇(五十一―六十)十集
第七篇(六十一―七十)十集
第八篇(八十一―九十)十集
第九篇(八十一―九十)十集
本誌九月号口絵参照の上御
好みの姿態をお選び下さい
【一集単位】
第十篇(九十一―百) 十集
本誌十一月号口絵参照下さい。
御指定の集をお送りいた
します。

★ 写真は同好者本位の迅速・確實で信用のある曙書房代理部へ！ すべて送料共

◇野外全裸の縛り

キヤビネ判
三枚一組 三百円

灼熱の夏の陽の下にびち／＼とはねる白魚の如き
肢態にからみつく縄、野
外の傑作中より選り出し
た快心の作品揃い

◇制服の女学生

キヤビネ判
三枚一組 三百円

磔 2 態

キヤビネ版 二枚一組 三百円
一女正面のハリツケ、と三女の中二女
が横面一女が正面のハリツケ、何れも
一糸もまともな全裸の縛りである

高手小手 三態

キヤビネ版 三枚一組 三百円

新人モデル木田雅子嬢による豊麗なる
女性に掛けた物凄い緊縛感、縄に悶え
る処女体の美しさ！

◎川端多奈子嬢◎

悦虐姿態集

手札型 七枚一組 三百円

典型的マゾ女性多奈子
嬢の好みに従つて、敢
行した強烈な縛り、そ
してこゝに美しい悦虐
の姿態を得た

◇ナイロンに包

まれた女体◇

キヤビネ版 三枚一組 三百円

〔急襲〕連続十五枚続き

手札型 十五枚 一組 五百円

女が縛られる迄の過程を十五枚の連続写
真にしたもので、猿ぐつわをされ完全に
自由を奪われるに至る経路が如実に活写
された興味溢れる作品、どこにも負けな
い安い値段で鮮明にして恰かも自ら手
を下す如き写真を提供

女が女を責める

第一集 オール・ヌード
一女対一女

第二集 オール・ヌード
一女対二女

何れもキビネ版
三枚一組 三百円

責めの雰囲気を出させ
るために、全裸の責手
の女の出演を求めた。
女が女を責めるところ
に妖しい倒錯的な耽美
の世界が描き出されて
いる。

吊り 5態特集

第1組 3枚1組 300円
第2組 3枚1組 300円
第3組 3枚1組 300円
第4組 3枚1組 300円
キヤビネ版
各組3枚1組 500円
トリックで本当の飛魚の表情縛
ないし責めは様々了し
吊姿や了し

灸責めの 3態

キヤビネ版
3枚1組 300円
熱さにのたう
つ女体のエロ
チズム

鞭打ちの 3態

キヤビネ版
3枚1組 300円
鞭打たれて肌
についた斑

碁盤責め

キヤビネ版
三枚一組 三百円
碁盤の重さにひし
にやけた女体の白さ
に見るサジズム

溪流の飛魚

谷間の岩の間に縛
られた飛魚の表情縛
三枚一組 三百円
キヤビネ版

◇女性切腹姿態◇ 第一集

手札型 9枚1組 300円

熱烈な要望により、川合伊都子さんから送られた写真を参考にして新に撮映したものを加えてこゝに第一集を発表した。切腹マニアの一見を希望する。

申込所 大阪府堺局区内菅原通4ノ30
曙書房 代理部
振替大阪34956番



☆ 奇譚クラブ ☆ 新年号 目次

あぶの一まる・ふおと・せくしょん

江戸時代大名の人飾りの図	伊藤晴雨
残虐なる女性達・群像	森本愛造提供
図解 股間縛りの縄の掛け方	瀧 麗子・画
絵物語 置屋の主人と藝妓	都築 峰子・画
組写真 屈伏への過程	辻村 隆・構成
最新欧米女体責めより	杉原虹児・構成
楽屋裏の答責め	南川 和子・画
まぞひすちつくな責ー切腹ー縛体ー虐待ー愉悅ー	
瀧 麗子画集	苛責、蜘蛛責

悪の部屋

草木瓜 (紅花草紙)

二俣志津子 (56)
川合伊都子 (105)

蜘蛛と蝶々
―不運なニューフェース―

飛田良二 (123)
方 金三・畫

股間縛りについて 櫻井京一郎 156
 コンビネーションという下着について 長谷川 洋 (102)
 女装への憧れ 重田 正和 (180)
 悩ましき切腹悲願 兒島輝彦 (68)

新連載 私の求めた男 松井籟子 (108)
 痴迷 (ちめい) 瀧 麗子・画
 さしすちつく 犯された女 鬼山絢策 (82)
 美しき悪魔の哄笑 方 金三・画
 残虐なる女性達 近東規矩也 (74)
 森本愛造 (64)

新倒錯耽美論 成瀬 亮 (184)
 男色の閨房描寫 村田誠一 (174)
 あるマゾヒストの手帖から 沼 正三 (150)
 悦虐に悶える 川端多奈子 (40)
 満州敗戦の悲花 流浪八年 沖野恵美子 (117)

選ばれた女性の異常告白 小坂多美枝 (94)
 私刑に泣く未亡人(女囚私刑体験記) 北山カオル (192)
 監禁十日間(女奴隷の手記) 古川 裕子 (32)
 猿ぐつわと私(裕子の夜ばなし) 乗杉貴代子 (120)
 ダイヤナ夫人(サド女の処女期) 若杉 早苗 (138)
 檻の中にて(性的虜囚の告白)

現代マゾヒズム藝術時評 原 忠正 (159)
 サディズム小説 感情教育 吾妻 新 (164)
 晴雨隨筆 見えざる女の責場 伊藤晴雨 (42)

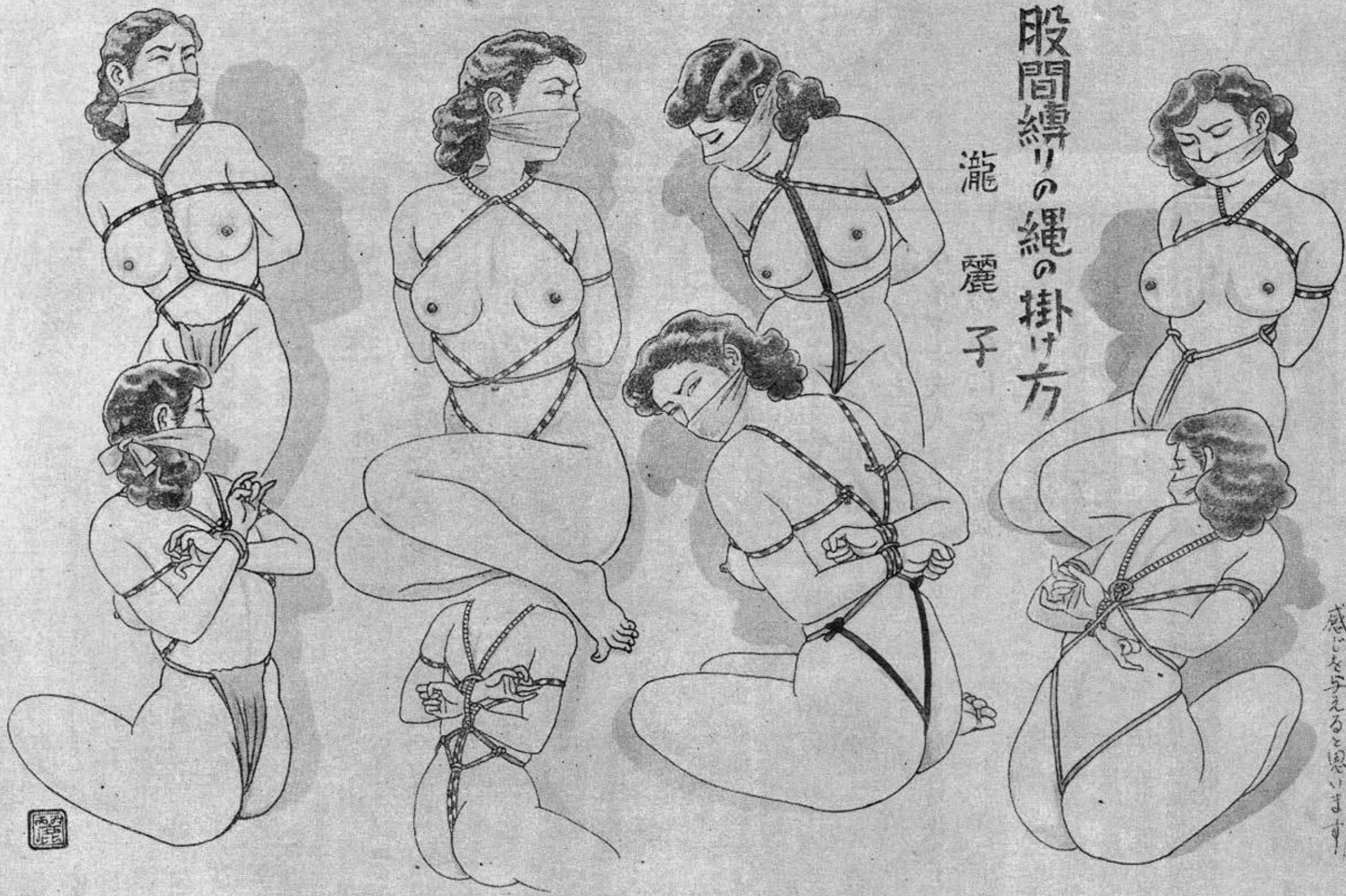
女腹切圖譜構成案 中康弘通 (200)
 扉、三島に於ける原のおせきの火刑



上図は前面、下図は各々の背面を示したものです。此の様な縄の掛け方は見る者には極めて幻想的な
 感じを与えると思います。

股間縛りの縄の掛け方

瀧 麗子



大名の人飾り

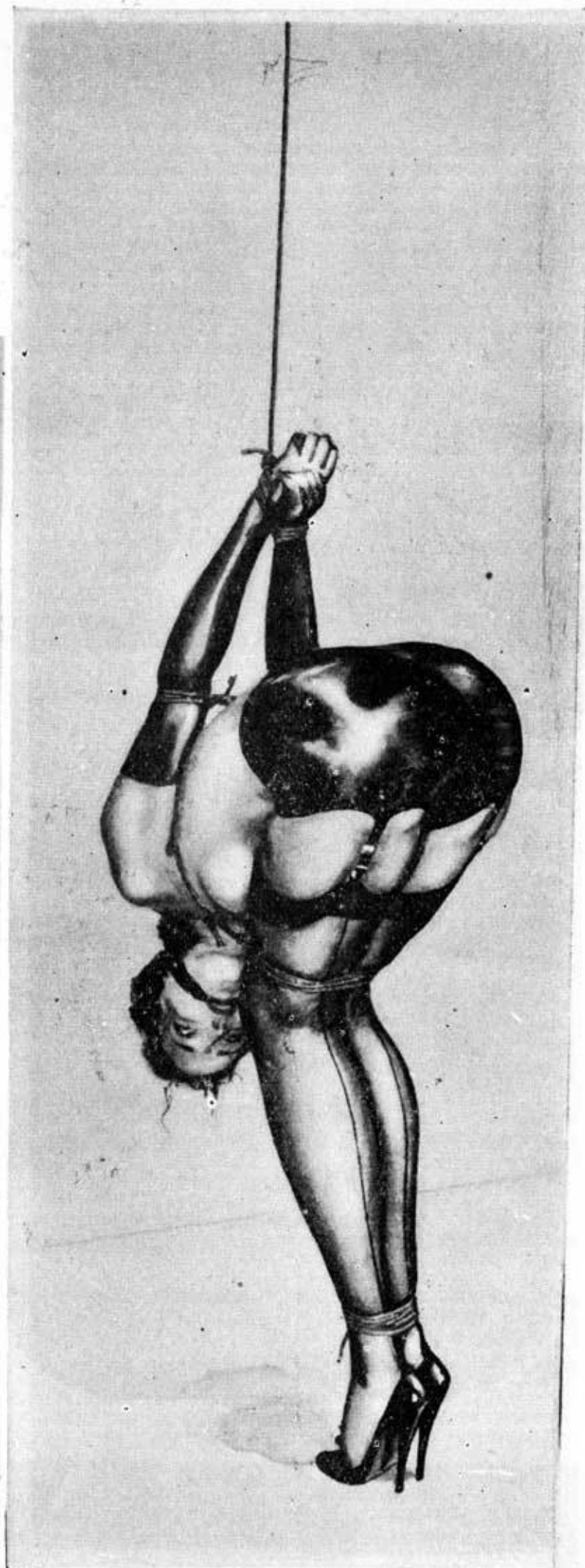
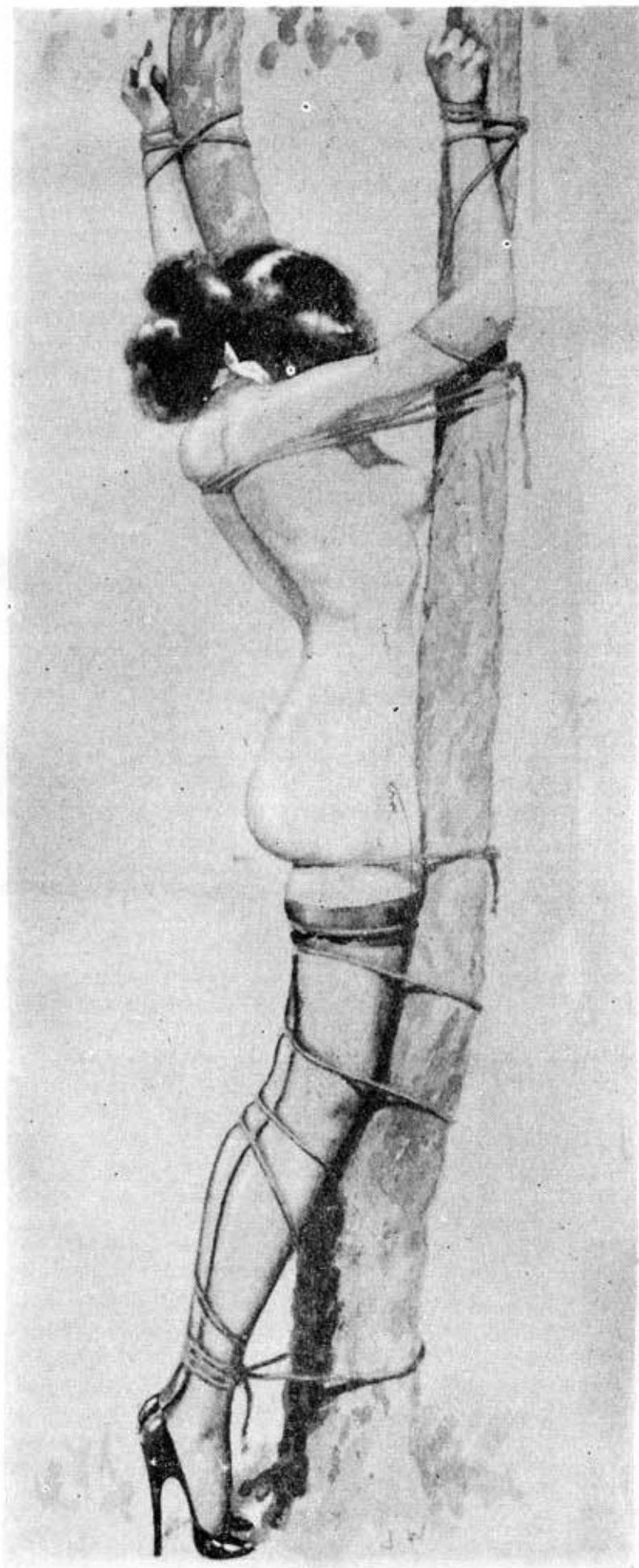
伊藤晴雨

しるこ屋は松の内だけ江戸の市中を売りあるき、凧は一月一杯、二月には一人もあげる者無くもしあげれば二月の逃げ凧とて笑われ、獅子舞の二月も事始めを限りとする習慣あり。三河万歳は二月には国へ帰る。松飾りの様式は鶴の巣ごもりといふ武家は根元の薪を斜に立て町家は堅にする区別ありという。

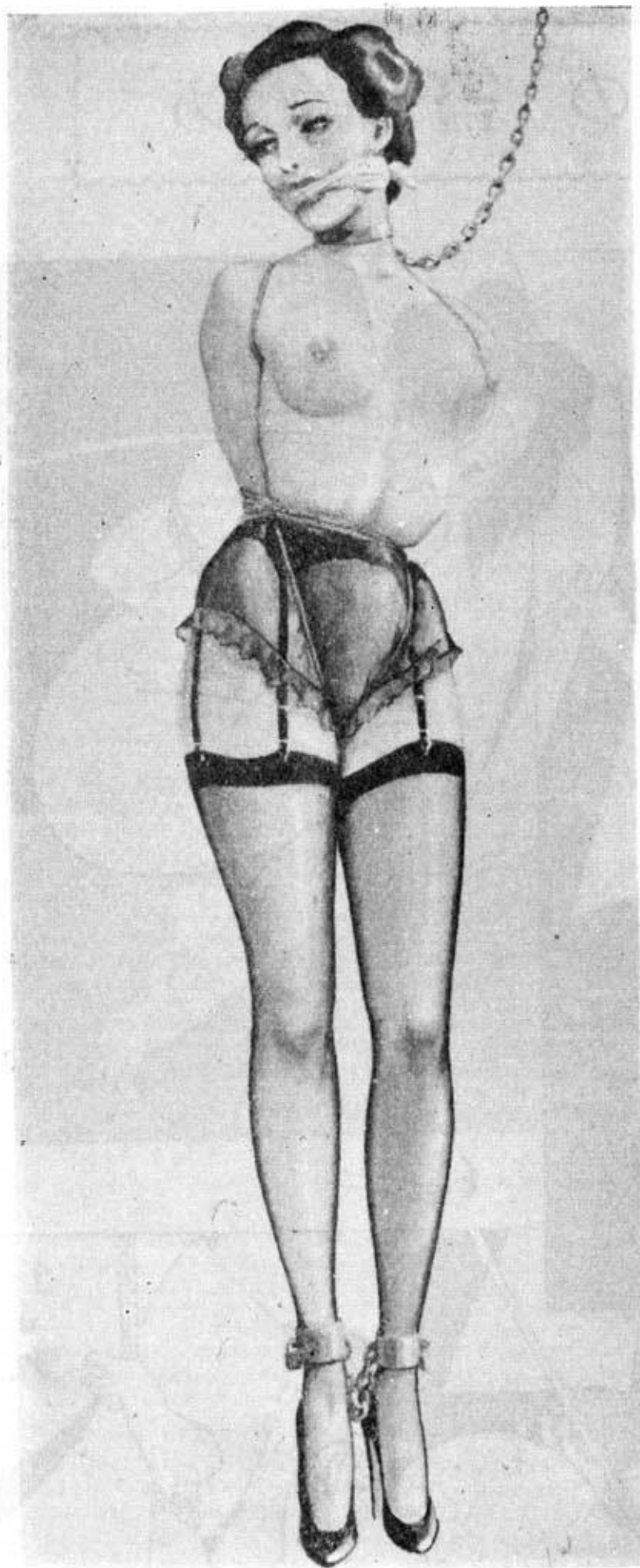


江戸の片
大名の
人飾り
あり

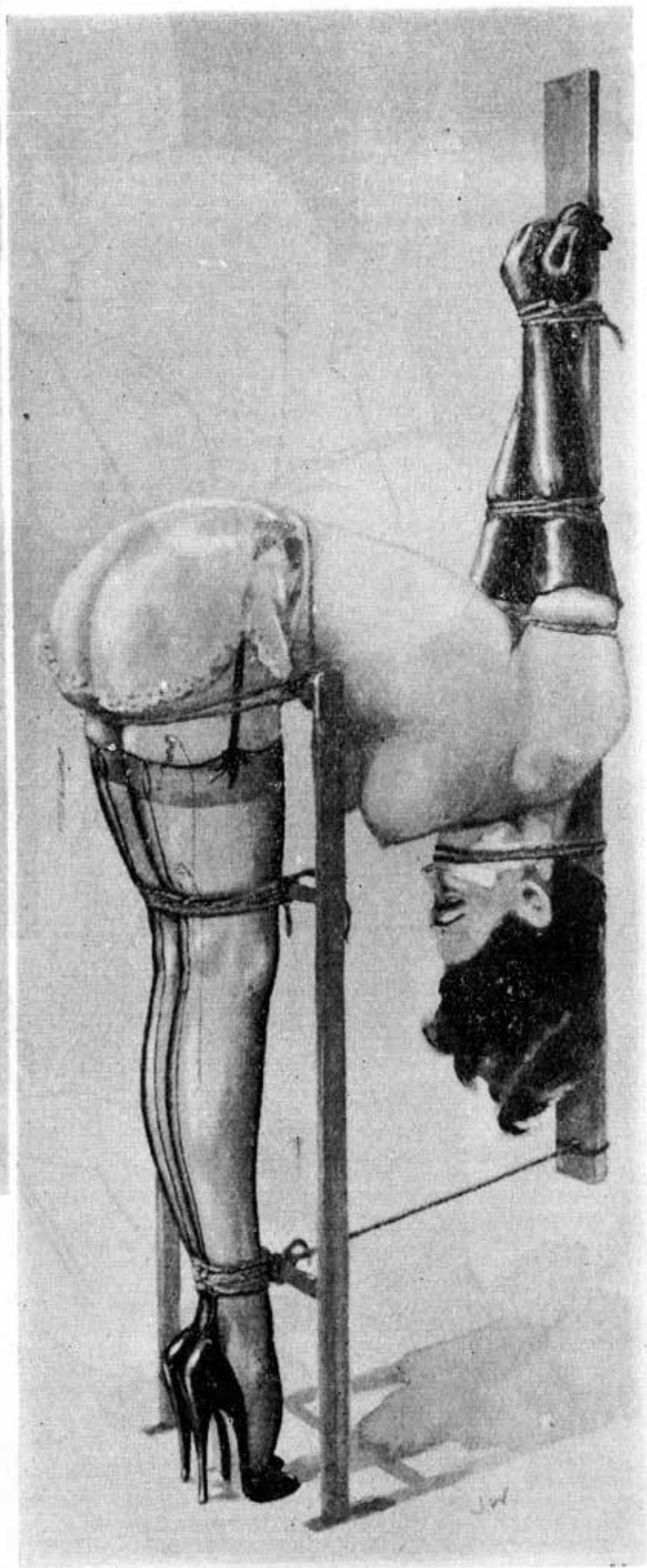
よりめ責体



最新欧米女



杉原虹児構成



置屋の主人と藝妓

初見

家出娘がボン引に欺かれてつれて
来られた家で主人に初見される



なぐさみ

天井に吊られて、巻きつけられた。腰巻を一枚一枚ぬがされる



仕込み

商品価値を高めるために
いろ／＼の芸を仕込まれる



水揚げ

初めて客席に出されて
人見御供になる



屈伏への過程

女が女を責めるポーズ



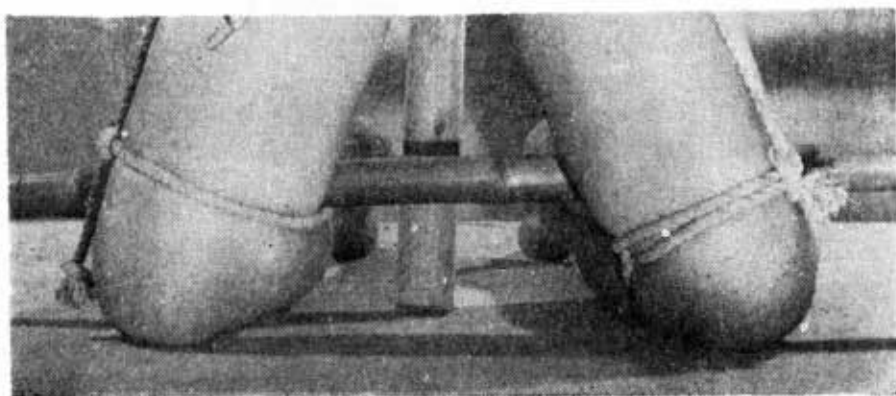
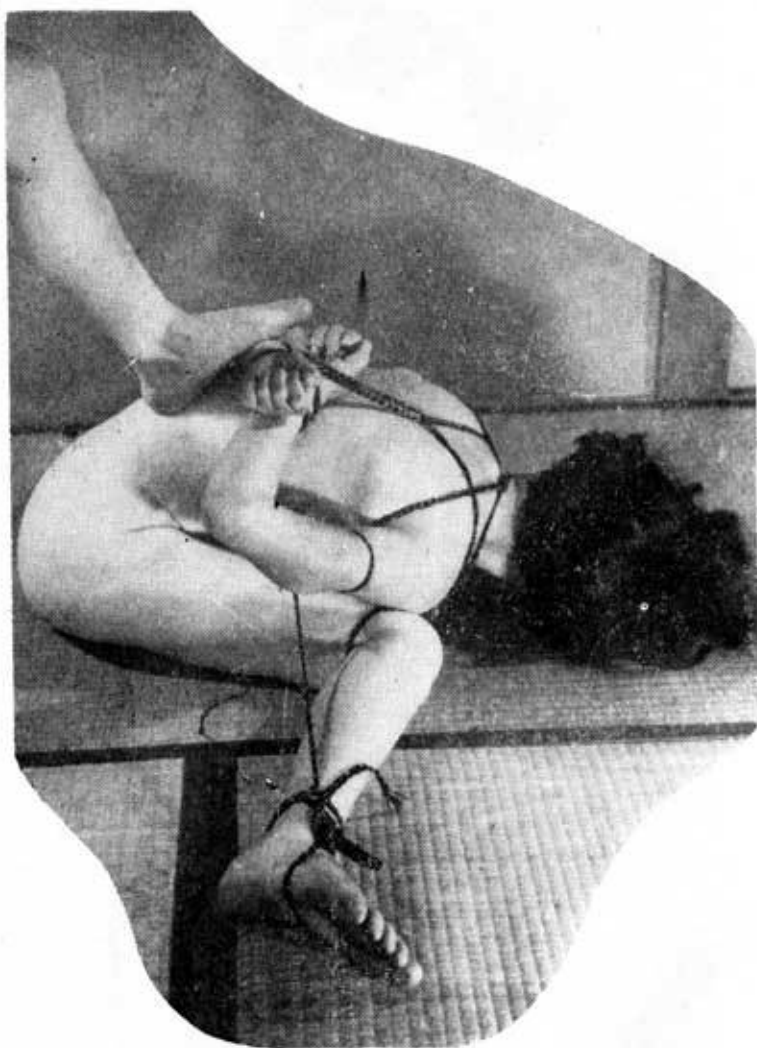
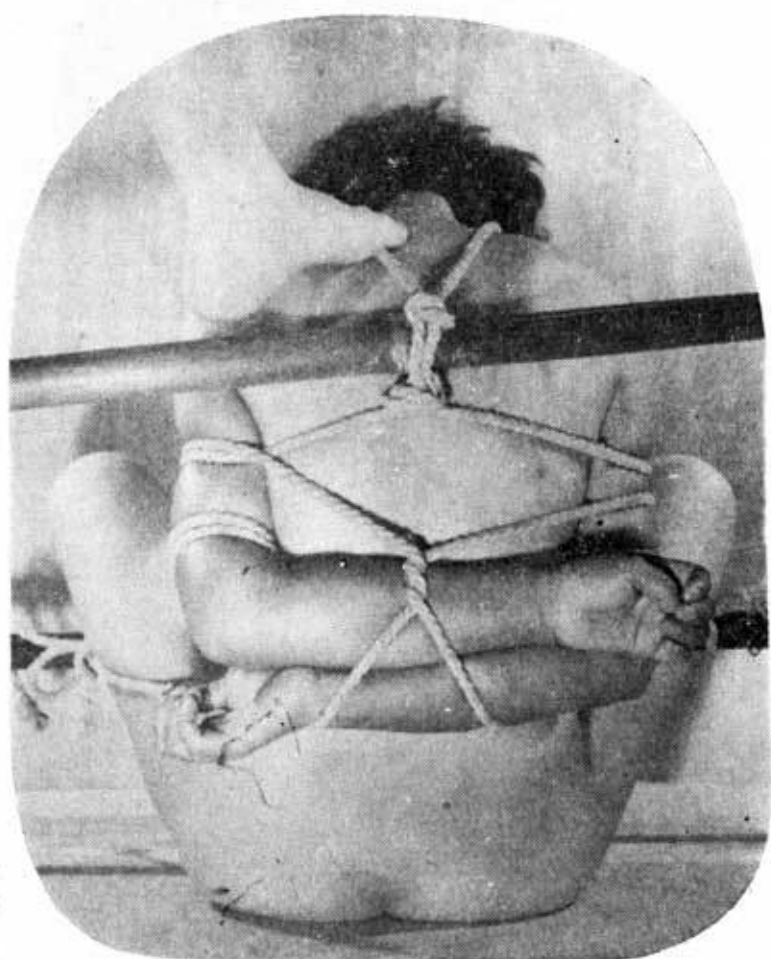




責め写真のアルバム

愉^ゆ

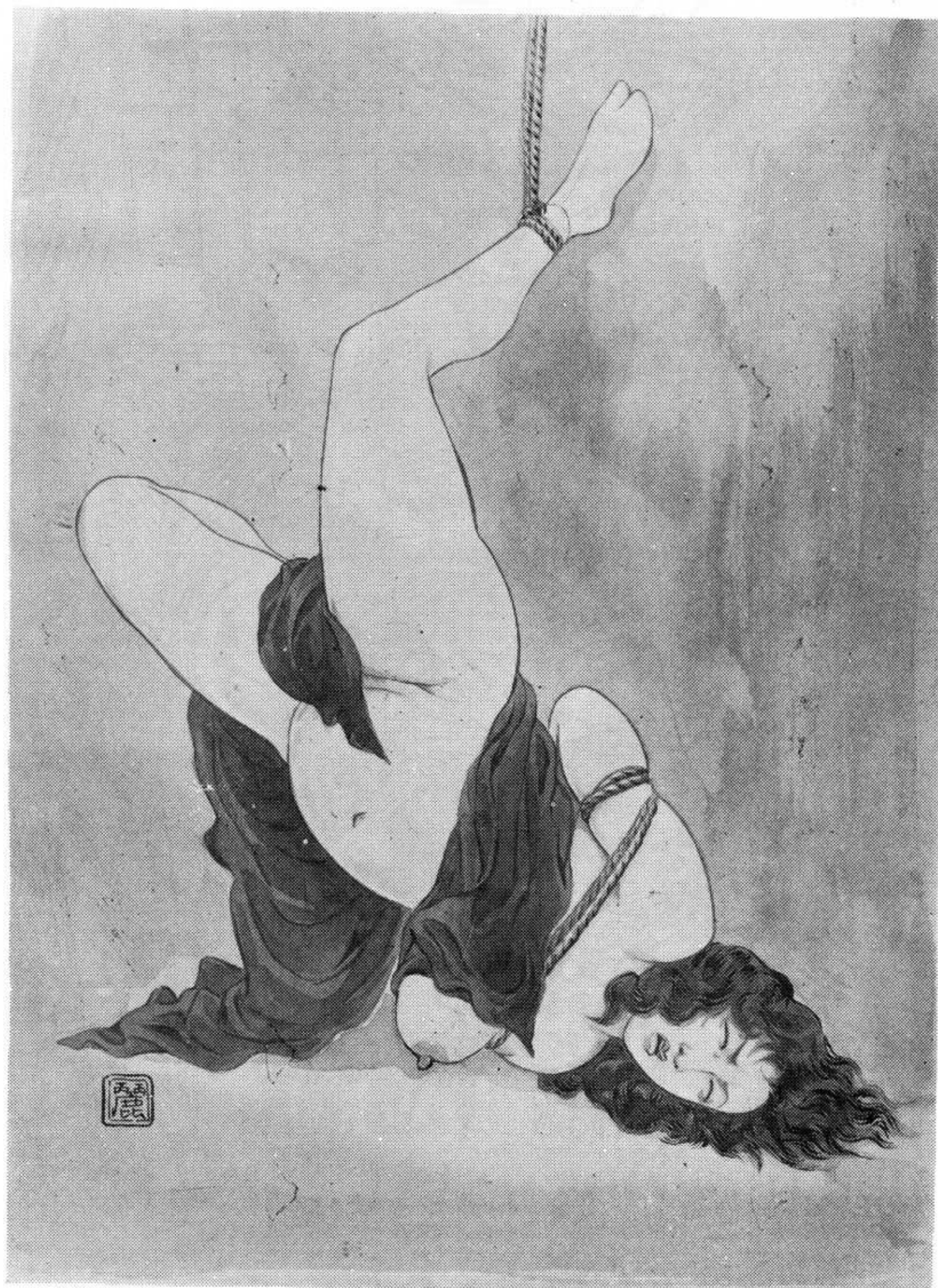
悦^{えつ}



苛^か責^{しやく}

妊婦の片足吊り

瀧 麗子画



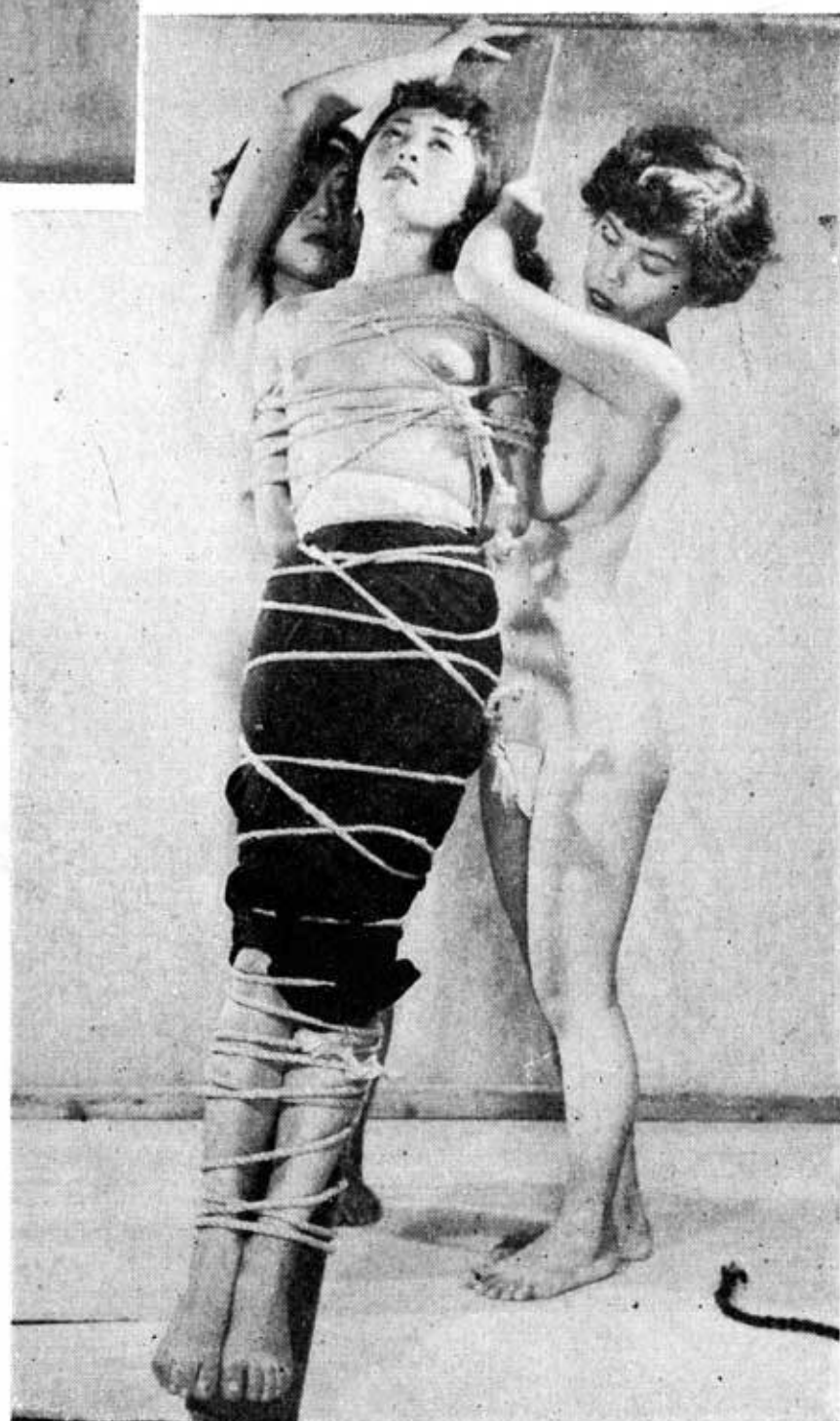
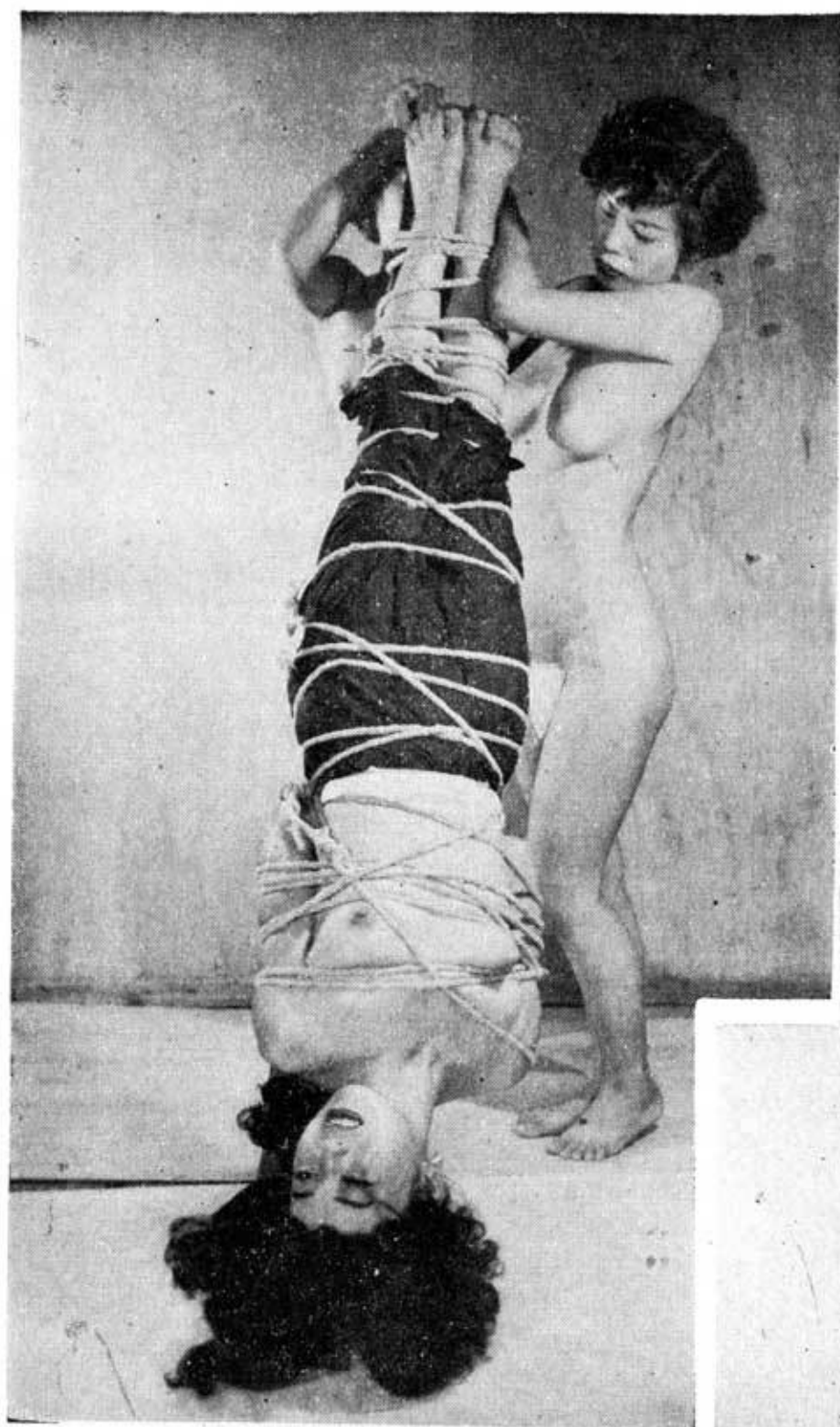
め責の裏屋楽





案と画 南川和子

台上の殉教者

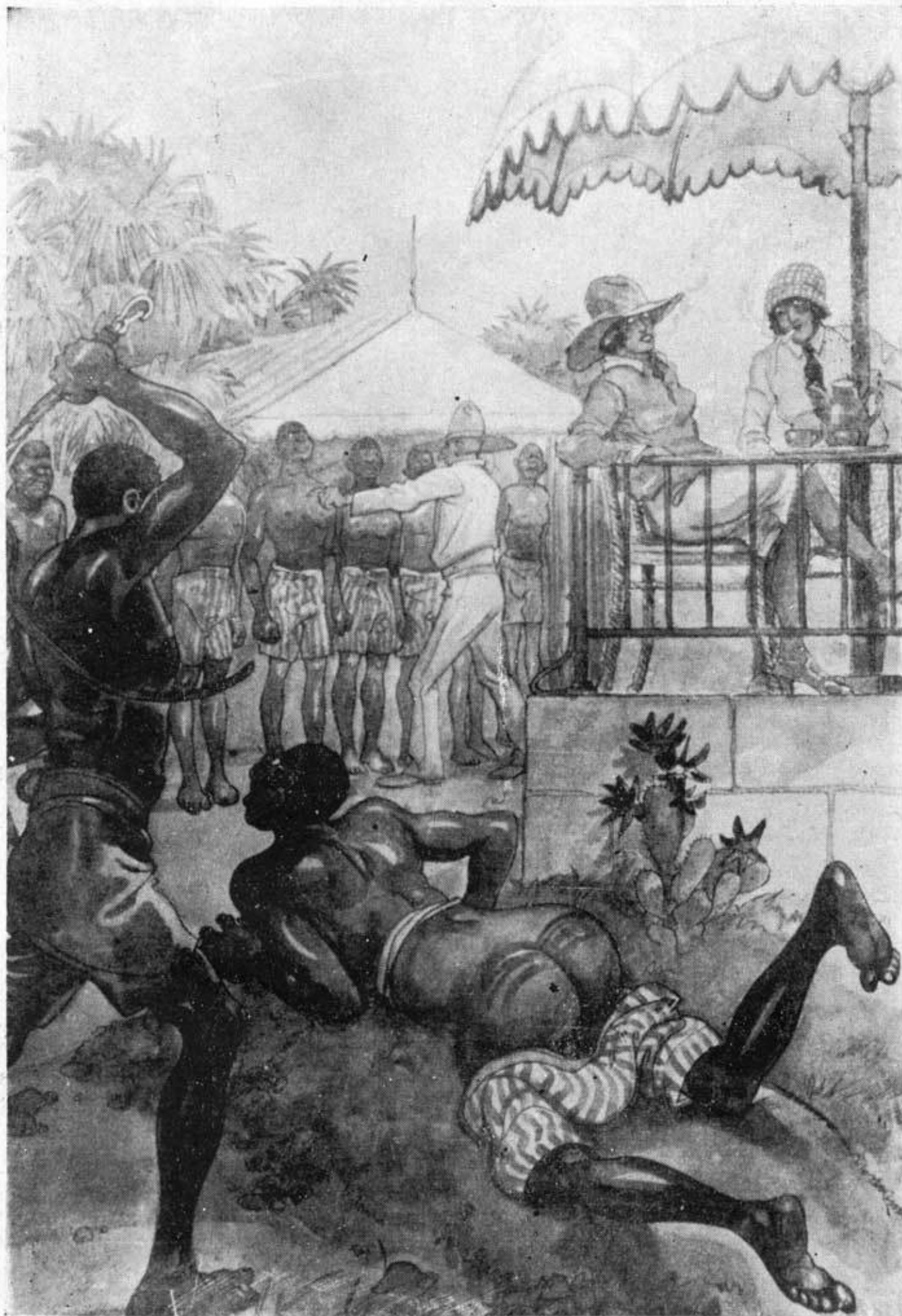


辻村 隆・指導

残虐なる女性たち

森本愛造・解説

(一)



(一) 南部奴隷小説の挿画、黒人奴隷の懲戒である。用いられる鞭は草（多くは水牛草）製で日本陸軍の驂馬鞭と同形、一打ちよく血

を噴かせ得る威力を持っている。尚向つて右側の女は乗馬服、男装でありこの支配者、左は友人の一人である。



(三)



(二)

(四)



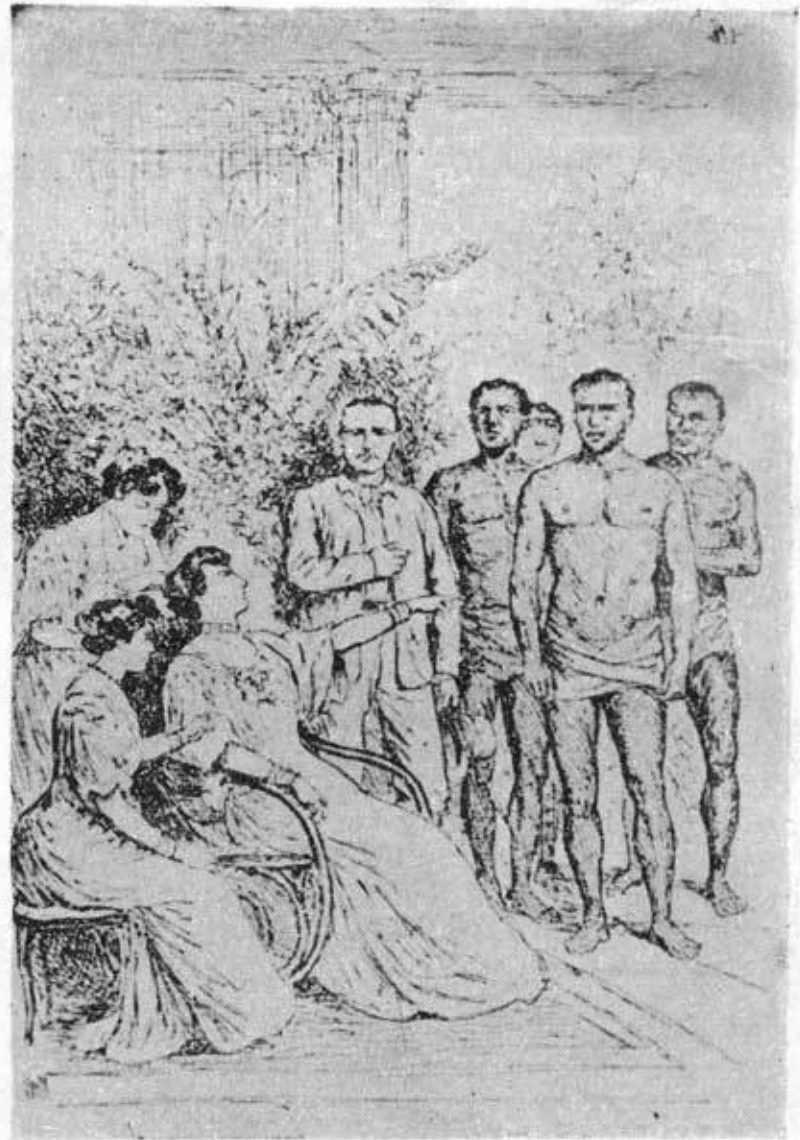
(二) フランス小説の挿画「お茶をのみながら」長い革鞭（牛追い鞭）が題名のイニシアルに用いられている点が珍らしい。子供の表情とこの種の鞭の苦痛が切迫感をもつて表現されている。

(三) 植民地小説の挿絵「強情者を馴しておしまい！」髪をむしられ、腕を逆にとられ、口の

辺りと咽喉とを折檻される女奴隷、左端は女主人、責めているのは同じ奴隷達、女主人の表情の凄まじいこと。

(四) 十九世紀仏国奴隷小説の表紙絵、ドン・ブルンニユ、アラ作「現代の奴隷制」の表紙各国の奴隷が各々民俗衣裳でつながれている。

(六)



(五)

(七)



(五) 十九世紀奴隸に関する
作品の挿絵「刑の指図」座せ
るは女主人、その烈しい表情
のよさ。

(六) フランス奴隸小説の挿
絵「奴隸商人への復讐」天災
の時の奴隸達の暴動を描いた
もの

(七) フランス小説本の挿絵

「ハレムの女主人」立つてる
女主人の高貴な表情、手に持
つてる鞭は奴隸懲戒用のも
の、この次に起る情景を想像
する楽しさに於て逸品であろ
う。

☆

☆

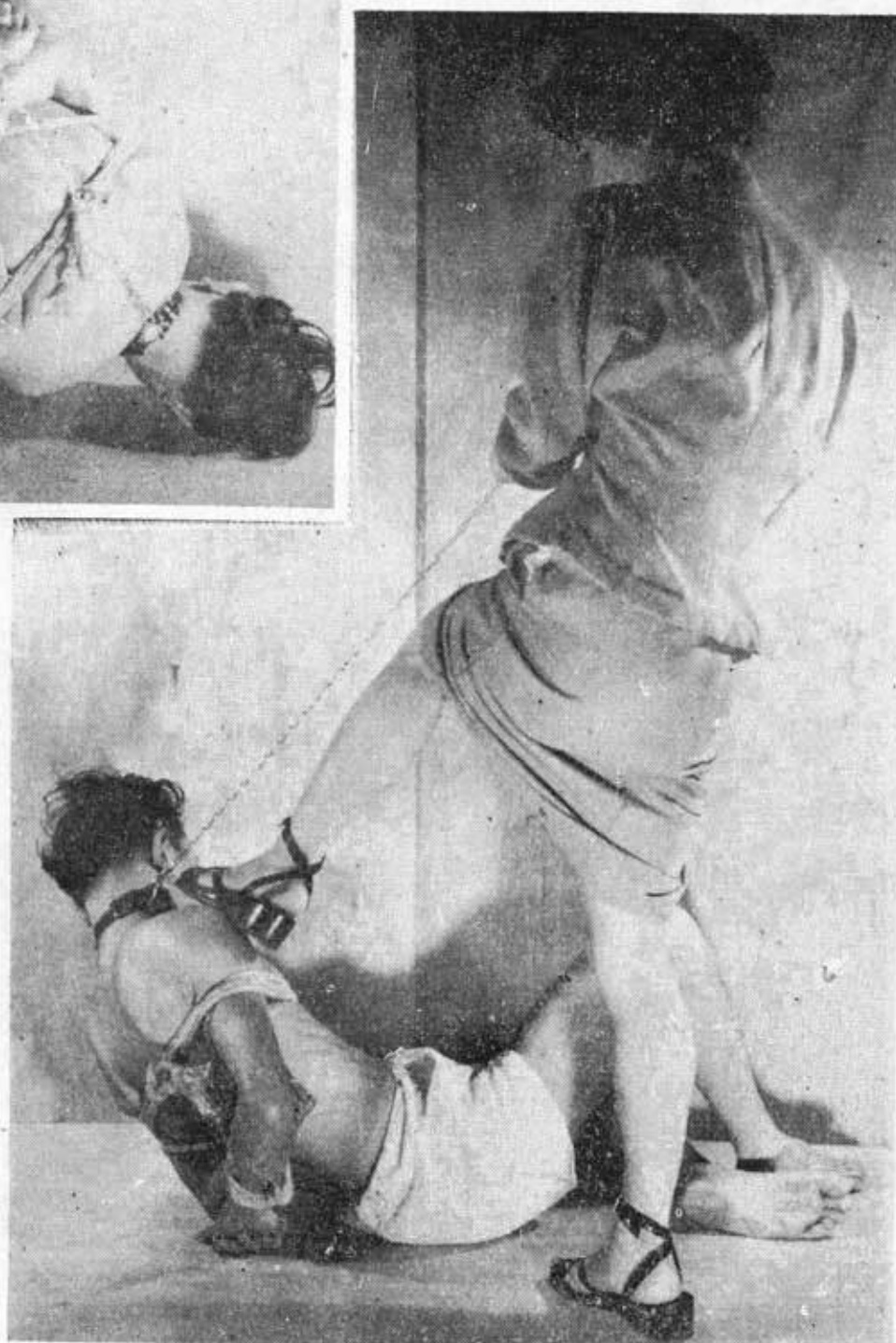
☆

☆

虐^{ぎやく}

待^{たい}

犬におなりよ！



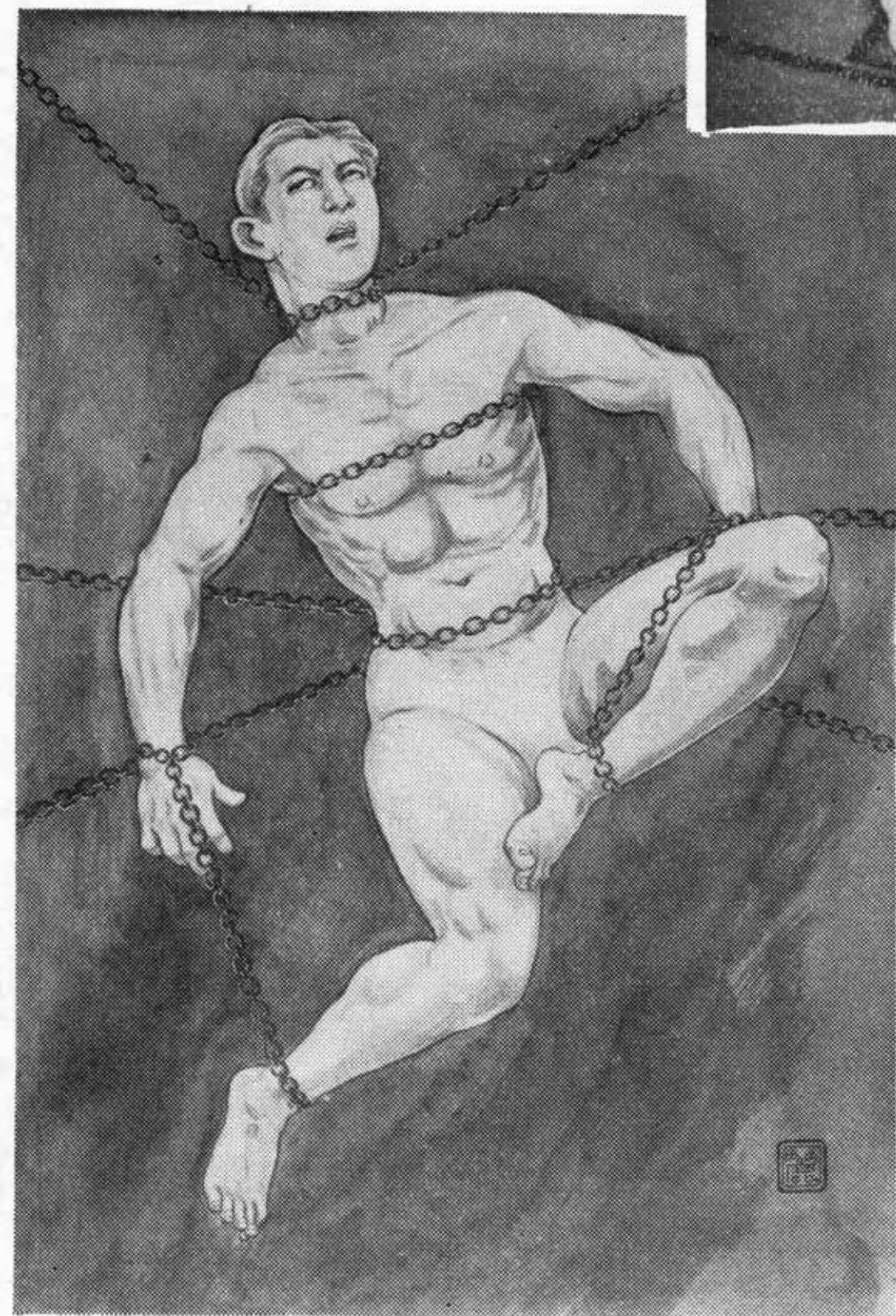
「わたしや、お前のそのにやけた犬面が気に入らないんだヨ、さア犬におなりつたら、犬におなり」

縛
体



蜘蛛
責め

瀧
麗子・画

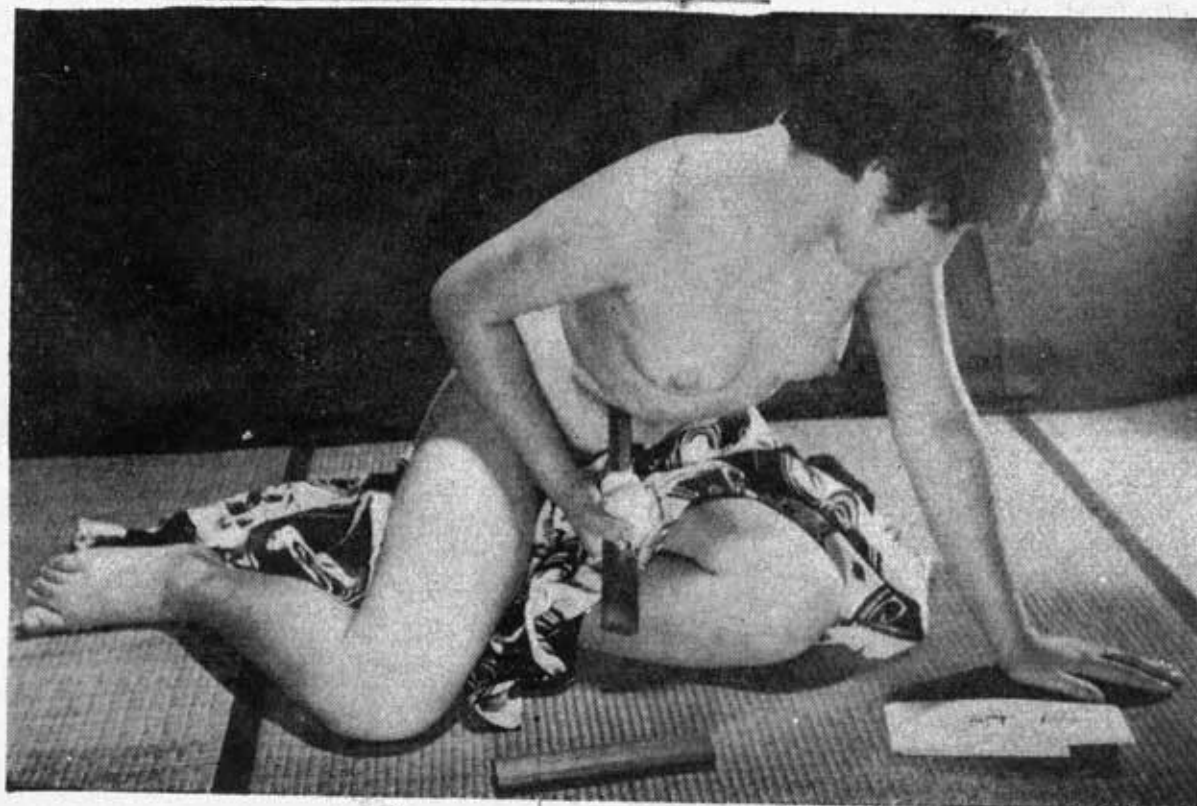


女性切腹の擬態



女性切腹の擬態

先般川合伊都子さんの切腹写真を送られて大いに刺戟され、其の後三人のモデルによつて、ヌード、浴衣、シユミーズ、パンティと或る時は血紅を用いたりして数回に亘つて撮映、こゝにその中の一部を発表した。今後同好者の方々の御進言によつて更によいものを発表したい。御忠言を賜れば幸いである。



三島に於ける原のおせきの火刑



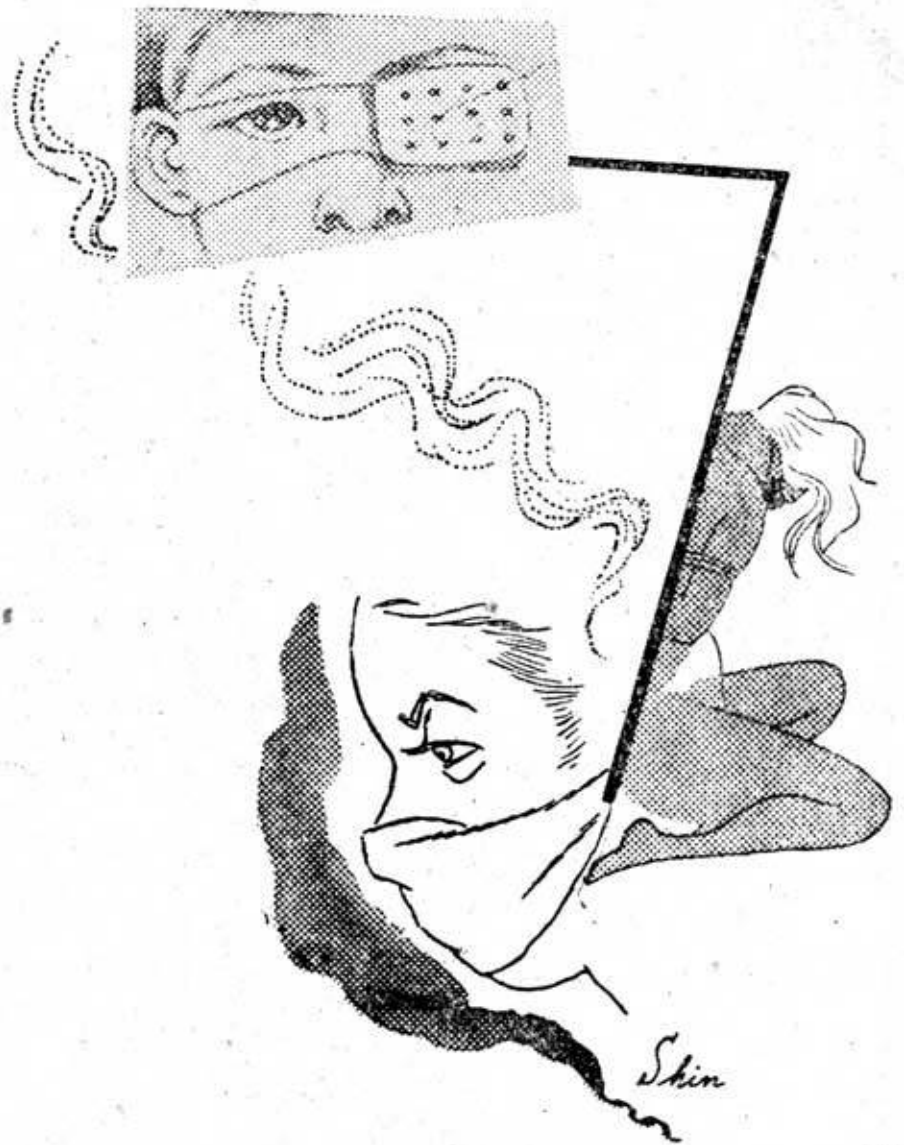
慶応の頃、三島境川の河原で、原のおせきが、放火の罪によつて火刑に処せられた、当日は近郷よりの観衆堤上を埋め、三島明神の祭礼よりも賑かであつたと云い伝えられている、引臼の上に建てられた柱に、おせきを素裸にして縛り付け、おせきの乞により、僅に下腰部に紙を貼り、周囲に茅を積み火を放てりという。

新時代の風俗雑誌

奇 譚 ク ラ ブ

1 9 5 4 年 新 年 号

第八卷 第一号 通刊第六十四号



猿グツワと私

—— 裕子の夜ばなし ——

古川 裕子

古川裕子が典型的なマゾヒストであることは、読者の皆様には、もうよく解つていらつしやる事でございましょう。

裕子はそのような宿命に生れて、三十一歳の今日まで、その泥沼の中をもがき廻つて参りました。しかし今はもう、無理にこの泥沼から這い出ようなどとは思わなくなつたのです、その心の動きは、本誌十二月号の私の「凌辱の幻想と期待」の中にその一部を書きました。

マゾヒスト古川裕子は、ありのままのマゾヒストとして生きるよりほかはない、自分の宿命のマゾヒズムに、これ以上逆らうことはやめよう、自己のこの傾向を冷静に、はつきりと見つめることによつて、この宿命を出来るだけ昇華しよう。これが今の私の心境でございます。

このような考えから、私はこれから数回に亘つて、私の性癖の細部を詳細にお話し、マゾヒズムの女の心理を克明にお伝え致そうと

思うのです、それは一つには医学的な資料として役立つかも知れませんが、また一つにはサディズムの傾向をもつたかたがたや、或は私と同じにマゾヒズムの傾きをもつたかたがたを、お慰めすることが出来るかも知れないからです、私如きものが、何かのお役に立てるとしたら、このような事以外には不可能なのです。ともあれ、それがどのような形であつても、私は何かにお役に立ちたい、これがマゾヒスト裕子の心からの願いなのです。

そこでその第一回としては「裕子と猿轡」と題して、これからお話致しますよう。

「猿轡つわ」とは申すまでもなく人の口に嵌めて声をたてさせぬためのものです、正常のかたには、こんなものに縁があるわけはありません、強盗に入られたりした場合に縛られて、口に嵌められた経験のあるかたもあるでしょうけれど、それは、ごくごく稀な、異常なことです、一般には——殊に女性にとつては、日常生活に猿轡などその片鱗も意識の中に入ってくることはございますまい、日常の話題の中に「猿轡つわ」などと云う言葉が挿しはさまれることもないし、万一、何かの拍子に一言「猿轡つわ」なる単語が出たら、良家の娘さんだつたら、何か面はゆい恥しさを感じて、つとめてその話題から離れるか、又は、そしらぬ顔で聴えぬふりをして次の話に移つてゆくのではないでしよか、全然この言葉に無反応な女のかたもありましょうか、しかし（これは私の想像でございますが）このような自由を奪われるという異常な想像が附随する言葉には大抵の女のかたが（実は、大部分と云いたいのですけれど）程度の差こそあれ、その言葉を聞いただけで、特殊な感情

を持たれるのではないでしよか、私のような異常者が正常なかたがたの心理を想像することは「顧みて他を云う」類いになるのですけれども、私にはどうもその思われてならないのです、それは「恥しき」かも知れませんが、或は「まあ嫌らしい」と云う嫌悪の感情かも知れませんが、又「怖い」と言う恐れかも知れませんが、或はそのような言葉を口にする人に対する特殊は軽蔑感かも知れませんが、何れにしても普通の会話の中の言葉とはちがつた、特殊の響きを持ち、それに対して女は特殊の反応をするように私には思われてなりません、これは「縄」とか「後手」とか云う言葉も同様です、これらの言葉は、私にはどうしても「性感」とむすびついているように思われます、「女」は——勿論正常なかたを含めて——これら自由を奪われる連想をよびおこす言葉に対しては、本能的に自己の貞操の危機を思い、更にそれが犯されることについての想像は、女の性感を刺戟する、「猿轡つわ」や「縄」や「後手」や「折檻」などの単語に対して女が特別に反応するのは、無意識のうちにこれだけの連想観念が働らくからではないでしよか、如何でしよか、私の観察及び推測が間違つておりますでしよかし

ら、勿論これは個人によつてその程度に大変差があることです、しかし結局「程度の差」と私は思いたいのでございます。

私——裕子はその程度が人並はずれて強くその点でたしかに異常な域にありました、その傾向はすでに幼女時代からあつたようです。

「囚衣」にも書きましたように、それが、ばつくりとした形をとつたのは、思春期に入つて「自瀆」を父母に折檻された時からですがそれ以前にも、たしかに私には、その傾向が強かつたと云わねばなりません、すでに、おかつば頭の小学生の頃に、人が縛られたり、猿轡つわをはめられている絵などを見ると、身体中が真赤になるような恥しさを感じました、再び御本のそのページを見ることが出来なかつた程です、しかも心の中では、もう一度見たくて見たくてたまらないのですが、恥しさのために、現実にはどうしても見る事が出来なかつたのです、心の中に燃えさかる「見たい」と云う欲望と反応に、手は、指は



動かなくなつて決してページを開こうとしな
いし、目や頭は決してその方を見ようとした
いのです、妙なことに、そのような絵を見て
いたことを他人に見られた時は、もう身も世
もない恥しさでした。自分が縛られ、猿ぐつ
わされているのを見られたと同じ恥しさだつ
たのです、そのような絵を、やゝ長くしげし
げと（但し他人のいない場所で）見られるよ
うになつたのは、父母の折檻によつて私の異
常性が、はつきりとよびさまされたのちのこ
とだつたのです。

小学生時代の私に、もう一つ苦手がありま
した、これも猿ぐつわと強く関連しているの
ですが、それはあの「マスク」です、私が今
書きますものに、始終「マスク」がつきま
つて出てくることに皆様もお気付のことでご
ざいましょう、正常の人々にとつては、何の
変哲もない単なる「感冒予防」の道具にすぎ
ないマスクが、私にはひどく刺戟的なものだ
つたのです、父母は小さい私に冬になるたび
に必ずマスクを与えて、口と鼻とをすつぽり
蔽わせて学校にやりました、現在は、殆ど白
いガーゼのマスクにきまつてしまつたよう
ですが、当時はいろいろなマスクがありました
黒くてゴム紐のついたもの、赤や紫のビロー

ド製のもの、まるで嵌口具のような防水布製
で、たてに二列に孔があいて菱型をしたもの
それはそれはいろいろな種類のものがあつた
のです、私は主に黒いマスクを与えられまし
た、毎朝学校へゆく前に玄関で母が新しいガ
ーゼを（たしか中のガーゼは毎日とりかえて
くれたと覚えています）出してきて、手ず
から私にかけさせてくれました、そうして、毎
日きまつたように、学校の往復には決してマ
スクをとつてはいけない、もしマスクをしな
いで帰宅するようなことあつたら、おやつを
あげませんよ」と、私に云いきかすのでし
た。実際、マスクをはずして玄関を入つたよ
うな日は、決しておやつはもらえなかつたの
です。

今にして思えば、母もたしかに「マスク」
に対し（ひいては猿ぐつわに対し）異常感覚
を持つていたのではないかと思ひます、私の
「マスク」への特別な感覚は、むしろ母から
の遺伝のようです。

とに角その頃の私は、母から強制的にマス
クをさせられていたのですが、私はマスク
が嫌いではありませんでした、その証拠に一
人でおるときは、しきりにマスクをしてその
顔を鏡にうつしたりしたものでした、しかし

マスクをかけた顔を人に見られることは、本
当に恥しいことでした、従つておもてをマス
クをしたまゝ歩くなどと云うことは私に出来
たことではなかつたのです、ですから母から
マスクをされると、家を出るや慌てゝはずし
てしまい、帰りも家の一丁程さきからマスク
をして何くわぬ顔でかえつてくるのです、そ
れでも人に会うと顔をそむけ、なるべくうつ
むいて歩いてきました、その時は何故そんな
にマスクが恥しいかわかりませんでした。

今は、はつきりわかつています、それはマス
クが直ちに私の心の中で猿轡をむすびついて
いたからです、つまり私にとつては、マスク
をしている顔を見られることは、猿ぐつわを
はめられているのを人に見られるのと同じこ
とだつたからです。

こんな気持は長くつゞきました、とに角マ
スクが人の前で平気で、いやそれと意識して
猿ぐつわをはめられた顔を人前にさらすと云
う感覚を充分にもち乍ら、却つてそれを樂し
むようになれたのは最近のことです、自分だ
けでなくて、他の人、殊に女の人のマスク姿
は私を興奮させ、当時の自分では表現出来な
い感情におそわれました、「あの人は何故恥
しがらないのだらうか」と、



大分マスク談義がつづきました、御退屈でございましたでしょう、私のこの感覚は特別なもので、一般的なものではないようです。

何故ならマスクについて同感の意を表するかたは、甚しく稀であつたからです、先日「奇譚クラブ」の誌上の読者通信欄に眼帯とマスクに魅力を感じるとのべられたかたがありました。このかたはどうやらマスクよりも眼帯の方がもつと魅力的らしく思われますがともあれ私と同感のかたが一人でも居られることを知つて、何となく安堵のような感じをもちました。

でも一般に日本人は——特に日本の女のかたは、マスク好きなのではないでしょうか、日本にくる外国人が例外なしにびつくりすると云われていますけれど、实际需要以上口と鼻とを掩う、この鬱陶しいものが、好きなようです、たとえば看護婦さんなどは、職業上必要な場合も多いのでしようが、誰の目にも余り必要のないときでも、しかも夏の盛りでもマスクを離さぬ看護婦さんもすくなくあり

ません、また普通のかたでも、夏などちよつと咽喉が痛むとなつて、外でこそかけませんが、家の中ではマスクをしている人をよく見かけます、これは私の色眼鏡かも知れませんが、とに角「好き」なことには間違いないようです、これらを全部「猿ぐつわ」への無意識の感覚、ひいては、マゾヒズムの性感とむすびつけることは無理でしょうが、一部はたしかに間違ひはないと思います。

それと引き合せて考えられるのは、西洋の猿ぐつわは、(映画や小説で察するところ)

実用一点張の舌をはさんで、口外にひき出し二本の木片のようなもので挟んでむすぶとか、歯と歯の間に布片をかませ、頸のうしろでしばるとか、そのような形が多く、余り鼻と口とをすつぽりと掩つたあの日本式のやりかたを見かけません。それに反して、日本では、

——殊に昔は——全く例外なく猿轡は鼻と口を掩う式のもので、これが何か私には、現代の日本人のマスク好きと関係があるような気がするのですが如何でございましょうか。

さてそのような時代を過し、幼女から少女になり、漸く思春期に入つた私が、オナニーにおぼれていつたことは、「囚衣」にも記し

ました、私のオナニーの際の幻想は、思い出す限り、縛られたり、マスクや猿ぐつわをされることでした。ですから、このオナニーを発見されて厳格な父母から、きつい折檻を受けるようになったのは、私にとつては、むしろ渡りに舟、望むところであつたので、私のマゾヒズムはこの父母の折檻によつて開花しそして完成したと申しても云い過ぎではありません、今はもう亡き父母のことを、このような文であげつらうことは、私にとつて辛いことですが、何もかも知りつくした現在の私から見れば、私の父母殊に母が私と全く同じ傾向をもつていたことは疑う余地がないようです。私の性癖は明らかに母よりの遺伝と申しても「事実」にたがいはいたしません。それでなければ、学校の往復にあれ程、マスクを嚴重に強制したり、折檻の際、普通では必要と思われない、大きな厚いマスクとわざわざ特別につくつて、縛られた私に「嘘をついた」かどで嵌めてしまうということは考えられません、このマスクは私の受けたお仕置にはつきものでした、ですから後には、そのマスクを見ただけで(条件反射とでも云うのでしようか)オナニーやそのお仕置の性的快感にむすびつくようになってしまつたのです。



更にもう一つの良い証拠には、たび重なる折檻は、その程度がだんだんひどくなり、縛られかたや背中の手首の吊りあげかた、縛られている時間の延長とともに、マスクが手拭の猿ぐつわとなり更に、口の中にまで布片を入られるようになったことです。

私のこのような折檻は、最初は父母だけでなく他人には見せない場所で行なわれましたが、後には庭などで、いやでも女中たちの目のふれる場所でされることになりました。そのよ

うな姿を女中などに見られることは、死ぬ程恥しいことでした、そつとそばによつて、縄や轡をゆるめてくれる女中もありましたが、縛られた私をニヤニヤしながら、つくづくと眺めたのしみ「お嬢さん、お苦しいでしょうね」とは云つても一向、助けてくれないものの方が多かつたのです。

私は今でもそのような女中たちの目を覚えています、それはたしかに快感に興奮した目でした、決して単なる同情ではありませんでした、女は誰でもこのような姿を見ることに好奇を興奮とを感じるようです。

こうして私のマゾヒズムはマスクや猿ぐつわなど、声を出せないように口鼻を縛られると云う行為に密着して成長していきました。

たゞもう一つつけ加えておかねばなりません、私は猿ぐつわに対し単なる発声の自由を奪われると云うマゾヒズム的な快感のほか、現実に呼吸をとめることにより下半身の局所の甚しい充血感を感じるのです、これは全然性感とは離れて（と信じられる）場合でも同じなのです、柔道をなさる男のかたが首を締められ

所謂「お、ちる」問きわにエレクトロンをされると云う話をきいています、また首を吊つた人の局部は充血しているとも聞いていますですからこのような感覚は私だけではなく誰にもあるものと見えます、たゞその程度が私は人様より、はるかに強いのではないかと疑うのです。本当に、単に手のひらで口と鼻とおさえただけで敏感にこの肉体的反応を自分で感ずることが出来るのです、だからマスクのような、相当自由に呼吸が出来、その抵抗もすくないようなものでも、それをかけている間中、私の下半身の充血感を感じていることを正直に申しあげねばなりません。

この被虐感と肉体的感覚とは別々なものかも知れませんが、又一つのものかも知れませんが、とにかくこの二つが私をマスクや猿ぐつ

わに執著せしめ、これがなくては満足出来ない現在の私をつくりあげたのだと、はつきり申しあげることが出来るのです。

現在の私は、こうしてお仕置の場合に猿轡がなくては、その興味が半減する程になっています。しかし猿ぐつわと云うものは、あれで案外嵌めるのがむづかしいものです。

勿論私の場合など、殆ど抵抗しませんから充分の余裕をもつて、かますことが出来るわけですが、大抵のやりかたでは、はめられた本人が何とかして、はずそうと努力すれば、比較的容易にはずせるものなのです、これは実験してごらんにもなれば、すぐおわかりになります。自分でも自分の口へ心ゆく程お嵌めになつて、手をつかわずにはずしてごらんさい、大概の嵌めかたでは案外にあつさりとはずれてしまいますでしょう。

ですから女の人にお嵌めになる場合は、すくなくとも顔面の筋肉しかうごかせない程度に——即ち後手にして首にも縄をかけて柱にしつかりと頭を括りつけて、うつむいたり、あをむいたりする自由を最少限度になさなければいけません、それでなければ女のかたが猿ぐつわをはずそうとして畳の上をもがき廻つたり、縄に轡の手拭をこすりつけたたりす

る動作をお楽しみになつて、やつとはずれそうになつたら、悠々とまたしつかりと喰ませてしまふといった心理過程を享樂なさるのが宜しいと思います。

問題は猿ぐつわの喰ませかたなのですが、単に口の中に布片をつめて、その上から口だけ又は口と鼻とを、ともにおうて、うなじの後で括るというやりかたをするから、はずされてしまうのです、尤もこの方法でも前述のように首を動かさなくし、出来るだけ充分の布片を口の中に押しこんで顎を動かすことが出来なくしておいて、口鼻をおう布片は充分に幅の広いものを用いて、しつかり適当な高さで後で結べば、ある程度まで、女のひと自身でははずせなくし得るものです、しかしこの方法は、かなりむづかしい、頭のうしろで結ぶにも高すぎれば顎ばかり押さえて口や鼻がゆるゆるになつてしまふし、結び目が低すぎれば、鼻の頭ばかりぺしやんに押えて肝心な口の方は、すき間だらけになり何の雑作もなく口内の布片を吐き出されてしまひます。

ですから猿轡の布はなるべく長く二重にも三重にも口と鼻を巻ける程のものでなくてはいけません。

一番確実なのは、まず布片を出来るだけ、いつばいに口の中につめこみ、舌と下顎の動作をおさえてしまひます。この時、犠牲者の口はいつばいに開けられた状態になつてゐるわけですが、それから細縄（細引のような）或は革の細いバンド、又は噛み切られる恐れがなければ腰紐のようなものを、齒と齒との間に入れ、三重にも四重にも廻して締めあげます、丁度西洋風の猿ぐつわの状態になるわけです。このようにされた女のひとは、これだけで結構発声の自由を大部分奪われ、せいぜい言葉にならぬ呻き声程度になる筈です。こうすれば、いくらもがいても絶対はずれるものではありません。しかし口の中に一杯に布片をつめられ、細縄を齒の間に通してしめあげられた女の人の顔は決して見よいものではありません美しい顔をそのような悲惨な状況にして眺めたいと、おつしやるなら別ですが、そうでなければ、もう一枚幅広の布で口鼻とすっぽりとおうて、細縄にみにくくゆがんだ口や頬をかくしてしまつた方が宜しいのです、こ



れをすることによつて、ますます自由をより一層奪うことにもなりますし、女の目だけの苦悶の表情は捨て難いものでありましよう。

これは完全な猿ぐつわの仕方です、しかし皆様がお楽しみになるには、こんな完全な猿轡は苦しすぎて却つて興をそぎましよう、たしかに猿ぐつわの第一目的は充分に達し得ますが、多くの場合は、そればかりが能ではございませう、口中の布片は適当量で宜しいのです、又吾妻氏がよく書いておられるように、少々あいまいな言葉が云えた位の方が却つて面白いものです、口を掩う布も種々の工夫があつてしかるべきです、相手の体臭のしみこんで汚れたものが賞用されることは云うまでもございせん、それは男のかたからすれば凌辱感をあおりたてますし、女のかたの方からすれば被虐感をたかぶらせるものです靴下なども宜しいですが、結局一番徹底しているのは、お互の性的な分泌物のついたものその臭いのしみこんだものでしよう。

私はよく夫の汚れた下帯を口の中につめられ、それから自分自身の経血に汚れた黒い月経帯のゴムの部分で口をおゝわれました、それは一面では生臭く不潔感があり、一面では云いようなない特殊な陶醉感をもつもので

す。

女のかたには男のかたの下帯、男のかたには女の人のズロース又は月経帯、こんなものがお互に自由に用いられ楽しまれるようになれば被虐加虐の遊びも漸く奥義に達して来たと云えましよう。

口内につめる布の性質は、前述のように下帯やメンスバンドを用いる以外、なるべく唾液を吸いとつてしまふような、脱脂綿やガーゼも面白いものです、但しこの時は余程多量につめなければなりません、ボクシングの選手が試合中に口内に噛んでいるゴム板などを二、三枚入れておく方法もありますし、プラスチックの球をポンと一口の中に放りこんでおくことも出来ます、この程度ですと、不明瞭でも何とか言葉になつて、何度も聴きかえせば、意味がわかるので、こう云うのを非常に喜ぶ場合もあります。

口をおおう布はなるべく厚い幅のひろい柔かいものが宜しいと思います、あまりガサガサした、こわばつた布は適当ではありません絹布のような、うすいが、ぐつとしまるものが良いと推賞するかたもあります。

うすいゴムやビニールで、すけて見えて、何とか言葉を発しようともがく、唇を見てい

るのも一興でしよう。

私は呼吸が苦しければ苦しい程快感を感じるので、好んでゴム布などを用いましたが、これは必しも一般的ではないでしよう、むしろ余り苦しくないやりかたで雰囲気を楽しむかたの方が多いのではないかと思ひます。

たゞ、本当のマゾヒストの女のひとならば呼吸をとめてしまつて殺さない限り、なるべく苦しい猿ぐつわをさせるのが、それをより早く征服する道です、要するにマゾヒズムの程度により。又、その時その時の気分によつて、いろいろ工夫し趣きをかえるところに面白味があるので千変一律、いつも同じではつきりません、又口だけを掩うて鼻を隠さぬやうかたもあります、表情を見るには、たしかにこの方がよく。又、口をおう布自身が幅が狭い場合には、こうするのもやむを得ませんが、裕子一個の好みから申せば、やはり幅広の布で口と鼻とを掩うてしまふ方が快感があります。

更に猿ぐつわと云うものは、なるべく長く嵌めておくものです、出来れば一日でも二日も喰ませ放ししておくのです、食事の時や或は一定の休養時間をかぎつてはずし、また時間が来たら容赦なく嵌めてしまふ、これ



はマゾヒストの女にとつて、たまらない折檻です、私は最高五日間こうして猿ぐつわを喰まされ放しにされたことありますが、猿ぐつわのまま、夜は寝かされました尤もこのように長い時は、適当に加減をした喰ませかたが必要で、時間が経つに従つて苦痛は次第に増します、流石の私も五日目には、ものの云えない口で、涙を流して哀願し、それまで拒否していた恥しい折檻を、おとなしく受

ています。

こうした、当り前の猿ぐつわのほかに、いろいろな口枷、嵌口具を工夫致しました、主にマスク風のものや、馬の轡やかせのような金属性のものなどでした、刑務所で用いると云う防声具はマスク風のものだと云うことですが、私たちもゴムバンドを五方につけたゴム製の轡をつくり、ゴムぐつわと称していましたが、黒い厚いゴム製で呼吸のための小孔を

× けることを代償にやつとはずしてもらいました。

そのため股をひらかせられて縛りつけられ身をよじる程の恥しさを味わされたことは、未だに忘れられない思い出となつ

つけ幅の広いゴムバンドで口と鼻とおうえしつかり頭に固定されてしまいます、一見口おうい式のガスマスクのようです、普通の猿ぐつわより一段軽いお仕置の時に嵌められるのが常でしたが、一方猿轡より長時に亘つて用いられ、夜中の雨の中で樹に一晚中括られている場合に嵌められていたのは、主にこのゴムぐつわでした、明るい自宅の椅子をおいて応接間に、夜、夫とさしむかえて椅子に座り夫の方は、お茶をのみ、和菓子をつまんで、ゆつたりとくつろいでいる正面に、私が後手鏡に足枷と云う姿で椅子に腰かけ、黒いゴムのくつわをはめられて、うなだれていると云う場面は珍らしいことではなかったのです。

自分の経血のついたメンスバンドの黒いくつわについては、私の「長期刑」でも書きました、経血と云うものは、勿論生臭い血の匂いいがしますが、普通の血とは匂いがちがうようです女の匂いと云うのでしょうか、一種独得な重苦しい悩ましい匂がして、長く嵌められていると、いやでもその一部が舌にふれて来ますするとこれはひどく苦いのにつくりします古くなつたメンスの血は苦いものだと云うことを御存じのかたがございましたでしょうか

とまれ、やはり猿ぐつわは裕子の生活にはなくてはならないものです、恐らくは加虐被虐の世界に遊ぶかたがたにとつても、これはまことに重要な道具でございましょう。

實際猿ぐつわで遊ぶ方法は限りがありません、しかも調節が自由に出来て、非常にデリケートな感覚を遊ぶことが出来ます。

吾妻氏が、「猿ぐつわのかけかたを見ればその人のサディズムの洗練の程度がわかる」と云われたのは至言であると思います。

裕子はこの責め道具に憑れています、いく

ら縛られても、いくら鞭打たれても、いくら吊されても猿ぐつわがなければ、気の抜けたサイダーのようにしか感じられないのです。

多くの女性のかたがたには想像もつかぬような異常性でしょう、気狂女——裕子のこと、皆様はそうおつしやるでしょう。

そうです、たしかに狂女なのです、でも御寛大な皆様に御迷惑はかけないつもりであります故。この世で、このような女が楽しむ片すみを、そつと指をふれずに知らぬ顔をして残しておいて戴きとう存じます、裕子はその

片隅で小さくなつて暮してゆきます。

今夜は長いおしやべりを致しました、おこがましくも「裕子の夜ばなし第一回」としたこの長談義を皆様は笑つて読んでくださるでしょうか。マゾヒスト裕子はもう寢床にゆきます、マゾの永遠の女囚——これ以外に私の名はありません、今は一人の裕子は、今夜も一人寢床の中で惨らしいマゾヒズムの夢でも見ることに致します。お休みなさい、静かな眠りが皆様のの上にありますように。(終)

悦^{えつぎやく}虐^{もだ}に悶^{もだ}える

川 端 多 奈 子

長い廊下を通つて案内された部屋は離室になつていて六帖と四帖半の二間続きの向うは御不浄になつています。雨はまだ止まないらしく既にもう暗くなつた窓辺で激しい音を立てています。それがかえつて一層この部屋の静寂さをかり立てゝいるようです。

私は強い力で前へ倒されて右頬を畳へ押しつけられました。まだ十分乾ききらない髪の毛が額に垂れてまるで目隠しされたようです。「イヤ、イヤツ、イヤヨー」口ではそう言い乍ら、私は次第に全身の力を抜いてゆく自分を齒がゆくさえ思つていました。前で結んだ

帯が荒々しく解かれるなり、下着もつけず素肌になつた浴衣が乱暴にむしりとられて隅へ投げつけられたのも、ぼんやりとした視線でよそ事のように眺めていました。争えば拒むことが出来たのに、いつしか前についた右手さえ後へ廻している私でした。

でも、彼には恰かも拒んでいるのに無理に後へ廻されたように見せかけはしましたが、本当は私は自分から後へ手を廻していたので、両手首に浴衣の紐がからむと首へ廻つて、ぎゅつと締めつけられました。私は思わず「ううう」と呻めいて身体をうしろへもたせかけました。ともすればうつとりする気持を押えつけて、両足を前へ投げ出すと、バタ／＼と抱きかゝえたまゝ、乳房をくびるように胸へ紐をかけ終ると、ドンと畳の上へ転しました。私は両足を前へ投げ出していたのでスト

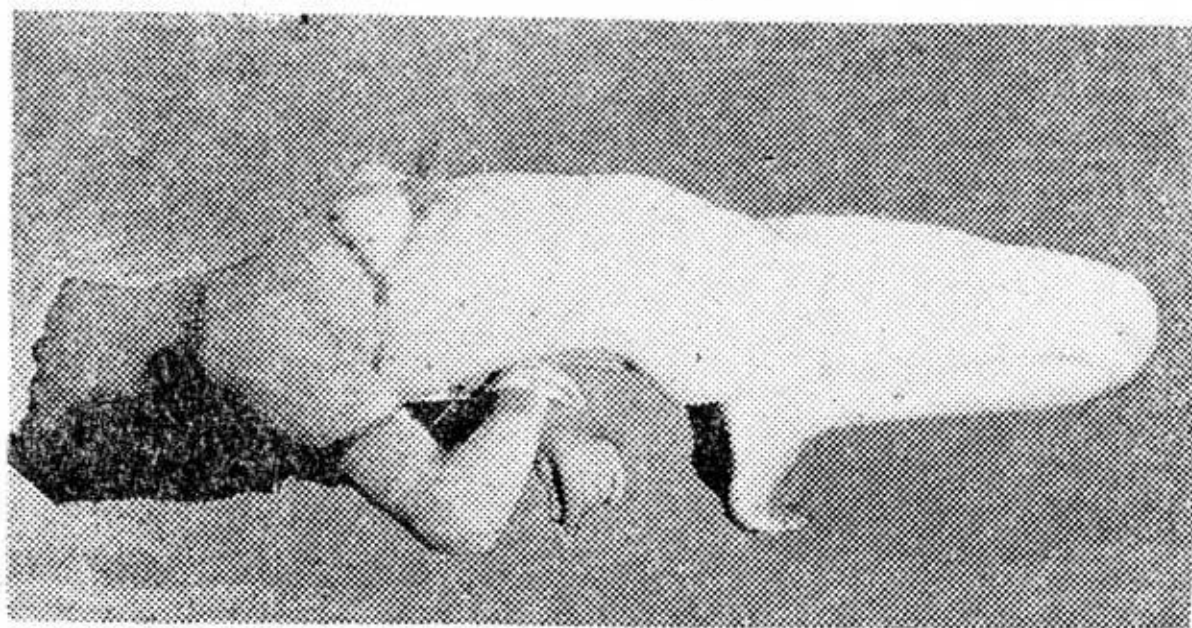
ンと仰向けに倒れて後手をいやという程背中と畳の間で打ちつけました。今迄こんな乱暴なことをされた事はなかったのですが、ジンと全身に響く疼痛は嫌なものどころか忽ち私の全身をカツと燃え上らせました。二の腕と胸に掛つた紐が肌に喰い込んで締めつける痛さよりも私は喜びの表情を出さないようにこらえる方がむしろ苦痛でした。

あゝ、こゝで弱味を見せてしまつては駄目だ、と思いつゝもいつしか私はぐつたりとなつていました。そんな私の姿を両腕を組んで立つたまゝで冷然と眺めていた彼は「裸のまゝで風邪をひいてはいけないからね」と独り言いつて押入れから掛蒲団を出すと、フワリと私の全身を覆つてくれたのです。樟腦臭い匂が鼻にきて燃え上つていた私の肌に蒲団の感融がひんやりとしました。敷蒲団はないのです。畳の上にじかに後手首縄で弓のようにそり反っている私。

然し蒲団を掛けられてみると、

そんな姿の私とその蒲団の下に蠢めていると誰が想像するでしょうか。上半身の重みが両手首にかゝつて痺れるようになってくるので、私は両足を曲げてお尻の下へかい込むようにして、出来るだけ頭の先とお尻とで全体重を支えようと思いました。だけれど一度ゆるめた両手首の痛さは今迄にも増して急激に迫ってきますし、第一そんな恰好で長く辛抱してはいられません。「そのまゝ、朝迄我慢しているさ」

彼は蒲団の下でもぞ／＼している私を暫く見下していましたが、予想したように私が悲鳴を上げないのでそんな捨ぜりふを残して隣の部屋へ去つてしまいました。こゝで私に弱音を吐いて、なんとか縄を解く口実を見つけてようという彼の気持はわかり過ぎる程わかつていましたが、私は殊更意地を張つて一言も喋りませ



んでした。癪にさわつたらしく私を縛つたまゝで隣室へ行つた彼のことがおかしく、私は首を動かして蒲団のすき間から目だけを出すと、気配をうかがいました。

「どうせ、彼にはこれ位の芸当しか出来ないんだわ、もつともつとヒドイ苛め方をしてもかわないのに。こんなことで大した縛り方をしたとでも思つてらんかしら？」

そんな事を考えていました。廊下の向うでは宴会でも始つてゐるらしく、炭坑節をやけに大きな声で唄っているのが三味線や手を拍く音と混つて聞えてきます。賑やかそうなその場の雰囲気の手にとるやうにわかるのが、初めて来たこの旅館の一室で素裸のまゝで縛られて転がっている自分がとてもいとおしくなつてきました。何をしているんだらう？ 隣室からは何の音もしません。いつ迄放つて置くつもりだらう？ 私はようやくく痛さを増してきた紐の喰い込みに舌打ちしながら、ごろ／＼と転つて合いの襖の所まで近寄りました。

晴雨隨筆 (一)

見えざる女の責場

(文と絵) 伊藤晴雨

女の責場を実際に見るのは美しいには相違ない。打たれ叩かれ、身体をくねらせて転々反側して白い内股がチラと見える：そうした場合の艶は好むと好まざるとに拘らず男の心を捉えずに置かない形式美がある。これにはいろ／＼な見方があるだろうがヌード一点張りで頭から逆吊しや皮の鞭でひつばたくより余韻があるかと思うので「見えざる責場」つまり蔭になつて居る責場が舞台の上で非常な効果を挙げたのを見た（或は聞いたという方が正しいかも知れない）事があるので其話を書いて見る事に致します。

「実説番町皿屋敷」を脚色して通し狂言にしたのは前後只一回、大正二年の春、東京赤坂にあつた演伎座で現市川左団次の実父市川九団次の一座で小芝居にあり相な通俗的な脚色であつたが、それが私の見た責場の芝居の中で一番物凄く一番面白く感じた。

それは責場の凄惨味を観客の想像に任せて突ツ放しにした処に面白味があり、其惨虐の程度が如何なるものかを連想させる処の面白味である。以下覚えて居るまゝを記して諸君の想像で責の舞台を幻想して頂き

たいと思います。

序幕は青山主膳の屋敷の門外で、高坂甚内の娘お菊は甚内が火附盗賊改めの青山主膳の為に捕われて浅草鳥越に於て梟首に掛けられ、お菊は奴として青山主膳の邸に一生奉公をする事になつた。お菊には親の許した船瀬三平という夫があつて、三平は連累を免れる為に向島で植木屋になつて世を忍んで居る女房のお菊に遇つてお互の不幸を歎く件があつて此劇の伏線となつて居る。二幕目は主膳の茶室で主膳がお菊を口説く、夫のあるお菊は主膳に従わないので皿を道具に使つて家来の岩淵忠太夫と二人でお菊を折檻し、車井戸へ吊して斬り殺してしまふ件はお約束の通りであるが、其次の第三場の神楽坂附近の居酒屋の場が非常に面白かつたのでこれでこれを記す事にする。ド、ド、ド、という雪おろしの鳴物へかすかに騒ぎ唄をかぶせて幕が開くと舞台は一面の平舞台で三方折廻しの張り物は正面に一間の腰障子のはまつた縄のれんの出入口があつて障子は閉めてある（障子には有合御肴、めしなどを書いてある）これを開けると表は雪景色になつて居て人が出入りする度に雪が家の中へ吹き込む装置になつて居る

舞台の中央には長い飯台二脚があつてこれを囲んで五六個の醬油樽が置かれ、此の樽の上に職人やら屑屋やら、縁日商人など四五人一人の按摩を中心にして酒を呑んで居る所で、其一方上手の方にはお菊の夫の船瀬三平が印半纏を着て、腰に鉄をひつ掛けて一人で呑んで居るが、酒は附けたりで実は按摩の咄に聞き耳を立てゝ居るのである。面白そうだね、それから後を話しなせえ。〃と職人は云つた。按摩は自分の徳利を逆手に振ると酒はもう呑んでしまつて一雫もない。〃按摩さん俺が一本おごるから其後を話しなせえな〃と屑屋は云つた。一座の人々も各自に〃そうだ〃己れ達も一本つけよう〃と云い出してめしやの亭主を呼んで熱い奴を二、三本按摩の前へ並べた。

按摩は礼を云い乍ら呑み初めてソロ／＼話を始めた。

「雪は豊年のみつきと申しますがね、昨夜からこう降り続けられては盲目の私共にとつては難儀でございますよ、それでね昨晩お療治に伺いましたのはソレ、皆さんも御存じの番町の吉田御殿でございます。あの吉田御殿を拝領したのは火附盗賊改めの青山様で其青山様の隣の梶田様というお邸で

ございました。お療治が済んで帰ろうと致しますと御前様が仰有いますには〃盲目の身で此大雪に本所迄帰るのは大変だろうから泊つて行つたらどうだ〃という有難い仰せでございます。〃では左様願ひましょうお長屋の隅なり、お物置の端なりとも結構でございます〃と申し上げますとそれならばというので結構なお蒲団を拝借して物置きに泊めて頂く事になりました。

と按摩は茲で又一本の徳利を空けてしまつて逆に振つて見せた。職人は笑い乍ら、「按摩さん、お前は講釈師みた様だナア、うめえ処で切るじやあねえか、サア一本」と、又徳利を取り寄せてやつた。按摩は新しい徳利を傾け乍ら話を続けた。

「夜は深々と更け渡り、どこのお寺でございましょうか遠く聞こえる九つの鐘の音、それに交つてサラ／＼と笹に当つて落ちる雪、めくらは感のいゝものでございます。急に底びえがして来たなと思ひ、風邪をひいてはならんと思ひまして蒲団を掛け直そうと、不図首を出しますと、皆さん、これらが大変でございますよ……」

グツと杯を干して〃エヘン〃一つ咳払い此按摩仲々話が上手だ。

「サラ／＼と物置の戸に当る雪に混つて微に聞える女の泣声、ハテ不思議な事もあるものだ。隣り屋敷は名代の吉田御殿、吉田通れば二階から招くと唄われた千姫様が多勢の久を玩具にした挙句残らず斬り殺して古井戸に投げ込んだという、其跡に住つて居なさる青山主膳様のお邸で御座います。雪の夜に殺された男の幽霊でもあるまいと耳をすまして聞いて居りますと段々ハツキリ聞えてくる女のヒューヒューという声に交つて弓の折れでもありませんようかピシーリ／＼という音はどうも女を責めてでも居る様な塩梅で御座いますよ」

舞台の人々は熱心に按摩の咄しを聞き入つて盃を手にする者もない。観客も此按摩の話術に引き込まれた如く舞台の空気は見物席に迄流れて凄味がある。

「それがやゝ暫くするとドボンという水音で御座います。扱ては女を責め殺して名代の古井戸へでも投げ込んだのではあるまいか、とこれはきつと盲目のカンで御座いますがお話しが下手で御座いますが聞いていた時は凄う御座いましたよ。いや皆さん御馳走様でいゝ心持になりました。ではこの辺でお暇いたしましたよう。」

按摩はやがて此店を出て行つた。一同は按摩に飲まれた何本かの酒を忌々し相に眺め各自錢を払つて歸つて行つた。別の樽に腰をかけて此の話しを聞いて腕を組んで考へて居た三平はユツクリ立上つて青山主膳の邸の方角を見てボンと手拭で膝を叩くのが幕でありました。活字にしてしまつては何の妙も無い按摩の咄もこれを演つた俳優の演技が素晴らしかつたので蔭の責場見えざる責場が如何に凄く美しかつたという事は之を見た者で無ければ感じられない事だろうと思う。

鶴屋南北のかいた皿屋敷には幸崎という女が辻堂の中で縛られて蛇責めになる件があるが、私は見た事がないので脚本によつて想像するより外に仕方がないが辻堂の屏の中で責められる女、観客の目に触れざる女の責場は反つて鋭い感じを与えるものであると私は考へている。

女の責場の芝居は絶対大劇場で演る可きものではない。間口廿間高サ四間という現在の大劇場で皿屋敷をやつた処で責場の印象は極めて稀薄でトカゲの様な幽霊の宙乗りでは徒らに見物の嗤笑を買うに止まつて凄味より滑稽味を感じる。

責場の舞台は五間以上八間以内に限定したいと思う。観客と責められる女の呼吸がピッタリ解け合う様でなければ責めの芝居に面白味は感じられない。

責めの時間の一考察として私の経験によれば、最も短かきは五分（浦里の責めの時間）一番長いのは中将姫の五十分と皿屋敷の仇討（お松お玉の伝）の三十五分である五十分という時間は責めの最大限で若しこれ以上に責め続けられれば見物は倦怠を感じて責場の効果は揚らないので責めの時間の短い程見物を曳き附ける力を反比例に強める



ものである。そうした意味に於て俗にいう十銭芝居（現在では五十円）の中より時と拾い物をする事があるので長谷川伸氏などは責とは別な意味で俗に五十円芝居と雖も馬鹿にして居ないで時々見物して居られるとの事である。

美しい娘を抵当にして悪い親分から五両借りる、親分は五両の証文に入れ筆をして五十両にして金を返すか娘を渡すか、二つの一つの返事をしろという所へ金の工面がつかない。為に娘は親分に取られてしまひ縛つて責められるという紋切形の芝居も「娘を縛つて物置へ投り込んでおけ」と子分に命じて縛られた娘を引つ込む処に責場以上の興味と興奮を感じないものがあるまい。又白子屋お熊の髪結新三の長屋でもお熊が猿轡を喰まされて戸棚から引き出される前に戸棚の中で音を立てゝ居る処の方が想像力で新三にどんな酷い目にあつて居るかと思わせるので引き出されてからの一寸した時間に十分新三に弄まれた感じを出して居るのは短かければこそ効果があるので縛られ放して飽きる程舞台上に居たのでは舞台が締つては来ないだろうと思われる。

神明恵両社掛額（かみのめぐみりようし

やのかけがく) 通称矢場のお滝という芝居があつた。

明治初年のもので俗に新聞物といった現代の三面記事から取材したもので芝神明宮境内の矢場女の殺しを取扱つたもので後に真山青果氏が立春大吉「薩摩紅梅」邦枝完二氏が立春大吉と名題を替えて脚本化して居り、登場人物は同じで此大詰の殺し場は真山氏は女を普譚の足場の上に縛つて殺し邦枝氏は只斬り殺した丈けの事にしたが初演の際は縛つた女を蔭で切り殺し障子を切り破つて縛られ乍ら女が転がり出したので責めは蔭になつて居た。障子に写る責められる女の影は凄いもので子供心には非常に恐ろしかつたのを覚えて居る。

「音鈴川大岡政談」講釈種の鈴川源十郎実記の通しに源十郎の邸でおきぬの責姿がある。講談では婆アになつて居るが色気がないので芝居では年増になつてある。

鈴川源十郎がおきぬの娘お花を妻にする約束で手金を渡したのにお花は男と馳け落ちをして行方をくらましたのを怒り日置民十郎という武士と二人でおきぬを責殺す件がある。庭で責める所もあるが物置へ放り込んで置いて責める件は蔭になつて居る。



陰惨な物置の中で髪を振り乱した女が縛られて居るのを出入の商人が発見する件は気の弱いものは見て居られない位凄惨な場面である。

四五十年前に大悪僧という芝居を新富座で見た事があつた。女を縛つて寺の本堂で責め殺し弄り殺しにする。道具は一面に戸を閉め切つた本堂で薄い風音と共に戸の隙間から縁側へ血が流れ出し其血が高二重(高サ三尺)の縁側からポタ／＼と流れて段々勢を増して水のように血が流れる。見物は此室内で女が段されて居るのを想像して水を打つた様になつて静まり返つて居るやと

が一枚の戸が外れて満身血だらけになつた娘が縛られて転がり出してこれに散々立廻り乍ら惨殺するのであるが娘の姿が現われない内の方が反つて凄かつた。

こう考へて来ると女の責場は蔭にしておいて責める人間丈け見せておく事も面白いのではあるまいか、但し絵画の場合は責める人物丈け見せて全体を想像させるといふ事は至難ではあるが年中同じ様なポーズを見せられてゐるよりこうした変つた方法も亦一つの在り方では無かるうかと思つて強て見えざる責場を二つ三つ拾つて見た。此外に実説四ツ谷怪談の通しに本所吉田町の夜鷹宿でお岩が長屋の梁に吊され菰を掛けて責められている蔭の責場があるがお岩が醜婦であるから見た眼が損で同情が薄いので例外である。

編集に対する御意見

本誌の編集方針、内容等についての御意見は御遠慮なく御申出下さい。各担当者より速かに御返事差し上げます。

(編集部)

美しき悪魔の
哄笑

眞木不二夫
マ キ フ シ オ



(1)

明るい派手な塗りの高級車が、警笛を鳴らしながら、続けて何台も流れて行く。緑色の屋根の都電が、鈍い音に揺られながら、その間をゆつくり走る。

黄昏の銀座。勤め帰りの男女を合流して雑踏はいよいよ激しい。いち早くネオンが点る。銀ブラを楽しむ人々の頭上に、まばゆい色彩が燦然と輝く。

レストラン「コロンボ」の二階喫茶室で、馬場辰次はコーヒーを吸いながら、多彩に流れる人の波や、めまぐるしく往来する車を見下していた。その眼を何気なく屋内に戻し、余り広くない店の中をふと見廻した時、辰次はハツとした。

テーブルを二つ三つ越した壁際に、こちらに横顔をみせて、これもコーヒーを飲んでいる一人の若い女性が眼に止まったのだ。(由貴子!) ツンと高い鼻、やゝ吊り上った切れ長の眼、小さくまとまった唇。(高倉由貴子に違いない……) 辰次の眼に異様な光が走った。

じつと凝視する辰次の眼を、相手の女も感じたのか、ふつと顔を上げてこちらを見た。辰次の眼とカチリとぶつかる。一瞬、不審そうな表情で男の姿を探ったが、すぐアツと唇が開いた。スプーンが指から離れる。

寸時の驚きを、辰次は巧みにカバーして由貴子に向つて軽く頭を下げ、ニンマリとわらつた。スツと椅子を立つと由貴子のテーブルに歩み寄つた。

「しばらくでしたね……お嬢さん……」

由貴子も、既にもとの冷たい表情に戻つていた。片方の眉をピクリと上げて、故意に男の眼から視線を逸らし、

「辰次……さんだつたわね……」

その驕慢な顔を見ながら、辰次は(相変らずだな)と思つた。

(この女のもとから逃げ出して……もう……七年になる) 辰次は胸の中で指を折つて数える。(と、俺より、たしか一つ上だつたこの女は、もう二十五才になるわけだ……)

「その節は、いろいろと……」

辰次は、表面に穏やかな微笑を浮べながら、重い意味をこめて云つた。女の口もとにも複雑な微笑が生れた。が、すぐそれは消えた紺色フアアのタウンハットが艶のある髪を柔かく抑えている。マスタード・カラーのミデイスไตล์セーター、下は紺色ジャジーのタイトスカートを巧みに着こなして、洗練された由貴子の美しい容姿。辰次の脳裏に、七年前、この女から受けた数々の侮辱、虐待の記憶が甦える。下腹の古傷が疼きだすような錯覚に、辰次は思わずそこへ手をやつた。

「あなた、その後、何していらつしやるの?」

視線を逸らしたまゝ、由貴子が口をきいた。

「え? えゝ、まあ……」

思いついて、辰次は名刺を出した。手にはとらずに由貴子はチラと、それを読む。

海光商事……営業部長――

「貿易の方をやっています。主に装飾品の類で……」

「出世したわね」

そう云うと、由貴子はふつと立つた。冷たい眼で辰次を見下すと

「あたし、失礼するわ」

辰次はあわてゝ腰を浮かし、

「まアいゝじやありませんか、今どちらに？」

「あたし、今、六丁目で洋品店を開いているの」

ハンドバッグの中から、小型の名刺を出すと、投げるようにテーブルの上に置いて、あつと云う間に女の姿は消えた。

（畜生！）辰次は齒がみした。（あの女の前に出ると、手も足も出なくなるから不思議だ）しかし、辰次の胸中に復讐の念は火に油を注いだように燃え上った。（とうとう見つけたぞ、もう逃がすものか）

(2)

七年前、終戦直後の熱け爛れた東京の街に、飢えて倒れていた辰次を救つたのは、由貴子の父の高倉大造だつた。風邪から肺炎を起し、浮浪児の群からも捨てられた辰次は、高熱に喘ぎながら氷雨降る焼け跡に横たわっていたのだ。通りかゝつた大造に拾われ、辰次は世田ヶ谷の邸宅に住むことになった。大造にしてみれば、手頃な書生を一人拾つたという程度の考えであつたが、両親を空襲で殺され、寄る辺もなく街をさまよっていた十七才の辰次にとつては、夢のような境遇の変化だつた。

大造は戦争中兵器工場を幾つも経営し、従つて軍部とも密接な関係にあつて、かなり豪勢な生活であつたらしく、敗戦で工場は没収されても、今なお邸内にはその名ごりが止つていた。家族は、大造夫婦に一人娘の由貴子、それに女中が一人居るだけであつた。

十八才の由貴子は、おそろしく我儘で驕慢な娘だつた。

辰次は、この若い女主人に酷使された。

この邸に住むようになってから、半月ばかりたつた或る朝、辰次は最初の侮辱を由貴子から受けた。

女学校に通つてゐる由貴子の靴を毎朝磨き、揃えて置くのが辰次に興えられた仕事の一つだつた。その靴の、小さい泥のハネが一所、前日のまゝに残つていたのが、由貴子の怒りに触れたのだ。

「辰ちゃん！」

由貴子のまなじりがキツと上ると、いきなりその靴をつかみ、側に立つてゐた辰次に近寄つて、靴底を辰次の頬にこするようになして殴つた。

「あつ！」

と、よろめいて頬をおさえると、辰次の掌にザラザラした泥土の感触があつた。カツとして辰次は思わず由貴子の手首をつかんだ。

「何するんだ！」

手首をつかみ、肩に手をかけ、その乱暴な仕打ちを抗議するように、由貴子の身体を揺つた。と、由貴子は、辰次がビツクリする程の大声で「キヤア」と叫ぶと、奥へバタバタ駆けだした。

「お母さん、辰次が乱暴するの、辰次がいけないのよウ……」

子供のような甲高い声で、半分泣き声をたてながら、廊下を走つて行く由貴子の後姿をみながら、辰次は大変なことになつたと思つた。虫に刺されても大騒ぎを演ずる由貴子のことだ。大げさな訴えで母親を驚かすに定つてゐる。（ここを追い出されたら……）

冷たい焼け跡の防空壕のねぐらを思い、辰次は玄関にうずくまつた。

が、由貴子の母親からは、きびしい叱責を受けただけで、その朝

のことは済んだ。辰次のおとなしい性格や、骨惜しみしない働きぶりが、母親をしてこのまゝ追い出すには惜しいと思わせたのだ。

しかし、その夜、辰次は由貴子の部屋へ呼ばれた。十八才のぜいたくな女学生の洋室は、眩しい程きらびやかで、ドアを開けたとたん、辰次は目まいを覚えた。

「辰次！」

たちまち罵声が飛んだ。やゝ陰を帯びた美しい眼が、辰次を待ちかまえていた。

「あんた、自分をなんだと思っているの。私のパパが拾つて来なければ、あんたは野良犬のように道端で餓死するところだつたのよ。それなのに今朝のあんたの行いはなに？私の身体に手をかけたりして」

「済みませんでした。これから氣をつけます」

ぐつと来た屈辱を耐えて、辰次はペコリと頭を下げた。

「駄目よ、そんな謝り方じゃ……もつとちゃんと手について頭をさげなさい」

ソファに傲然と腰を下ろし、スリツパをつつかけた足をブラブラさせながら、由貴子は口もとに薄笑いを浮かべながら云つた。辰次は床の上に膝を折つて手をついた。一刻も早くこの女の部屋から逃げ出しかつた。

「済みませんでした。今後、氣をつけます」

頭を床にすりつけて平伏した。と、由貴子の足先のスリツパが、辰次の後頭部をグイと踏んだ。額が床に押しつけられ、スリツパの足は男の頭を踏まえたまゝ、容易に離れない。

「ゆるして下さい。ゆるして下さい。これからきつと氣をつけます」

から」

床にピッタリ顔をつけたまゝ、辰次は呻くように云つた。

「フフフ、じゃ、ゆるしてあげる……」

ホツとした辰次が急いで頭をあげた拍子に、由貴子のスリツパが脱げて落ちた。

「拾つて」

傲然と由貴子が命令する。膝をついたまゝの姿で辰次がスリツパを拾い、由貴子の足に履かせようとした。足をヒヨイと伸ばしてスリツパを受けようとした時、由貴子のスカートの裾がひらいた。辰次の眼に、スカートの中の純白のシユミーズ、そしてズロース、成熟した太股が、否応なしにとび込む。眼がクラクラとして、辰次は顔が赤くなつた。手早くスリツパを履かせると、一礼して立ち上つて部屋の外に出ようとした。

「待つて」

由貴子の声が、背中に突きさゝつた。

「はい」

「まだよ。頭を下げた位で、私の怒りが解けると思ふの」

辰次は困惑した。

「こつちへおいで」

おそろく辰次は再び女主人に近づいた。

「うしろを向いて」

「え？」

「うしろを向くのよ。そして両手を背中に廻しなさい。」

辰次は何事が起るのかと、ためらつた。

「抵抗するの？あんた抵抗する氣？今度抵抗したら、パパに云いつ

けてこの家から追い出すわよ」

「抵抗しません」

辰次は、眼をつぶつて云つた。膝まずくと、両腕を背中にまわした。由貴子は衣裳棚から布紐を取り出すと、うしろにまわした辰次の両手首をキリキリと縛つた。二本目の紐で、二の腕から胸へと縛つた。紐を胸に廻す時、由貴子の小さい唇から、甘酸っぱい女の息が、辰次の鼻孔に触れた。髪の毛がハラリと顔にかゝる。十七才の辰次にとつて、眼覚めを誘うなまめかしい春の息吹きであつた。心地よい興奮が辰次の神経をふるわした。男を縛りあげた由貴子は、流石にハアハア息をついていたが、

「さあ、これから、本当のお仕置よ」

机の上の筆立から、三十糎の竹のものをさしを取ると、いきなり辰次の頬をピシヤリと叩いた。息をグツと呑みこんで痛さを耐える。頬に赤くものさしの跡がついた。パシツパシツと左右の頬を交互に打つ由貴子の顔は、美しく紅潮して噛みしめた唇は花のように愛らしい。灼けるような頬の痛みに、辰次の顔は次第に下を向いて、海老のように頭を膝につけ、ものさしのうなりを避けた。すると、由貴子は、折れ曲つた辰次の背中にまたがつて、男の尻をピシリピシリと打ち据える。背中に縛られた辰次の手が由貴子の尻の下に踏まれ、豊かな二つの肉塊の間に嵌る。この責苦から逃れようとして、辰次はうん、と力をこめて身体をもがいた。

はずみに、由貴子の身体はまたがつた男の上から落ちて床に転倒した。ソファの脚に、頭がゴツンとぶつかった。

「まあ、やつたわね」

怒りにふるえた由貴子は、いきなりスカートをひるがえして辰次

の頸を蹴つた。仰向けに倒れる辰次。女豹のような素早さで、由貴子は辰次の腹の上にまたがる。

「ク、苦しい……」

思わず呻いて、悲しみとも口惜しさともつかない涙が、ポロポロと辰次の頬に流れた。腹の上に乗つた重い由貴子の身体が、弾み、躍動する度に、息の詰まるような苦しさである。

そして、抵抗のできない辰次の首に、しなやかな十本の指をかけると、ソロソロとしめはじめた。

「ソラ、どう、あたしがその気になりさえすれば、あんたは死んでしまうのよ」

翻るように云いながら、由貴子の細い白い指が、辰次の首に喰いこんでいく、

（ああ、俺は、この女に殺されてしまうのか）そんな恐怖が脳裏に浮び、もう、どうなつてもいい、という捨て鉢な諦めに、辰次はガツクリ全身の緊張を解いた。と、由貴子は辰次が気を失つたものと思ひ、あわてゝ男の腹から降りるとコツプに水を汲み、口に含んだ辰次の顔にブウツと吐きかける。

「ああ……」

顔中がびつしよりと濡れて、辰次は眼をあけた。灼けるような咽喉の乾きをおぼえて、顔にかゝつた由貴子の吐いた水を、舌を出してなめた。

「意気地ないのね。男のくせに。今日はこれでゆるしてあげるわ」

由貴子は、辰次を抱き起すと縛つた縄をほどいた。緊縛を解かれると、辰次は全身の力が脱けたような激しい疲労を覚えた。それは単なる肉体的な疲労だけではなかつた。よろめきながら、ドアの外

に逃れ出た。

(3)

辰次は、由貴子の加虐的な遊戯の前に、否応なしに屈服させられていった。

戦後、急激に自由が喧伝され、人間性の解放、ひいてはセックスの解放が叫ばれて、由貴子も敏感にその影響を受けている。父親は占領軍のパーシを逃れようと、日夜家を外に奔走しているし、母親は長い間の結核で殆ど臥たきりの生活だった。自然、家は古くから居る女中委せになつていたが、その女中も、由貴子の傍若無人な君臨には手も足も出ない形である。まれにみる美貌で、スタイルも羚羊のように均勢のとれた美しさを持つている由貴子。柄も大きく、乳房も腰のあたりもふつくらと女を想わせて、女学生達の間でもその魅力に慕い寄る者が多い。驕慢と自惚は益々増長し、ひそんでいた異常な性癖が急に目覚めはじめると、辰次を奴隷に従えることなどは、由貴子にとつて容易なことであつた。

それまで女中に委せていた部屋の掃除も辰次に命じた。机の上等に少しでも塵が残つていたりすると、すぐ縛りあげて床の上に倒し顔を踏みつけたり腰をかけたりにして苦しめた。上半身裸にされて、背中いつぱいにペンで刺青をされたことがある。薄い背中の皮膚にペン先でチクリチクリとインクを植えていく。青インクと赤インクで最初は人間の顔のような絵だったのが、終いには何やら判らなくなる程めちやくちやに描き散らす。腹這いにさせた男の背中にドスンとまたがった由貴子は、力をこめて肌にペンを突きさす。針ほどの鋭い痛みはないが、尖がつた金属の先は相当に痛い。背中いつぱ

い突かれる中に、辰次の額からは脂汗が流れるのだつた。

遂には、由貴子の汚れたズロースや靴下まで洗わせるようになった。最初のうち、屈辱と不馴れで、泣きだしそうな顔で洗つていた辰次も、次第に飼ひ馴らされた猫のように、心理的にも従順になつていった。ズロースに染みついた赤黒い汚点などを、丹念に洗つている中に、ゆえ知れぬ快感が湧いてきたりした。

或る夜、辰次は女中の光枝に呼ばれた。四畳半の女中部屋に坐らせると、光枝は意地悪い口調で、

「辰ちゃん、あんたこの頃、お嬢さんの部屋で何しているの？フフ、あたし、知らないような顔をしているけど、みんな知つているのよ。ズロースや靴下まで洗っているんでしよう？あんた……」

辰次は顔を赤くした。光枝は分厚い唇を歪め、細い眼を余計に細めて辰次を睨んだ。婚期を逸した三十女の眼が、にぶい電燈の下に妖しく無気味に光つた。

「辰ちゃん、あんた、なかなか美男子ねえ……」

あつという間に辰次は腕をつかまれ、引き寄せられた。赤黒く濡れた女の唇が、辰次の頬に押しつけられた。もがいたが、ガツチリと太い女中の力は意外に強かつた。抱きすくめられて身動きもできない辰次に、光枝は卑猥な声で囁いた。

「あたしにも縛らせておくれよ。ね、ね、いいだろ……」

何時の間に用意して置いたのか、細引を取り出すと、辰次の両腕をうしろにねじ上げて力いつぱい縛つた。反抗する間もなかつた。いや、反抗しようと思つても何故か身体がしびれたように動かないのだ。女の持った縄には、如何なる魔力がひそんでいるのであろうか。辰次は仰向けに倒された。背中にくぐられた手が自分の身体の

重みで痛かった。荒々しい女の息が顔中に吹きかゝつたかと思ふと、光枝は巧みに男のズボンのバンドに手をかけていた。

辰次の顔が、好奇心と恐怖に奇妙に歪んだ。

ふと気がつく、廊下をバタバタと馳けていく足音がした。辰次はハツとした。(あれは由貴子の足音)障子の隙間から見られたか……辰次の胸の中に、不安が黒雲のようにひろがつていった。

その夜、辰次は一晚中悪夢にうなされた。プヨプヨした肉体が波のようにおおいかぶさる……光枝の醜い顔が哄笑する……とそれが何時のまにか由貴子の冷たい美貌に変つていっている。縛られ、責められている自分が、由貴子に猿ぐつわを噛ませてムチで段つてい……由貴子のバラのような唇が苦悶の悲鳴をあげるが、その声は聞こえない……ムチのあとが赤くみみず



ばれになり、滲み出た血が白蟻のような処女の肌に残った……恨めし気な由貴子の眼が、喘ぎながら自分を睨んでいる……辰次はびつしよりと寝汗をかいていた。

(4)

それから二、三日静かな日が続いた。明日は日曜日だという前の晩、辰次は由貴子に呼ばれた(きたな)とギリとして、「ハイ」と返事したが、その声は自分でも驚く程調子よい響きをもつていた。怖い拷問が待っていることは明らかである。それなのに、その恐怖心の裏側に浮き浮きした期待があるのは一体どういうことなのだろう。辰次は静かに由貴子の部屋のドアをあけた。由貴子は辰次に背を向けてデスクの前に腰かけその頃手に入り難かつたシユークリームだのチョコレートだのという洋菓子を食べ散らかして

いた。

「辰次は黙つて頭を下げ、床の上にひざまずいた。と、眼の前にチヨコレートのかけらが放り投げられた。

「お食べ。」

躊躇するとすぐカン高い叱責がとんでくるので、辰次はあわてゝそれを拾い上げようとした。その時、由貴子がくるりと向き直つた

「手を使つちやダメ！」

辰次はビツクリして手をひっこめた。

「ケダモノ！ケダモノはものを食べる時、手なんか使わないわ。そのまゝ口をつけて食べるのよ！」

辰次は言われた通り、おどおどと犬のように床に落ちたチヨコレートのかけらを口にくわえた。甘味のない時代だったので、アメリカのチヨコレートは頬がしびれる程甘かつた。辰次は猫のようにピチャピチャと舌を鳴らしながら食べた。

「フフフ、お前がそうやってゐる所は、ちやうど犬か猫ね。そうよ、お前なんか犬か猫位の価値しかないんだわ。」

由貴子は、自分の食べ残した菓子の残りを續けて床に投げた。四つん這いになつたまゝ辰次はそれを追ひ、舌を出して拾ひあげた。高く放り投げたパンのかけらを、犬のように宙で受けとめたりした菓子が無くなると、由貴子は辰次の背中にドスンとまたがつた。

「サア、今度は馬になるのよ。はい、ドウドウ……」

口にくつわを噛まされた辰次は、由貴子に手綱をとられて、部屋の中を走つた。速度がゆるむと、女騎手は細い皮のバンドで馬の尻をピシリピシリと容赦なく打つた。発育のよい娘の重みに辰次の膝頭はすりむけて赤くなつた。汗がジトジトとシャツに滲み、額から

も垂れる。

「アツハハハハ、アツハハハハ……」

奔放な驕声をあげながら、如何にも嬉し気に、由貴子は馬の横腹を踵で蹴つた。部屋の中を十幾度もグルグル廻ると、辰次は極度の疲労に耐えかねて、床の上に這いつくばつた。肩でハアハア荒い息をつきながら、倒れている辰次の頬を、スリツパを履いた由貴子の足がムズと踏んだ。

「どうしたの？ヤセ馬、もう動けないの？弱虫！意気地なし！そんなら、氣附薬に私の足をなめさせてあげるわ、ホラ……」

スリツパをぽいと脱ぎ捨てると、今度は真白い素足が辰次の鼻と口をギユウと踏んだ。

「むむ……」と、辰次は呻いた。呻きながらソツと細眼をあげ何時ものように盗み見をするのだ。スカートの裾からシユミーズがのぞき、その奥の純白のブローズが、むつちりと二本の太股を包んでいる。ふくらはぎから踵にかけての美しい線、足先の小さい一本一本の指も象牙細工のように艶やかに、爪も海水に洗い尽くされた貝殻のように白く美しい。由貴子が身体を動かす度にスカートがひるがえり彼女の下半身の体臭が、やわらかい風となつて辰次の顔に吹いた。すると、不思議な陶醉が虐げられた男の脳髓を犯すのだ。辰次は、由貴子の足指の間をピチャピチャなめはじめた。指の間にも高貴な乙女の香りが染みついていた。（美味い！）と、辰次は心底から思つた。口の中に溜つた唾液をゴクリと飲みこむと、指の間から発散した由貴子の体臭が、そのまゝ自分の胃の腑へしみわたるようだった。それは如何なる香氣を含む酒よりも豊醇に思えた。

奴隷が恍惚として自分の足をしゃぶつてゐる様を、由貴子はゾツ

とするような冷ややかな微笑で眺めていたが、急に或ることを思い出すと、形のよい唇がキツとしまり眼尻が吊り上った。憎悪に燃えると、この女主人の表情は益々気高く冷酷な美しさが顔にも姿態にもみなぎるのだ。

「辰次！お前、この間の夜、光枝と何をしていたの？云つてごらん云えないだろう……ケタモノ！犬！猫！私は全部みてしまったのよ私の眼を盗んで、お前があんな女と何をしていたか、私はみんな知っているんだ！」

狂つたように叫ぶと、由貴子は辰次の胸倉をつかんで、乱暴に引き起した。男の唇のまわりにべとべとした唾液が光っている。酔い痴れ果て、白痴のようなどんよりした眼で、辰次は由貴子をみあげた。

小さな女王は奴隷の背後にまわると、忽ち後ろ手に縛りあげた。二の腕と胸に縄が喰いこむ時、ぞくぞくするような快感が奴隷の胸に湧く。由貴子のやわらかい、しなやかな手が、露出した自分の肌に触れると、辰次は頭の後がしびれるような陶酔を感じた。

縛り終えると、由貴子はいきなり男を仰向けに引き倒した。奴隷の顔の上に、はずみをつけてまたがると、スカートをパツとまくつた中腰になるとズロースに手をかけて引きおろし、丁度便所で用を足す時のように蹲んだ。……

そして、拭き終つた紙をどこへ捨てようかと一瞬迷つたが、思いついてグツタリと臥ている男の口の中へ、まるめて押しこんだ。

辰次はその紙を、グチャグチャに噛みくだく。咽喉の奥へぐつと嚙みこむ。それが徐々に食道を下つて胃に届くのが、はつきりと判るのだ。

「アツハツハツハツ……」

けたたましい声で、由貴子がわらつた。傲然と腰に手をあて、胸をそらし、勝ち誇つた美しき悪魔の哄笑であつた。

「アツハツハツハツ……」

狂つたように由貴子はわらい続けた。青白い電気スタンドがわらい狂う由貴子の顔を無気味に照らしていた。その横顔は悪魔のように美しく、天使のような高貴な気品に輝いていた。

(5)

翌日になると、由貴子はケロリとした顔で遅い朝食を済ませ外出の仕度をした。日曜日なので、一日遊びまわる予定が組んであつた由貴子の周囲には、由貴子を慕う学友達が、女王に仕える侍女のようにとりまいている。金使いも派手で、絶対的な君臨の位置にあつた。

玄関で頭を下げている辰次を、全く無視したまゝで由貴子は靴を履き、ハンドバックを持つと門から出る。いつもと少しも変らぬ驕慢な態度である。主人の姿が見えなくなる迄、辰次は頭を下げたまゝ見送るのである……

それから一週間過ぎて、又、土曜日の夜が廻つてきた。

夕食を終えてから一時間たつと、辰次の居る書生部屋に、女中の光枝が、

「辰ちゃん、又、お嬢さんがお呼びだよ。」

と、嫉妬をむき出しにした醜い顔で呼びにきた。

「うむ。」と、うなずいて立ち上る辰次の耳もとに、

「いいかげんにおしよ。お嬢さんばかり相手にしないで、たまには

私のところにも遊びに来なよ。」

光枝は卑しく囁くと、辰次の肩をポンと叩いた。

筋肉質で褐色の辰次の裸体を前にして由貴子は微笑した。手にはキラキラ光るナイフが握られている。

「お前、今日は私に血をみせておくれね。」

興奮を抑えた声で低く云うとソファに近寄った。調理し易いように、特別にソファの上へ転がしたのである。由貴子はナイフでそつと辰次の額を突いた。辰次は一瞬恐怖におののいたが、観念の眼を閉じた。突かれた額から血が噴き出た。由貴子の眼が嬉し気に輝いた。左手で、横たわった無抵抗の裸体を撫でまわす。猫がねずみを弄ぶように、ソロソロと白いしなやかな指先が、辰次の下腹をさぐると、右手のナイフがその下腹に触れた。金属性の冷氣に、辰次の身体がピクリとふるえた。ナイフは皮膚に触れたまゝ寸時ためらっている様子である。刃物の手に力が入った。やわらかい下腹の皮膚が、刃に押されてやゝへこむ。更に力がこもった。ブツリと突きささる。と、みるまに血がナイフの先を染めた。辰次は猿ぐつわの口で、むむうと呻いた。下腹を横一文字に、血の線をひいてナイフがじわじわと切り進んだ、辰次の全身に脂汗が流れ出る。ナイフは皮膚の下一分ばかりしか入っていないのだが、鮮血はみるまに拡がっていく。

血はとめどなく滲出して下腹から腰に伝わり、ソファのビロウドに流れ落ちた。由貴子は感激に息をはずませながら、しばらくの間苦悶する奴隷男の姿態をむさぼるように見つめていた。

が、その顔をみて、ドキリとした。まるで死人のような蒼白な顔

色である。由貴子はあわてた。(なんとかしなければならぬ)というノーマルな衝動が、麻痺した由貴子の頭にひらめいた。脱脂綿を取り出すと、滲み出た血を拭きとつた。拭きとつても、すぐ傷口は血で埋つてしまう。デスクの引き出しから、ヨーチンの小瓶を探し出し、急いで瓶のふたをとると、それを下腹いっぱい注いだ「むむう……」

辰次が大きく呻き悶えた。ヨーチンを一瓶傷口にぶちまけたのだからたまらない。どつとしみこんで、下腹は焼け火箸を押しつけたような激しい痛み。

「ううむ、むむう……ううむ……」

辰次は縛られた身をよじつて、死ぬかと思う苦しみ、全身汗まみれになつて呻いた。茶褐色の薬が傷口に溢れ、血と混合されて、男の下半身をむごたらしく染める。

しかし、幸いに出血はだんだんと納つてきた。由貴子はホットした。心にゆとりができると、この奴隷男を救うために手を貸したところが口惜しくなつた。何故か自分が恥しい行為をしたような女に思えて、由貴子は憎悪の眼で辰次を睨んだ。自分のソファに奴隷を臥かしたことを後悔し、引きずり下ろすと、後ろ手に縛つた縄を解いた。ヘタヘタと崩れ折れる辰次の身体を、足で蹴りながらドアの外まで転した。

「出て行け！」

そして、ボタンとドアをしめた。

(今夜は睡眠薬でも飲んで、ぐつすり眠ることだわ) 由貴子はそう思うと、もう辰次のことを忘れた。たゞ、あの刺激的な血色の、恍惚を誘う血の匂いが、いつまでも由貴子の脳裏に、幻影のようにまといついていた。



悪の部屋

二俣 志津子

——こゝに言う天邪鬼とは、仁王にふまえられた悪鬼のことではありません。ましてや、天邪鬼が男であるのか女であるのか、私の知った限りではございません。たゞ何となくこの言葉が気に入ったまでのことで、或いは、柔肌の女が肌白い裸身を、苦悶の果てに折り曲げたような、黄金虫の幼虫のことかも存じません。

月 日

女は二度生れるものです。まず最初は、陣痛の呻きを胎内で聞きつつ、あの生命の川を流れ出ずるのです。第二には、破瓜の疼痛に自から呻きつつ、生命の川から生命の精を受けて新しい世界に入つて行くのです。

私の夫はゴム専門の彫刻師です。彼は言うのです。ゴム刀をゴムから抜く時の感じは、私の身体をお前の身体から引離す時と全く同じだ。と、そして私は、鋭利なゴ

ム刀を握らされ、ゴムを切り、ゴムを削る術を教えられました。が彼の言うような感じは全くありません。たゞ、鋭利な薄刃が、弾力あるゴムを自在に切り廻してゆく感覚は、確かに快いものです。

このゴム印を彫る方法は、ゴムに画かれた字或いは絵の周囲を一定の深さに切つてゆきその後で、左手にピンセットを持ち、ゴムの一端をつまんで、右手のゴム刀を用い、丁度皮でも剥ぐかのように、ゴムの不要部分を剥いでゆくのです。これは仲々興味ある作業で此頃では、ふと、美しい人の肌をこのように剥ぎ取り蒐集してみたい誘惑に襲われることがあります。

私達は、小さな印舗を構えております。夫



は、昼間は殆んど外交に出ていて、帰つてき
てから仕事を始めます。私は店番です。そし
て、ゴム彫刻を気儘に習つて居るのです。引
込んだところにあるお店で、お客は殆んどあ
りません。が、毎日必ず店に来る青年が居り
ます。それは木口と云つて、ツゲ、水牛、象
牙等専門の彫刻師で、私達が木口を出来ない
ところから、この青年に仕事の幾分かを手伝
つてもらつて居るのです。彼は正木太一と言
い、眉を細くしたら眼も鼻も唇も女と思われ
るばかりで、物腰も、言葉も柔らかで、たゞ
貧しいせいかな顔色はいつも良くないようです
或日そのことを夫と話して、断る彼を無理矢
理に座敷へ上げ御馳走したこともあります。
彼は全く恐縮し、それから暫くは、その日の
礼を繰返すのです。

今日、彼は、要件が済んでもその場を去ら
ず、じつと私の手許を見ておりました。私は
ふといたずら心から、彼に、夫の言つたゴム
を切る感じのことを話しました。すると彼は
首筋まで真赤になつて眼のやり場に困つてい
るのです。

「あなた、御経験ございません?。」

「……その……ゴムを彫つたことは……あり
ません——。」

「いえ、ゴムのことではありませんワ。」

「……ないです。」

「してみたいと思いませんか?。」

「奥さん、どうも、失礼します。」

「あら、いいじやありませんか。」

彼はそゞくさと店を出て行つてしまいまし
た。うぶな青年そのまゝに——。

夕食の時夫に彼のことを話すと、夫は眉
を寄せて、正木をからかうのはよした方がい
いな。思いつめる性だから。と、それだけで
彼のことは打切りになりました。

夫は、私と結婚するまで、女遊びはしたこ
とがないと言つていましたが、自瀆をしてい
たとかで、勃起力も弱く、それに大変な早漏
でした。

人間——の肉体の小部分——。

私は、哀しくなるのです。これだけのもの
! 本當にこれだけのものですワ。どうしてこ
んなことが必要なのでしょうか。私は多くの場
合正常な行爲に移る必要がない程、彼は余り
にも弱いのです。

今、夫は生卵をのんでおりますが、それほ
どまでにしてほしいものでしょうか。私はた
ゞ苦痛と不快の時が殆んどで、まるで奉仕か
犠牲になるような気持ですのに——。

結婚なんて、墓場ですワ。

月 日

勿論、私も外交に出る時があります。おと
くから電話がかゝつて来た時は、店に鍵を
かけて出掛けるのです。で、店番か女中さん
が必要なのです。店番には正木がうつてつけ
なのですが、彼を店に坐らせると、職人とし
ての給料を払わねばならないのです。

女中のことは、夫と相談して、結婚すると
すぐに探していたのですが、その女中が今日
来たのです。新潟の蒲原の在だと申しますか
ら米所でしょう。よく肥えた、きれいな肌の
小娘で、年は十六才と言いますが、もうすつ
かり娘々としていて、力はあるようで、そのこ
とを聞きましたら、六斗俵を荷縄なしで背負
つて下駄履で走れる。と、自慢気に申すので
夫は苦笑して、じゃ、用心棒にもなる。と言
つたら、しの——娘の名前です——もその気
になる他愛なさなのです。

正木にしのを紹介した時は、男と女が逆な
のではないかと、と、更めて見直したほどでし
た。正木は、赤くなつて俯向き、しのは、青
年を不遠慮に観察していたのです。

これで私も外交に出られることになつたの

です。一人前の社会人として、のび／＼と太陽の下を飛び廻れるのです。

夫は隣室のしのことか心にかゝるのか、あの要求もせず、ながいこと、私の………つばつたり、………して遊ばせているのです。私はどうしても夫のこの遊戯を好きになれません。

月 日

私は一通りお得意を廻つて快く疲れていました、が、まだ陽も高かつたので正木を訪ねてみよう。と、言う気になつたのです。

彼のところは荻窪の或る家の離れで、樹々に囲まれた薄暗い部屋でした。彼は部屋の真中に机を据え、スタンドを灯け、万年床の上にあぐらをかいて仕事をしていました。

「まだ仕上つていないんですが……」

彼は工合悪そうに頭を掻きました。

「いいのよ、仕事のさいそくに来たんじゃないから。」

彼は仕事をやめて茶をいれました。幾日も掃除をしていない様子で、男臭い。

「僕は疲れるとこれを打つています。」

彼は手慣れた調子で、自分の腕に注射を打ちます。新聞広告などで見かける薬品名のあ

る空箱を私は手にとつて、ふと、自分も疲れていることを思い出したのです。

「正木さん。私にもこのパンピタンとかつて言うの打つて下さらない？」

「他人にはやつたことがないんで……」

「自分だと思つてやりなさいよ。」

「何んだか恐いな。」

「さ、早く、私も疲れているのよ。」

彼は、それでもするとなると、平常とは打つて変つた機敏さで的確に動き廻り、また／＼く間に私の腕を捉え、太めの針を打込んで、私の顔を鋭く見つめました。

間もなく私は抵抗し難い睡気に誘われ、彼に支えられ乍ら静かにその場に横になり、深い眠りに落込んでゆきました。

夢の中で幾度か正木が揺り起します。

「奥さん。おそくなります。」

「いけません。おきて下さい。困ります。」

彼はしきりに私を揺るのです。それがだん／＼はつきりしてきて、彼の顔が眼の前に見えた時、私ははつとしました。私は素裸で彼の万年床の上に仰向けにされているのです。

「奥さん。」

彼は真剣な表情でした。

「木口では、こうやつて彫ります。」

私は、あつ、と叫びました。彼は私の目覚めるのを待つていたのです。

「こう、こう、こうです。」

「痛い。お願い。離して下さい。」

「駄目です。」

彼は私の乳房を鷲掴みにし、私の髪を引き据え、肩に齒をあて、まるで嵐のように私を虐むのです。ぱつ、と、手を引いたかと思うと、いきなり私を転がして俯伏せにさせ、「こうです。こう彫ります。」

私は、意識を失いそうになりながら、この万年床の上で幾人もの女性が、彼の嵐に吹きまくられている。と、直感しました。と、同時に何とも言えぬ妬ましさで私の胸を衝いたのはどうしたことでしょう。

帰ると私は、仕事もせずにすぐに寝てしまいました。夫は、疲れたろう。と、しきりにいたわつてくれます。それがかえつてやりきれないほど心苦しく、一晚中悶々としていました。正木は計画的に麻酔薬を打つたのです。私が彼を甘く見ていたために、すつぽり彼の手の中に入ってしまったのでしよう。

月 日

正木はいつもと全く変わらない。おどおどし

ているようで、女みたいで、昨日のことなどまるで知らないと言った風で小面憎い位でした。しのが彼に色目を使っているのを私は今日初めて目撃しました。

月 日



風呂にしのと入りました。しのは裸になると、思ったよりもより太っていて、自転車の練習ですりむいたのだ。と、内股に膏薬を貼っていましたがこの自転車で練習したのだろうか？

月 日

朝別に変ったこともなかったのですが、しのは、夜になつても帰つて来ません。近所の人も、さあいつもと変わりましたが……と、言う。行きそうなどころを問合せましたが、見かけない、

と、空しい答えがかえつてきただけでいよいよ心配になる。私達はまんじりもしないで夜を明しました。

月 日

夫がしのの捜査願を出そう。と、言うのを私が今日一日自分達で捜してみよう。と申し出た。私には何故か正木のことを頭にひらめいたのです。あそこに居る。これは本能的な直感です。

私は家を出ると、確信をもつて正木の部屋に直行しました。

木立に囲まれた離れは、気のせいかな、私には異様なものが感じられ、直接部屋に入るのを躊躇したので、窓へ廻り、部屋の中をそつと覗つたのです。そして、私は危く声をあげるところでした。何と云う光景でしょう。しのは素裸で机の上に仰向けに寝ておりました両手と両足は縄で机の下に引かれてあるようです。これだけでしたら何も驚きはしないのです。そうです。驚きませんとも！

驚くべきことは、正木が、ゴム刀で、最も熟練したゴム彫刻師よりも見事な手練で、外科医のように慎重な、そして真剣な表情でしのの内股の皮膚を剥いでいるのです。しのは

眼をつり上げ、唇を噛み、胸を波うたしているのです。私は肌が粟だつような気がしました。警察へ届け出ようか。しかし、私も美しい肌の人の皮膚を剥きたいと思つたことがある。今でもその心がどこかにある。と、正木の心がわかるような気がしてきたのです。そのうちに彼正木はしのの皮膚を小さなクローバ型に剥ぎ取りました。そして、くるつと窓の方を向いて

「奥さん。」

と、私に呼び掛けました。知っていたのです

「御入りになりませんか。」

「いやです。」

と、言つたのはしので、その声を聞くと、しのが急に憎らしくなつて部屋に入る気になつたのです。そして、私はこの悪の部屋に入つてしまつたのです。しのは叫びました。

「正木さん。縄を解いて！」

しかし、正木は軽く笑つただけで、私の方へ向き、

「ここを、」

と、しのの前のところを軽く叩き、「毛をつけたまゝ取れたら、と、思うのですが、まだ自信がありません。」

私は声も出せずに正木の顔を見入るばかり

で、そのうちに腋の下から冷汗が流れてきました。

「少いですが、まだいろ／＼ありますよ。乳首だとか、お尻だとか、腕だとか。出血させるようじやまだだめなのです。少し位は止むを得ませんが、脂肪の多いところなら、出血しませんね。」

「あなたは、何と言う……」

「何です？僕は頼まれてやつているのですよこのおしのさんにしろ、誰にしろ。僕の方がお金をもらいたい位ですね。」

彼は息に私の耳元に顔を寄せてさゝやきました。

「法廷では奥さんと僕のことでも申し上げます。尤も和姦と言うことになりますかな。さ、一刻も早く警察へ届けて下さい。それまでこゝやつておしのさんをいじめていますから」

しかし、私は呆然と立ちつくしているばかりでした。

それから一時間ほどして、私はしのを連れて家へ帰つてきました。夫には、昨夜からのしのの行動をしのからも私からも聞かない。と、約束させて、しのは（私も）やつと安心したような表情になつたものです。

志津子は、この日記ともつかぬノートをこゝまで読むと、急に気分が悪くなつて、まだ古びてもないその大学ノート部屋の隅の方へ投げ捨てて再び掃除を始めた。夫の家を飛び出して暫く兄の部屋に居たが、やつと手頃な部屋が見付つて移転してきたばかりの彼女は、朗らかにのびのびと部屋の掃除を始めたところが、襖の破れ目にノートらしいものがのぞいていたので、引出して読み始めたところなのである。

彼女は兄を追返したことが悔まれてきた。

実のところ、何となく恐ろしくなつてきたのである。彼女はハタキを振りながら、「悪の部屋。悪の部屋」と、知らぬ間に呟いていたが、そう思い始めると、この部屋の壁にも畳にも天井にも不気味な何かしらがあるように思えてくるのである。窓の外には大きな椎の木があつて部屋を暗くしていた。

——悪の部屋。

——馬鹿ナ。何んでもないじゃないの。

——でも怖いワ。今夜は兄貴に泊つてもらおう。こんな淋しいところだもの。

——そんなことで生きてゆける。

——あの襖の中には、まだ何かありそうだワ

志津子は机の位置を決めるのに困った。どうやってみても、あの日記の中にあつた正木の机の位置と同じように思えてならないのである。それに、何か人の気配がして、幾度も窓から戸外を眺めたり、部屋を出てみたりしたが離れの一室に志津子より他に居る者はない。彼女は、あんなノートを読んだから暗示にかゝつてしまつたのだ。と、思い直して、掃除が終ると、ここへ来る途中で買つてきたサンドウィッチを食べ始めた。彼女は、食事をしながら柱にかけた鏡を眺めた。鏡は窓外の木々を映していた。その木陰に人影が走つたように思えて、志津子は思わず振返つた。窓外は風もなく静まりかえつてゐるだけである。その静けさの中から松葉杖の音が聞えてきた。

——兄だ。

志津子はやつとほつとした。兄の正信は、松葉杖をついて窓辺へやつてくると、

「どうだい。」

「この部屋ね、何だか薄気味悪いワ。」

「そうだろう。正木の居た部屋だからな」

志津子の顔は急に青ざめた。

「正木つて、ゴムのハンコヤさん。」

「そうだよ、よく知つてゐるな。」

「私、この部屋、やめるワ。」

「ほう、気に入らんか。安いんだけどな」

「気味が悪いわ。それより、兄さんこそ、どうして正木つて言う男知つてゐるの」

「うむ、一寸な。」

「はつきり言つて頂戴！。そうじゃないと私今夜も兄さんの部屋に泊るわよ。」

「弱つたな。俺はモデルのことで、二、三度会つただけなんだ。モデルを世話してくれるつて言うんでね。何も正木に頼まなくつたつて、公的なモデル屋のところへ行けば、いくらでもあるんだがね。あいつ、奇妙なことを言うんだ。皮膚のないモデル……」

「よして！」

志津子は耳を覆つてしまつた。

「まあ奴はサドだつたんだな。どうだ、今夜泊つて行つてやろうか。」

「お願い、恐いワ。こんなところに一人なんて。」

正信は窓からひよい。と、部屋の中に飛込んできて例のノートを拾いあげた。

「それよ。あの襖の中から出てきたの」

正信は息をつめて読み始めたが、次第に緊張した表情になつてきた。彼は、ふと、顔をあげて志津子を見た。

「お前、みんな読んだ？」

「いえ、最初のところだけ。」

「ひでえ。ひでえことをしやがる。」

正信は、ノートを机の上へ投げ出すと、押入を開けてその棚の上へあがり、押入の中の天井板を外し、天井へ上つて行つた。

「志津子、懐中電燈を持つていたかな。」

と、正信が天裏から志津子へ声をかけた。

「ないワ。」

「ローソクは？」

「ローソクもないわ。」

「情無いな、じゃ、マツチだ。」

志津子は正信にマツチを渡した。

「何かあるの。」

「うむ。」

「何よ。」

正信は大分奥まで入つて行つたらしい。天井裏で、ぼーつと、マツチの光が見えた。

天井裏をのぞいていた志津子は、その時、人の気配を感じて、はつ、と、振返つた。丁度その時、スプリングコートを着た長髪の青年が正信の松葉杖を振り上げて志津子をねらつていたのである。

「兄さん！」

志津子の叫ぶのと、青年が松葉杖を振り下

したのと同時であつた。志津子は頭がガーンとなつて前へのめつた。のめつて机の上にあるノートの上に手をついた。青年は志津子の手からノートを奪おうとしたが、志津子は癡癡したようにノートを掴んで離さない。青年は再び松葉杖を振り上げた。天井裏から急いで出て来た正信は、押入れに並べてあつた志津子の香水瓶を青年に投げつけた。

「畜生。」

青年は松葉杖を投げ出し、窓から飛び出して逃げ去つてしまつた。

「ひどい野郎だ。おい、志津子、志津子、大丈夫か。」

正信は志津子を寝かせ、窓に鍵をかけて医者呼びに行つた。

志津子はその晩から、又、渋谷の正信の部屋に寝かされた。彼女は二週間も寝たまゝであつた。正信は荻窪の部屋に寝泊りしていた気のせいか、志津子には正信が次第に痩せて行くように見えてならなかつた。彼女は、それをあの部屋のせいだ。と、思つた。

或日、志津子は気分がよいので戸外へ出たもう初夏で、爽やかな風が肌に快い。

——荻窪へ行つてみようかしら？

志津子は駅へ向つた。彼女は夫加藤一男と

まだ正式に離婚してゐるわけではなかつた。

それで、何となく街を歩くのが気兼ねであるのだが、毎

日部屋にも引籠つていられる性分ではないしもう離婚するのだ、と云う心の強みがあつたもう一男のあのサドに

悩まされなくても済む。自分がサド的であるのにより強力なサドにたえず虐げられるのはやり切れたものではない。結婚の間中、サドとサドの噛み合いであつた。そして、いつも志津子の負けなのである。女が男に負けるのが当前のような現実が、彼女には我慢出来な



つたのである。

——まあ俺のところ半年も居るがいい。唐手の一手でも教えてやるからな。

正信はそう言つて逃げてきた志津子を見て笑つた。が、事実、正信は不思議な術を心得ていた。人間の手足の自由を奪つてしまうこ

と位何んでもないらしいのである。

荻窪へ着くと、志津子はやはり落付けなかつた。彼女は、例の「悪の部屋」へ入る前に窓から部屋を覗こうと思つた。が、窓には厚い生地の緑色のカーテンがかゝつて内部は全く見えなかつた。彼女は玄関へ廻つた。戸を開けると、部屋からかすかな呻きがもれてきた。それはほんのかすかなものであつたが、志津子にはピンときたのである。

正信が足を引きすつて出てきた。

「お前か。鍵をかけておいたのだから」

「何？」

「いや、お前のようなお嬢さんにはあまり見せたくないものだ。」

「見たい！」

「よし、だが驚いて気絶するなよ。」

「ゼツタイ、ダイジョブ。」

志津子は正信の後から部屋へ入つて行つてはつ、と、息を飲んだ。肉付きのいい見知らぬ夫人が私の机の上に仰向けに縛りつけられていた。そして、二週間前に私を松葉杖で殴つた青年が、夫人の豊かな腹の上に左手を強く押しあて、右手で鋭利な刃物を、夫人の肌の上に、慎重に滑らしているのだ。青年は、ちらつと志津子の方を見て、無表情に頭を下

げた。

「志津子、正木君だよ。」

「そう。いつぞやは。」

「すみません。あの時はどうも……」

「兄さん、こんなことをして、傷が残らないこと？」

「いや、大して。ソ連から冷蔵植皮と云うやつが入ってきたら。あのコツだ。この方は恋人の皮膚を自分の肌に付けてくれ。と云うお頼みで、彼氏は昨日やつていった。此の間は陰毛の生えている部分を交換してくれと云う若い二人が来て汗をかいだが成功だつたよなア、正木。」

「はア。」

「兄さん、変つたわネ。」

「そうでもないさ。」

「もう、渋谷の方へは帰らないの？」

「いや。もうお前もこの部屋で安心して住めるだろうから、俺は帰るよ。正木もこんなことはないやになつたそうだ。」

「そう……、じゃ、私がこゝに居て、代りにやつてやるワ。面白いじゃないの。人間の皮を剥ぐなんて。」

「それそれ、この部屋に住もうとする者はきつと、精神状態がアブノーマルになつてゆく

んだ。」

・正木の作業はそれから一時間ほどして終つた。夫人は礼を述べて帰つて行つた。

志津子は正信と正木を送り出すと、今迄見知らぬ女が横たわつていた机に腰掛けて、ぼんやり宙を見つめた。彼女の右手には鋭利な薄刃の刃物が握られていた。それは、彫刻用のものではなく手術用のものであつた。志津子は次第にそれを使つてみたくなつてくるのを覚えた。

——若い娘がいきなりこれをつきつけられたらどんなに驚くだろう。縛り上げて、これでお尻を撫でてやろう。どんな顔をするか見ものだわ。皮膚交換業、それも悪くないけど、純粹じゃあないワ。よし。手はじめに智子をやつてやろう。志津子は刃物を置いて部屋を出た。彼女の脳裡には女子大生大塚智子の若鮎のような姿態があつた。

——あれはまだヴァージンだつたワ。一寸哀れかな。いいや。それから一男がいる。それから……

彼女は自分が何でも出来るような気がしてきた。悪の部屋の悪の女王になりつつあることに彼女は気付かなかつた。何故にこのような気持になつて行くのかも。(つづ……)

Das Grausame Weib

△ 残虐なる女性達 △

1901年刊行の独文絵入単行本より

森 本 愛 造 ・ 訳

第一章支配者としての女性 (二)

十八世紀の女支配者の権力濫用について多くの資料を提供する。

引例9、アンナ・イワノオヴァ女王

彼女は或る時臭い油を使用した料理を提供した科で彼女の食卓から見える窓に料理人を絞首刑にした。或る宴会の時、上厨長クラッキンにフランス葡萄酒の毒味を命じた。彼が習慣となつて居た癖で一寸杯のふちを袖で拭つたとき、彼女は直ちに警視總監に此の男を引き渡した。其の後でこのクラッキンにどのような運命が待つて居たかについては後述の諸例が大概の見当をつけてくれるのである。

キエフの大僧正、ワナローヴィツチはデウムの讃誦の前に彼女の名前を一寸云い違えた事によつて彼女の統治の間ずっと獄にながれねばならなかつた。彼女の音楽上の目覚しい興味と共に可様な烈しい加虐の慾望は副音楽的に常に並行して行つた。即ち女王の面前で歌手達は屢々唱わせられたが、その時一寸でも早く声を切つた者には素早く彼女の答が顔面に烈しく与えられ、一生を洗濯所で暮す事を命ぜられたのであつた。

シベリヤの或る郵便駅で、すぐ近くのペー

テルスブルグで公然と語られて居た王女アンナ・レオポルドーヴナの結婚について話をした或る内閣達吏(飛脚)は酷い鞭刑に処せられた。又、女王の御氣に入りで同時に愛人であつたビーロンが彼の仇敵ヴォリンスキイを死刑にする様に請願した時、直ちに女王はその願を聞き届けた。そうして女王の面前で拷問台にひいてゆかれ、舌と右腕を引き抜かれた。ヴォリンスキイが半死半生でのた打ち廻るのを眺めた彼女は、直ちに斬首するのを止めて、更に左腕を切り落し、木の材で彼を突刺して後、始めて慈悲深くも彼の首を斬り落させたのである。

常時駐露外交官であつたラ・ロシユタルチエとマルデフェールの統計に依ればアンナ女王の十年の統治の間に七千人以上が死刑に処されたし、三万人がシベリヤへ追放されたと云う。

引例10、エリザベート一世

この女王について周知の事實は彼女が首相オステルマンと陸軍元帥ミニヒに死を宣告した事であるがその詳しい記述は更に残忍な女性の心理を裏書している。即ち当初の宣告は斬首刑であつた。この余りにも温健な処刑方法に反対した或る者の助言によつて、女

王は直ちに翻意して、オステルマンに車裂きの刑を、ミューニヒには四つ切りを宣告したのであった。(読者の中の或る人々は以後の記述を意外に思われるかも知れないが精神的サディズムの華々しい開花の豪華な実例がここに在る事に留意されたい。——訳者)

併し乍ら女王は最後の瞬間までの助命権を留保して居た。罪人達に無残な刑が用意されオステルマンの四肢を結びつけられた四頭の馬が刑吏の持つ革鞭に恐怖の眼をむけた時に女王は刑を諦めて助命したのである。彼女の女官ナタリア・ブローキンはずまらない理由で女王自らの手で振われた烈しい鞭を血の出るまで味わねばならなかつた。かゝる幾つかの実例によつて次の記述は例証される。

即ち、女王は常に慰安の為に拷問所へ出掛けてゆき、犠牲者の苦しみを眺めて喜んだのである。この女王について同時代の人々が正しく言及した様に温和と俊厳と憐情と猛虎とは常に同居していたのである。彼女の召使達に対して女王は残酷であり、彼女の愛用の革鞭は常に召使達の血で濡れて居たという。

引例11、カタリイナ二世(エリザベート一世の娘)

彼女は気持のやさしい人であつたと考えら

れている。私達も亦そう思うのであるが併し政治犯の処刑の場合だけは例外であつた。又日常生活に於ても、その不快の念の大きかつた時には習慣的に残酷な処刑を宣した。

即ち、ピョートルスホーフに滞在中、馬丁が惹き起したつまらぬ騒ぎの故に彼女が就眠を妨げられた時、彼女はこの馬丁に自ら犬鞭で百通の仕置きを与え、刑吏に命じて、鼻を切り取り赤く灼けた鉄を額に押しつける事を実行させた。

私達が眼を東方にむけると、こゝに完全な服従と、意志なき人間達を見出すのであるが同時にその刑は荒つぽく、且つ人間離れしたものである事に驚かされるのである。

併し乍ら、東方諸国の皇妃は単に王の最初の性交の相手である故にか、その権力は左程大きくなく、従つてその甚だしい加虐行為の実例は多くはない。

併し之は決して東方の女性が加虐慾望に乏しいという事にはならない。即ち、偶然皇妃が絶対支配を権利として行使し、又夫である王を無能なる故に排斥して王を経由して暴力を振う場合の幾つかをお目にかけようと思う彼女等は正に最も洗練された残虐行為に我を

忘れるのである。

引例12、シアン家の最後の裔村王の妻ター・キア妃(支那)

この皇妃の名は正にパオーロという前代未聞の刑具の発明によつて有名である。(挿絵参照)之は柱状の焙焼炉であつて、罪人は体の前面を炉の外側に密着する様に鎖で繋がれる。炉に火が入れられると炉は全く徐々に暖まり遂に灼熱する。この刑は当然罪人達の恐ろしい、苦しい、そして全ゆる精神的信条を破壊する速度を以つて犠牲者達をおもむろにこがし、焙り、遂に焼き殺すのである。この死刑が最初に実行された時、王は居合せた妻に向つて満腔の賛意を示したとパルセノーフは書いて居る。この妃の残虐行為についてパルセノーフの細かい報告を参照して頂き度い。

引例13、清朝のツィ・フウシイ妃(一八三五——一九〇九)支那

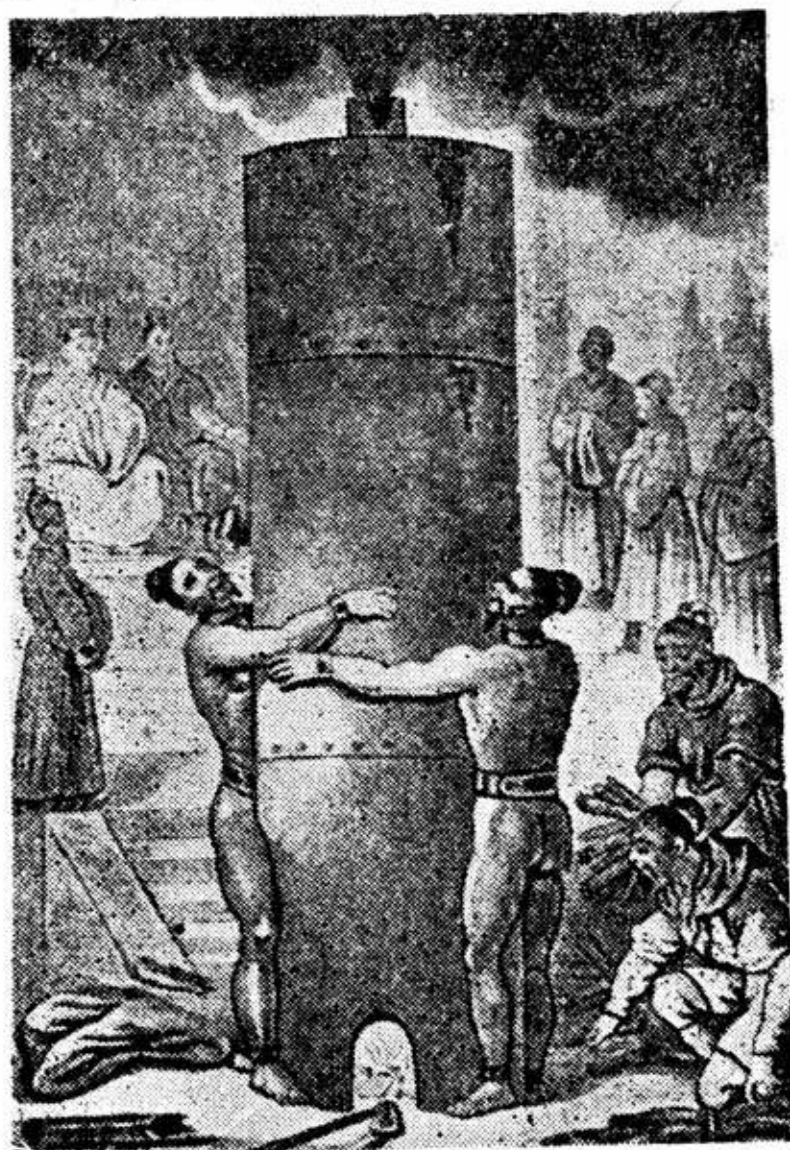
この皇妃の残酷な家庭内の懲戒について、その女官であつたデル・リンの日記は興味のある事実を教えてくれる。

「私は、皇妃が宦官達に向つて「お前達はだらけて居る」というのをきいた。私が皇妃の前にゆくと皇妃は「あの者達はまるでなつ

ていない。二、三日も罰を貰わなかつたらもうそれを欲しがつて居るんだもの！」と云うのだつた。「奴等を失望させるのは一寸可哀そうね。欲しがつて居るものを与えましょう」私は皇妃が一体誰をどうやつて罰するのかについて些細な好奇心を動かした。皇妃は私に聞くのでした。「お前は一体以前に誰かを笞打つ立会人になつた事はおありかい？」「はい、小さい頃裁判所でシヤンシイ（地名）のヤンチエーキヤン（地名）に居たとき罪人が鞭打たれるのを見た事があります」「そうかい、しかしその罪人達はきつとこの宦官達よりもずつと軽い刑だつたに違いないよ」そうして、私達の目の前で宦官達は彼等の身体を皇妃の酷たらしい笞の下にさらされねばならなかつたのである。又、或日皇妃の昼寝の最中に爆竹を發火させた者が居た当然宮殿の中は大変な騒ぎになつた。皇妃は私に「例の袋を持つておいで」命じたので、私はそれを差出した。この袋は中に一本の細い竹の笞が入つており、宮殿の中の至る処に吊り下つており、皇妃が何時でもその一撃を

何人でも打ち下せる様になつていたのである。皇妃は女官達に各々一本宛の竹製や革製鞭を持たせて宦官達を打ち据える様に命じた。皇妃は私達をヴェランダから眺めていたが、私達は宦官達の様子が余りおかしくて、強く打ち据える力がぬけてしまつた。突然向うから

は城外でやつて居た——というより鴉が城外へ飛んで行つて爆発したので判らなかつたのだが、今日は折悪しく皇妃の近所で爆発したのでした。皇妃は之をきいて非常に怒つた。下手人の宦官は直ちに引き出されて地上に腹ばいにさせられ二人の宦官が重い竹の棒で足を打つた。彼はこの間中一言も



イル・パオロ (IL PAORO)
R. WREDE氏著
DIE KÖRPERSTRAFEN

より
の事件に出会つた、
彼女の手記は更につゞいてい

る。
// 或る日、皇妃の髪を梳る宦官が一本の毛を抜いてしまつた皇妃は「髪を抜いたのか？」きいたが、この新米の宦官は愚かにも「はい」と答えてしまつた皇妃は「その毛を元通り植えつけるように」と命じた。しかし

それは出来る事ではなかつた。皇妃は宦官長に話して、その男を馬に使う一番細い革製の鞭で死んで息が絶えるまで何回でも打つ様に命じ、その勢で、何の罪もない料理人達すべてを同じ鞭で自ら懲しめたのである。

ロバックハウス及J.O.P.ブランド著「皇

妃の昼寝の最中に爆竹を發火させた者が居た当然宮殿の中は大変な騒ぎになつた。皇妃は私に「例の袋を持つておいで」命じたので、私はそれを差出した。この袋は中に一本の細い竹の笞が入つており、宮殿の中の至る処に吊り下つており、皇妃が何時でもその一撃を

宦官長が下僕の一隊をつれてやつてきた。彼は今迄昼寝をしていたのであつた。皇妃は彼に例の爆発の真相を究明させた。原因はすぐに判つた。宦官の一人が慰さみに鴉をつかまえてその足に爆竹をつけ、点火して放すといふ悪いたづらをしていたのでした。之は今迄

妃治下の支那」一九〇一年倫敦市ウイリアム・ハイネマン書店版によれば、この女王の無頓着苔刑や斬首刑の詳しい報告がある事を附言して置く。

引例14、マダガスカルのアナツオーラ女王
アナツオーラ女王治下の地域を一八五七年に旅行したイーダ・ブファイエルはその記録の中で彼女について次の様に述べて居る。

「この血に飢えた残酷な女は近親を七名死刑にする事によつて統治を始めた。彼女が残酷であるだけ皇太子ラフオトは善良であり、前者が流血を好むだけ後者は抵抗し難い嫌悪を持つて居た。皇太子の最大の努力は女王が目下の者に加える酷い刑や多くの死刑を緩和し、妨害することに対して払われた。彼は時折、女王の意に反して祕かに罪人達を自ら解放した事さえあつた。女王は疑う所もなく、世界で最も残酷で傲慢な女性の一人であつたその歴史は惨虐と流血の他の何物も書く余地がないのである。彼女は毎日五人以上の死刑を宣告したと伝えられる」

彼女は即位後、直ちにキリスト教を厳禁した。所が或る老婆がキリスト教信者として告発され、捕えられた。これは正に一八五七年七月十一日であつたと記憶する。女王の命令

で老婆は市場の公衆の前で背椎を挽き割られて死んだ。この旅行記の大部分はこうした出来事によつて充満して居る。

私は支配者としての女性の引例を茲で終ろう。世界歴史に現われる冠を戴いた女性達はその数は余り多くはないが、その中大部分が途方もない残酷さと苛烈さを示したという事及び彼女等は同情というものに恐らく程遠い心理の持主だつた事に注意すると、女王達に於ては権力を濫用する機会と、権力の濫用自体が多かれ少なかれ同一のことであつたのだという事を認めざるを得ないのである。

訳者註、以上で原著の第一章は終つて居るが、こゝに引例された十四の実例の他に最も面白い幻想的な作品を私は挙げて置こう。それはジャン・コクトオ Jean Cocteau の「双頭の鷲」という映画である。これは恐らく都内の人々はすでに御覧になつたと思うが、軍装の女王が読書係の男（ジャン・マレエ）を乗馬鞭で厳しく打ち据える場面、台詞はたしか次の様な文句だつた。

「これでもお前は恥しくないのか！臆病者！勇気を出すのには私の鞭が要るのか！よし、少し鞭を上げよう。——そら！」

この映画にはもう一つ、断崖の上で女王が怖がる馬を拍車と鞭で脅かしている場面がある。台詞は

「私は恐くない！お前は恐いのか、これでも恐いのか？これでもか？」
勿論最後の台詞の合間に鞭が烈しく使われるのである。

この実例は詩人コクトオの眼に映じ、魂に巢喰う一つのマゾヒスティックな要素の現われではあるが、併し乍ら、女支配者の最も自由な理想的な映像ではあるまいか。

女支配者にとつては私達が単に速く歩かせるだけの為馬を管打つのと同様に男を自分の持つ乗馬用の鞭（殊に女性の横乗り用の鞭は長く、且軟かく、烈しい痛みを与える様に作られている）で懲らす事は何でもない事だし、ましてや男の皮膚がその鞭で引き裂かれて血が流れても、それは悪い事をした馬が恐しい拍車で腹を血が出るまで蹴られて懲戒されるのと同じく当然の事なのである。

x

x

x



悩^{なや}ましき切腹^{せつぷく}悲願^{ひがん}

児島輝彦



私は二十年来「切腹したい悲願」に悶え来つた者です。私は本誌の三月号、四月号に連載された中康氏の「切腹史談」を読み、非常な同感を覚えるとともに種々教えられるものがありました。普通人には理解し難い事でしょうが私達「切腹願望者」にとつて切腹は何物にも換え難い魅力であり、従つて私達自身切腹に就いては独特の美学を持っています。私は奇譚クラブに発表されている諸兄の赤裸々な告白を読むにつけ私の苦悩をさらに出したい衝動を抑え切れません。(それは甚しい露出慾と自虐心理の現れかも知れない)切腹はサシジム・マゾヒズム、露出症、竊視症、自虐症、ナルチシズム等殆んど凡ての性

的倒錯の要素を備えている点正しく日本文化の一大傑作です。しかし一般人はそれを意識せず、一方には最大の苦痛に耐えて自己に刃を加えるヘロイズム、他方には殉死(追腹)身代り討死、諫死、殉忠殉国等の封建美德(フアシズム)の二つを支柱として、切腹は千年の永きに及んで伝えられて来たものです。理窟はこれ位にして次に私の過去を簡単に述べて見ます。私が切腹に魅力を感じ始めたのは何時の頃かはつきり分らない。しかし夢の様な幼時の追憶の中から先ず思出されるのは、通学途中の額縁屋の店頭に掲げられていた「白虎隊自刃之図」です。落城の炎を遠景として、何れも諸肌脱ぎになつて割腹してい

る少年隊士の悲壮な姿、画かれた一人々々の姿態は私の脳裡に深くくく刻み込まれています。それは多分九つか十の頃で学校の行き帰りにそれを眺めるのは何か胸のわくくする楽しみで、時々家の中でこつそりとやつてみる事もありました。それから歴史の時間に教えられた村上義光公の壮烈極まる割腹自刃の話は幼い私の血を湧かせました。中学入学の頃から私は暇さえあれば図書館に入り浸り、太平記を初め、軍記物の類を読み漁り武士達の悲壮な自刃場面を探し求めるのでした。そして凄愴な切腹の描写を見出した時、また惨虐な切腹の絵を見出した時、私の胸は異常な悦びに震えるの

です。それから深夜家族の寝静まつた頃姿見に向つて全裸体でやる割腹の真似の楽しさ、此の狂態は切腹願望者に共通しているもの、様です。就寝後は今までに読んだ軍記物語の自刃場面を色々と組合わせて奇怪な空想の世界が展げられます。それは日増しに形を整え、あたかも歌舞伎の名作の如く時に応じて私の空想の舞台で演出されるのです。

例えば「只同枕に自害して、後世までも主従の義を重んずるより外の事はあらじと思ひければ、梅丸泣々主の首を取つて、錦の直垂の袖に包み、遙の深田の泥の中に埋めて後、鎧脱捨て大肌になり腹十字に掻破り中なる腹綿手繰出し、判官の首の切口に引掛けて隠し上に打重りて抱きつきてぞ死したりける。」と言う風な戦記物語の文脈を真似た物から最近近代小説的に詳細を極める切腹描写に進み、それ等は実に数時間の長きに及び、その後は快い疲労感を覚えつゝ眠りに就くのです。

私は一方では視覚的な慾望を満すために色々切腹の絵を集め、また自分の切腹姿態をデッサンし、これを基にして種々様々切腹絵を画き続けて現在に及んでいます。飯盛山に参詣した時は何よりも先ず白虎隊自刃の図を

買い求める私でした。

切腹と性慾、私の場合この二つのものは密接不可分の関係を持つていますが、唱歌「白虎隊」の一節「いざ潔く死すべしと枕並べて心地良く刃に伏しし云々」の句は切腹と性慾の関係を暗示して至妙であると思います。

中康氏の論文にも明らかな如く、切腹はそれをを行う者にとつては、自己恋着的、被虐的自虐的、露出症的な快感となり、それを見る者にとつては加虐的、窺視症的な快感となります。此の傾向は切腹する者が若く清らかな男子である場合は殊に著しいものと思われまゝ。衆人環視の中に端座して割腹せんとする美青年武士の姿、その美しい顔には微笑さえ浮べ、傷ましくも男々しく死に立向わんとしている。やがて静かに諸肌を脱いで筋肉の美しく盛り上つた白く逞しい膚を殆んど恥部も見えんばかりに露わす。続いてドキ／＼する腹切刀がふくよかな下腹部にグサと突込まれる。迸る鮮血！苦痛を耐えて左から右へキリリ／＼と引廻す刃のあとから血塗れの大腸・小腸がだらだらと食み出してくる。見られる者にとつても見る者にとつても強烈な快美感を覚えさせる瞬間です。

私は特に若者の黒々とした毛髪（腋毛、恥

毛を含めて）と雪白の肌と鮮紅の血潮の三色のあやなす色彩美を強調したいと思います。勿論絶大な苦痛と快感に歪められた美しい顔自らの腹の肉を切り割く努力に怒張する逞しい裸身、抉り出された無気味な臓腑の形態美もすばらしい観物です。加うるに青年に死を強制する悲壮な事情が存在するならば真に絶大な快美感を味わされるでしょう。

しかし乍ら切腹は如何にその性的意味が強調されようとも結局は自慰的な副次的なものに過ぎません。此の魅力が更に発展する為には、愛の対象が他に求められなければならぬ。私の場合も思春期から二十二、三才までは何も考えも無く一途に此の自虐的な悦びに身を任せて来ましたが、私は異性には殆んど魅力を感じた経験がなく、従つて心では異性を愛しながら割腹には時処となく勃起すると言う悲哀を感じた事はなく、二十四才頃から同性へのほのぼのとして恋情が芽生えて来ました。一体切腹願望者の場合、自己も含めた同性の堅く引締つた逞しい肉体へと引かれて行くのは極く自然な傾向ではないでしょうか。「切腹と同性愛」は「切腹と異性愛」よりも合理的です。切腹願望者のナルシス的傾向（それは鏡前の腹切り遊戯にあらわれてい

る）から見ても、また切腹の男性美、悲壯美、凄惨な自虐、甚しい露出的傾向から見ても、切腹は所詮女性のものではありません。

私は大分前から同性の逞しい裸身に魅力を感じていましたが、それが愛であるのを知ったのは前述のように二十四才頃です。街でふと見染めた美少年の儂が今や私の夜の空想に忍び込んで来るのでした。歴史上では絶世の美童を三人まで寵愛し、最期に彼等を次々と割腹させて手づから首を刎ねた上で己も快く腹を十文字に切り開いて果てた関白秀次は如何に幸福であつたろうかと羨しい限りです。また「藻屑物語」の舟川采女、伊丹右京の両美少年が大勢の見る前で相揃つて腹を割き返す刀で心行くまで刺違えて果てた物語には非常な刺激と興奮を覚えます。「刺違え」。これもまた切腹と共に古くから行われた自刃の方法です。二人の者が互いに相手の腹、胸、咽等を刺貫いて枕を並べて死ぬと言う変則的な自刃方法ですが、これが主従、兄弟、父子親友の間で行われた事実から見ても一種の「愛の行為」であることが察せられます。

刺違は切腹に劣らず悲壯な行為であるし、性的にも切腹のもつすべての意味を備えています。しかも愛する相手の体を抉る事により

サシスチックな、また己が身を抉られる事によりマゾヒスチックな快感を覚えるので悦びは二重になるのです。また自分の快苦は愛人の快苦と同一であるという同行愛、二人して枕を並べて絶命するという情死的喜悅が加わるので、当事者の快美感は蓋し絶大なものに違いありません。これを性行為に比すれば、切腹は手淫であり、刺違えは相互手淫か相互口淫（異性間の性交でなく、また男色に於ける肛門姦淫とも異なります）であると言ふべきでしょう。感覚的にも後者が前者よりも遙かに快いのは当然です。夜毎の空想の中で私は封建時代の美青年武士となつて美少年武士との激しい愛慾の果てに、枕ならべて腹を切り刺違えて絶大な歓喜の裡に死ぬのです。そして空想の終りに爽快な眠りに就くのですが此の習慣は何か死の本能と言ふ様なものを思わせるではないでしょうか。――

それは今を去る六百年の昔建武中興の大業が破れて天下再び戦乱と化した興国二年の秋私（大館氏明）は城中の大広間で宗徒の侍十六人と共に自害せんとしている処だ。衰え行く吉野朝に忠節を尽し、先程の千町ヶ町の戦では僅か三百騎の手勢で細川頼春七千余騎を迎え、其の後今の世田城に籠つて三十余日、

もはや矢種も射尽し食糧も尽きて運命極つた今朝程から勝誇る敵勢と快く最後の戦を交えた後、今は身を締付ける鎧物具をかなぐり棄て鎧直衣の袴ばかりに小袖一枚になつて爽かに敷皮の上に座している。私の傍に寄添つて座っている十七八人のまばゆいばかりの美童は私の男色の相手の色小姓だ。侍達も皆小袖一つに直垂袴の姿で私達の前に二列に向い合つてすわっているが、一同の面には死の恐怖も見られず一種の陶醉の表情が溢れている。

唐紙には私達主従十七人の姓名、行年と辞世の和歌が墨痕淋漓と書記してある。先ず最初に「君の為義の為何か惜しからむ、死して甲斐ある命なりせば。大館左馬助氏明生年二十八才、興国二年九月三日君恩を報ぜん為に腹掻やぶつて死まんぬ。」と記してあるのが私のだ。次に「腹切りて二世の御供仕る、快きかなもののふの道。小山宮十代丸生年十八才、興国二年九月三日主従の義によつて追腹を切り死まんぬ。」と記してあるのが彼的美童のである。以下金谷経氏、河野通郷、浅海六郎等十五人の侍の最期の所懐が美事な筆跡で記してある。

私は朝廷より賜つた錦の御旗を細かく引裂

いて皆の者に渡し、銘々これをもつてキリリと鉢巻を締めさせた。

これで割腹の用意は終つたので、主従十七人東の方主上の居わします吉野の行宮に向つて平伏し最期のいとま乞いをした。男子と生れ来て万乗の君の御為に身命を抛つて働き力尽果て、我と我が腹を割いて果てる、男子の本懐是に過ぎるものあらんや、感激の熱涙が私達一同の頬を止めどなく伝わつて流れ落ちるやがて涙を拭つた私は美童に向い「宮千代丸覚悟は良きか。」と問う。彼は少しも憶せず、「はい、自害腹切はもののふの習、覚悟はかねてより出来ております。ただ後の世までもほめはやさるる美事な切腹を仕りたく存じます。」と答える。



「何ぞ思ひ残す事共は無きや」と、再び問えばにつこりと美しい齒並を見せて「殿の御供仕り死出三途を越ゆる身に心残りとしてござりましたよや」と答えるそれを聞いた私の快さ、今は晴々と声張揚げ、

「方々、主従の契りは三世までぞ。いざ諸共に思ひの儘に切腹なさん。」と言ひ放ち鎧通しの鞘を払つた。上帯を切棄て袴を寛げて押下げ練絹の小袖を押し膚脱いだ。少年の昔は西国随一の美童と謳われた私である。諸人渴仰の的だつた雪の膚は男盛りに愈々その色艶を増し、しかも筋肉の隆々と盛上つた我ながら惚々とする程の美事

な裸身である。己れの肌をジツと見詰めている内に私は何か露出的な悦びにかられ腹帯を解くや衣をぐつと押下げて下腹を腿の附根までさらけ出した。また背中の方は女と紛う豊満な双の臀たぶらを半ばまで露わした。快さが総身を震わせるのをやつとの思ひで抑えつゝ前に坐つてゐる宮千代の美しい顔を無量の思ひで見詰めた。彼もまた花の顔を美しく上気させて私の顔から下腹までの裸身を恍惚たる表情で眺めている。私は両頬がカツカとほてるのを覚え、両の掌でよく張切つた便々たる腹を撫で擦りつゝ宮千代の用意を促す。

彼は先ず静かに一礼した後、帯紐を解き放ち目の覚める様な模様の小袖の両肩を脱いで同じく大膚脱になる。あゝ何と言う美しくも勇ましい姿であろう。雪を欺くばかりの若肌のつやゝかさ、双の胸にポツリと紅味を帯びた乳首の愛らしさ、すらりと引き締つた腰もとの初々しさ香わしさ、ふつくらとした腹部の柔い息使い、思ひ切り押し下げて解き拡げた緋の腹帯。そして極度の興奮に美しく上気した顔、鉢巻の上にゆらめく豊かな前髪、それ等を眺めている内に私の脳裡には此の美童と交した数々の草枕の場景が走馬燈の如く浮び、荒々しい歓喜が全身の血液を奔騰させ、

私は堪りかねて宮千代の腕を取つて引寄せ、二人は侍達の見る前で胸と胸、腹と腹をピツタリ押付けて互いに力の限り抱き締める。

侍共は此の有様を或は羨しげに或は讚美の表情でジツと見詰めているらしい。敵勢が近くに迫っている模様で、鬨の声と共に激しく刃の打合う音がするのをうつとりと聞きながら、私達は互のすべすべした裸身を合せる。

この時バタバタと足音がして、髪をおどろに振り乱し素裸の上半身を血と汗にキラキラと光らせた若武者が駆け込み、敵勢が本丸近く攻入つたのを告げる。私達は漸く腕を解き双方に別れて対座する。侍達も一齊に諸肌脱ぎ遅しい上半身を露わし、短刀逆手に抜き放ち腹を撫でさすりつゝ身構える。私は宮千代と向い合つて右手に刃を執り左掌で先ず四五回腹を撫でまわし、次いでぎゅつぎゅつと揉んでから左下腹の皮をつかんで右の方に寄せ、そして腰骨のきわの張切つた肌に切先を当てがい息を腹一杯に吸込む。

「えいーッ」

鋭い気合諸共力の限り突立てば刃先が一寸余り入り、同時に赤いものがサツと飛び散る。激痛を耐えて左手を持ち添えると臍の下を左から右へふりふりと掻き割いた。苦痛の

中にも一種例えようもない快感が全身に漲つて来る。刃が深く入つたので疵口が五分ばかり口を開き灰色の大腸がちらりと見える。刃を引抜いて刃先を下に向け心窩にズブリと突込むと鮮血が一間余りも飛び撥ねる。これを見て宮千代が

「死出の御供仕る。」

と叫んで短刀を左下腹に深々と突込みキリキリリと搔廻す。雪の肌が真赤な血汐で美しく彩られて行くのを快く眺めつつ柄口を取直して力をこめくわつと押下げると臍の下三寸余りまで切れた。血汐がザアツと噴出すとに色も形もすぎまじい諸々の腹綿がぐざぐざ共と溢れ出て膝から畳の上まで広がった。

（とうとうやつた。美事な十文字腹を俺はどうとうやつてのけたぞ。）此の快感と満足。（此の割腹の快さを誰か知る者ぞ。）宮千代はと見れば、これも快げな微笑を浮べつゝ細くしなやかな指先で血みどろの大腸を引出している処だ。（愛しの稚児よ、いざ刺違えて死出の旅路をむつまじく行こうぞ）私は彼の体を引寄せ、互いに左の腕を相手の背に廻して抱き、右手の刃の先を左の乳下に当てがつた。あたりではすでに侍達の追腹が始つてゐる。勇ましい掛声と共に持つた刃を我先に

ずぶりずぶりと腹に突立する。飛び散る鮮血。

一文字に切る者、十文字に割く者、思い思いたに己れが腹にあらん限りの惨虐の刃を加え無上の苦痛と歓喜に思わず出するめき声、ううツ、うわアツ、むむ、むう、という声に交つて、びしやツと濡雑巾でも叩きつけた様な音がするのは血氣盛んな武士が腸を擲出して唐紙に投げつけたものである。私達はそれ等のすさまじい声を聞きながら、三段に気合をかけて互いの胸を柄も通れと刺違えた。切先が背中まで露われたのをぐいぐいと挟り合うと未だ曾て味わつた事のない快感が全身を駆け巡り腰の辺がうずうずとして来る。あゝ何たる快樂ぞ。思わず「うわツ」と叫快の声を洩し合うと同時に、私達は何れも最後の努力で互いに胸の刃を抜いて投げ棄て、血でぬらぬらする体をひしと抱締めるとドツと折重つて倒れる。今は何の苦痛も無くたゞ類いなき満足と快感に酔いしれて遙かな夢路を辿る二人であつた。

侍共も既に悉く屠腹し終り、続いて今度は敵勢を最期の場合に入れじと死物狂いで戦つていた郎等達が数十人集つて一齊に割腹する。あとには血の海に浸つて悶え苦しむ裸のじしむら（肉塊）、疵口から長々と引出された小腸

大が生き物の如くにのたうつ此の世ならぬ惨美な光景であつた。——これは私の空想のクライマックスですが、空想は次々と新しい刺戟を求めて拡がります。その内から二三のあら筋を述べて見ます。

美男の若殿が最愛の美童と出湯で入浴中を暴徒に襲われ、二人とも一糸まとわぬ素裸で髪振乱して奮戦するが遂に力尽きて、湯船の中に並んで立腹を切り、腸を掴み出して賊に向つて投げつけた上、抱合つて血風呂の中に沈む。

或いは近習の若侍が殿御寵愛の小姓と密通し、殿の御留守中を幸と奥の間に忍込み同衾して歓喜の折しも不意の御帰館、進退谷り咄嗟の間に覚悟を極め、二人乍ら腹掻き切て刺違え、文字通り枕を並べ、衾を重ねて死ぬる。

或いは血氣不良の若侍が恋敵と一人の若衆を争つて、これを騙討にし、虫の息になつてゐる枕元で、若衆と二人で素ツ裸であらゆる狂態を見せつけた挙句、若衆の腹から己の背中まで一太刀に突貫いて快哉を呼びつゝ死ぬる。或いは一人の美少年が父の仇を尋ねる内ふと立派な浪人とねんごろになり男色の契りを結ぶが、彼こそ求める仇であることを知つて恋と義とに挟まれて悩んだ末、美少年は

その浪人を父の墓前に伴つて意中を打明け、兩人とも諸肌脱いで白鉢巻愛憎二筋の想いを一筋の太刀先に籠め、互いの腹と腹とを突貫いて重り伏す。

或いはずつと新しくなり、終戦の時、内地の航空隊で同性愛関係にあつた青年士官と少年兵が日本敗戦への悲憤と別離の悲

歎から寧ろ死を選ぼうと決意し、割腹の用意を進め、

一夜招魂社の境内に至り月下の芝生で最後の交情を遂げたあと、「敗戦の責を陛下に謝し奉り併せて自ら護国の鬼とならむ」旨を柱に血書し、日の出を持つて草上に正座し皇居、伊勢神宮を遙拝した後二人ながら軍服の上衣を脱ぎ裸身となり日の丸の

旗できりりと鉢巻し、万才三唱して千人針の腹帯を巻きつけた軍刀を以て腹真一文字に切割いて返す刀で刺違え絶大な興奮の内に絶命する。勿論これは空想ですが誤つた忠君愛国の思想を吹込まれた青少年の一つの悲劇としてあり得る事でしよう。——

此のような数々の惨



虐なポルノグラフィが次から次へと空想されるのです。五月節句の武者人形を見ても、その花の如き若武者の形が絢爛たる緋威の鎧や鍬形の兜を脱いで錦の直垂を膚推脱ぎ、黄金造りの太刀で真白な腹を割く処を想像して胸を轟かせる私なのです。しかし此のような空想のはかなさ空々しさ、空想は所詮空想に過ぎません。如何に快くともそれは悲しい自慰に過ぎません。愛人の得られない寂しさ、

此の骨を刺す孤独を慰めてくれる若人は居らぬものでしょうか。私は自分が昭和の人間であり封建の世に生れなかつたのを如何に悔んでも仕方のない事です。私は自分を理解してくれる懐れの同性を生涯求め続けるでしよう

勿論その様な青年に廻り逢つたとしても心中はしたくありません。私達は綿密な計画を立て、様々な切腹遊戯にふけるでしよう。二人であらゆる角度から切腹を研究し楽しく語合い、色々の道具（衣裳、髪など）を集めて

幻想的な割腹の真似をして遊ぶのも良いし、その姿を互いに画き、写真に撮り、前述の種々の空想を絵画化するのも面白いと思います（挿絵は筆者の自筆画に依る）

さじすちつく
こんふえしよん

犯 おか

され た

女 おんな

近 こん
東 どう
規 き
矩 く
也 や

(一)

はたはたとかなり強い北風が板戸をしきりと叩く。外は降るような星の輝きである。

美保は不図、しのびやかな男同志の話声に眠りをさまされてしまった。それは夢とも現ともわからず彼女の耳朵に響いて来た。

「誰かしら、今時分」
いぶかしい気持の儘、白い腕を伸ばして南

京虫といわれている腕時計を暗闇にすかして見た。三時を少し廻つた処である。

明日がシヨウの代り日であるのでつい一時間前まで、初日の舞台稽古を続けていたばかりなのである。小返しの続いた立稽古に踊子もバンドもすつかり疲れ切つてしまった。何時もより一時間も早く小屋をかぶつて稽古に入つたので少しは早く寝られると思つたところ、こり性の演出の北川は休憩も採らずレツ

スンを続けさせたのでフィナアレに入つた頃には皆へとくに疲れてその儘こるげるようにして眠つてしまったのである。

この船山楽劇団は池袋の西の広場に小屋建してから既に四ヶ月になる。去年、師走もし迫つて福島から上京した一行は正月の連休を当て込んでふたを開けたのであるが、思い

がけぬ客足の良さについ二月、三月と腰を据えそろう／＼が桜咲くというのにどうやら今年の春は東京で送る考えらしい。久し振りで旅を忘れた一同は大よろこびであつた。客足も順調である。新しいアイデアを生み出してゆく北川の演出の力も多かつたが、野育ちに近い地方出の娘たちが踊る大胆なストリップアクトも見逃せないもののようであつた。

美保はそつと起き上ると、便所にゆくため化粧鏡の引出しからチリ紙を三枚つかんで土間のサンダルをつゝかけた。

バンドと踊子の部屋は薄いベニヤ板の壁で仕切られているだけなのでお互いのけはいは手にとるやうにわかる。

「また、ばくちでも始めてるんだらう」

美保は銘仙の羽織を肩にひつかけたまゝ突当りの便所になつてゐるムシロを上げた。便所といつても名ばかりのたゞ地面に穴を掘つて周囲を竹柱で結びつけ、それに四、五枚のムシロを下して囲つたものである。男用としてその脇にこれも同じような穴を掘つてある。美保は寒そうに肩をすぼめ寝巻の裾をまくり上げた。しんと静まり返つた夜更けのこととて時折吸き過ぎる風の音以外は、つゝ抜けでどんな響きでもきこえさうである。

男達のひそ／＼話が急にやんだらしい。美

保は急いで穴を跨いだ、十人もの踊子だけに尿のたまりは早かつた。美保はなるべく音を立てぬためにチリ紙を当てるやうにした。美保が用を終えぬうち荒々しい下駄の音を立てゝ誰か便所に入つて来るらしいけはいが聞こえた。美保は心よい生理のほとぼしりを続けながら耳を立てゝ窺つた。男はコメディアンのものであつた。美保は早く出てくればいゝが——と思ひながら立ち上つて身づくろいをするとムシロをおさえて様子を窺つた。森は酒臭い小便を終えたと

「誰か、女便所に入つてんのかい」
と薄暗い二燭の電燈をすかすやうにして声をかけた。

「えゝ、わたし」

美保は仕方なしに小さく云つた。

「なんだ、美保ちゃんか、寒いなあ今夜も」
顔をしかめ森は美保の出てくるのを待つやうにして云つた。

「又お酒？　そう毎晩じや身体にどくよ」

美保はお世辞ともつかず、こう云い乍ら便所を下りた。森はいきなりその美保を抱きすくめると

「美保ちゃん、俺ほれてるんだよ、君に」

あつと云う間もなかつた。厚い森の唇が小さな美保の唇に重なつてしまつた。

「んむ……うつ」

突嗟のこととて身をかわすひまもない。

「やめて、お願い、ひどいわ／＼」

美保は声のない叫びをあげてもがいた。普段からねち／＼と蛇のように執念深くからんでくる森の性格が酒を交えたせいで腕を首をしめつけてくる。もつれて乱れた裾からむつちりした脛が太ももまでのぞけてゐる。狂つたやうな森は、白い美保の足をみるともう理性を失つてしまつた。豊かな乳房が、もだえる美保の身体の動きにつれて、右に左にゆらいでいた。森は美保の寝巻の袖をひきちぎると、女の鼻をつまんだ。息苦しさ思わず齒ならびのよい口を開けた。いきなり寝巻の袖が詰めこまれた。その上から腰巻が猿ぐつわにされてバアマメントの髪の後で結ばれた。その儘うつ向けに転されると両腕が後にねじ廻され、腰紐が高手小手に掛けられた。烈しい男女の吐息だけであつという間もない出来事であつた

「いゝ恰好だね、えゝ美保ちゃん」

無理に坐らせられると乱れた寝巻の膝がこぼれて、ズロオスをはめた内股までのぞいて

見えた。

「あゝ、いい恰好だよ、森君
いいものを観せてくれたね
ようし今度の演し物はこれ
でゆこう。」

いつの間にか後に演出の
北川とバンドの西村が立っ
ていた。

「何だ、北さんかびつくり
させるなあ。嫌ですよ、人
の悪い、変な所を黙つての
ぞいたりしてさ」間の悪そ
うに森は、美保のはだけた
衿をつくるおうとした。

「そのまゝがいいよ、森君
素晴らしいアイデアだ。僕の
部屋で相談しよう来給え」

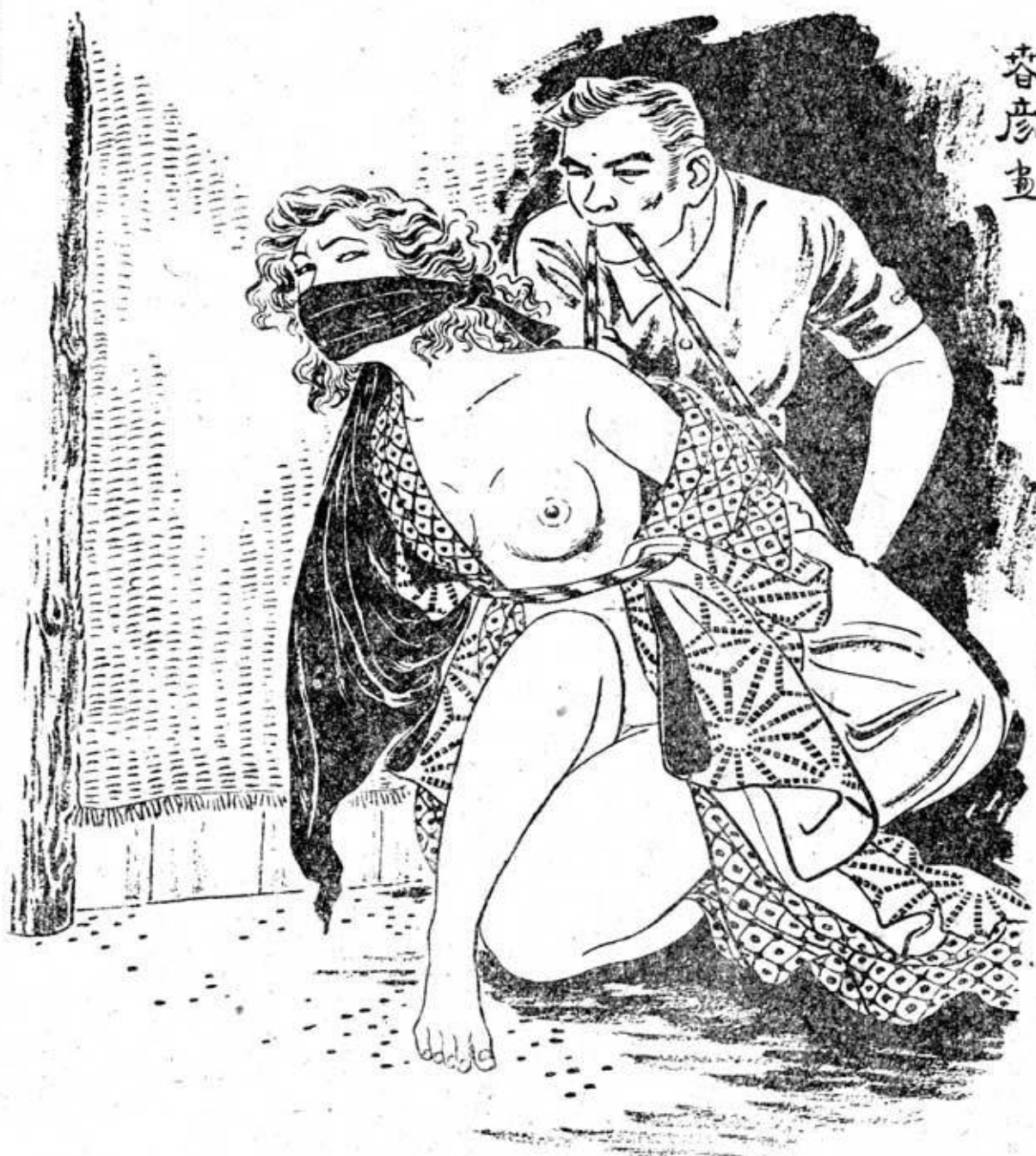
北川は一人悦に入つたよ
うに、にやりと笑つてみん
なをさそつた。轟青を立て

ゝ前の池袋駅から初電が発つて行つた。

「話というのは、まあこういつたところさ。
どうだい。これない絶対だろう」

北川は改めて縛り直された美保の身体を抱
きながら、森と西村の双方を見廻した。

峯彦 画



「すると、アバンの向うを張つて女の責め一
点張りでいこうつてんですね」
「そうなんだ、いいぜ。たゞの裸踊りより余
ッ程刺戟があつて客も見ごたえがあるつても
のだ。勿論、責め手は君達だよ」

「畜生、こたえられないな
こんどの仕事は。これだか
ら役者商売はやめられない
てんだ」

西村は手を打つてよろこ
んだ。

森はそれでも何かで満た
そうと下を向いたきりで北
川の話には、いいとも悪い
とも応えなかつた。その態
度をみると北川は、
「森君は反対かい、僕の案
に——」

「いや、別に反対じゃない
が、美保ちゃん……」

あつそうかといつた風に
北川は改めて膝の上にもが
いている美保を見直した。

先刻から北川は美保を抱い
たまゝ話をしているのだ。

それが森には気にかゝつて仕方がなかつた。

「ねえ、北川さん。美保ちゃんはストリツパ
アじゃない、家の歌手だ。だから舞台で裸に
される女には、美樹でも弘美でも……」

「勿論そうさ、ストリツパを使うのさ。こ

の子に裸などさせないから安心したまえ。」
解っている——と云った調子で北川は美保の双肌を引きはずすと豊かな乳房を、両手で握りしめて云った。

(二)

新しいバアレスク・シヨウ。——これが北川の兼ねてからのねらいであつた。ルンバ、タンゴ、ワルツ、ブルウス、ウギ、サンバ、コンガと踊子のソロが入れ替り立ち替り踊られるだけで、そこには何の創意もあたらしきも見い出せない。カジノ・フオリイ以来十年一日の如き舞台がこのヴァラエティと称するものであつた。従つて特別に脚本というものも要らなければ稽古の必要もない。平常得意とする踊子のパアソナリティを生かしたエチユドを次々と観せるだけで、結構二時間は保てる。演出者は踊子の交番表だけ製作しておけば間に合う。芸術的な野心もなければ、中央の檜舞台を踏みたいという野望も演技者の中には湧いて来ない。たゞ三度の食事がとれて何がしの小遣銭が月々貰えるということとで充分毎日の生活が楽しいのである。男はその金でパチンコに興じ女達はあんみつや塩せんべい、大福を頬張る。残った金はすりへつた舞台用のトウシユウズのかかとを直し、ドウ

ランやアイシヤドウを買う。彼等には別に交際費の必要はなかつた。映画は顔と同業のよしみで無料でみられる。風呂は一日四回も舞台で「裸女の入浴」の一コマまであびられる。しかも観客に背中を流させることさえも出来る。だから余程、小屋が御難に遇わぬ限り世相の生活苦などということは頭にいられていなかった。

「これがドサ廻りの生態というやつか、情けない話だ」

国学院大学まで卒業したくせに好きで入つた舞台生活から、こんなドサ廻りの親分で終つてしまふような自分が北川にはうらめしくてたまらなかつた。彼は卒業後、親父の威光で新聞社の社会部に勤務出来たのを、自分から棒に振つて新宿のムウラン・ルウシュに飛び込んでしまつたのだ。当時のムウランは例の赤風車が街の異彩となつて常にインテリイの話題に上つていたものである。

北川は諷刺と諧謔の世界から戦争に引きずられ、ソ連に抑留された。復員した北川が再び新宿の風車を訪れた時には、もう劇団は解散し名も同じキヤバレイが客を呼んでいた。北川は地方廻りの船山舞踊団に加つて興業の旅に出ることになった。もう東京には彼の家

は無かつた。終戦の前の年の九月の空襲で千住の家は焼かれ両親と妹の消息が絶えたことを識つただけであつた。謂わばボヘミヤンである。彼は自分をその観念せずにはいられたかつた。彼は若い頃の舞台芸術のひたむきな情熱も愛情、ひとりでにさめて消えてゆくのを必の底に意識しながらも、ひきずられるようにこのどん底の舞台生活がやめられなかつた。と云うよりも抜ききれない不思議な舞台雰囲気、未練が彼を糸でつないで離さないものである。どうせこの道で一生を終るならいゝ仕事をして死にたい。ドサ廻りとわらわれぬだけのヴォリウムのある作品をどしどし上演して今までの浴びせられたたいはいの既成概念を粉碎してやりたい。

この頃から北川の演出は徹底してリアルなものになつて行つた。演劇のリアリズム。彼はよいものにつけ悪いものにつけ、リアリズムへの追究を忘却してはならないと思つた。彼は自己の能力の限界と云うことについてはよくわきまえていたので別段難かしいものや固苦しいものにこだわつていなかった。専ら大衆受けをねらい、その中に今までに表現し得なかつたリアリズムによるモラルの確立という事で自己の精神を慰めたかつたのである。

る。

東京で旗挙げをやり、横浜、大船、国府津、小田原、千葉、浦和、宇都宮、福島と地方の都市々々を巡る間に次第に彼の観念に新しい発見や地方の風俗が大きな要素を持ち込んでこの都心に最も近い池袋に移つて小屋掛けをした時には、もう揺がせ得ない信念として彼のアイディアの底にひそむようになっていた。それがサジズムとマゾヒズムの人間錯乱の世界であつた。ソ連で左翼教育を受けた北川にとつて、観念的なものは必要でなかつた。常に唯物的な思索が、極端なこの悪魔の世界を開拓した。

だから北川のレッスンは苛酷なまでに烈しかった。彼は乗馬用の革鞭を御して踊子たちの半裸の肉体を打ちすえた。舞台も只のストリップからサロメ、ジャンヌダルク、と替り倒錯の異常な舞台は確かに観客を魅了した。座長の船山利恵子は、彼の肉体に屈伏して舞台をすて今では、吉原の特飲街に身を沈めてしまつた。十人近い踊子のストリップア達はことごとく北川の好餌になつていった。唯、山形の小屋で弟子入りをした美保だけが生娘のまゝ裸にもならず歌手として偽っていた。もう踊子達は北川によつて皆、完全なマゾに

仕立てあげられた。だから美保が責められてもそれ程、気にもかけなかつた。唯自分が責められる以外は少しでも静かに眠りがむさぼりたかつた。

(三)

世間はもうすっかり桜の花に酔いしれていた。木戸も花見帰りの客で連日連夜、大入りが続けた。毎日のように大入袋が踊子たちに配られる。しかし何故か北川はたのしまなかつた。

或る日、北川は東口に廻るとブイとアバン劇場をのぞいてみた。このグラン・ギニョール劇団は北里俊夫の主宰するもので、千夏さきりを中心バイ・ブレイアにも優秀なスタツプをかかえていた。艶笑ヴァーレスクと銘打つて既に東京名物の一つと噂されていた。こゝでも踊子に風呂をつかわせていた。しかし観物はなんと云つても北里一流のサディズムを表現した責め絵巻であつた。長襦袢一枚にむかれて責められる御殿女中、木の幹に吊られて太ももに鞭打たれる裸身の女間諜、雪空の下で素裸にされて折檻される中国の美女等、なか／＼盛り沢山の内容であつた。北川は小屋に帰る早速、看枚の書き替えを命じた。(ストリップ・シヨウ船山楽劇団・陽春

公演)が消えてあらたに(ヴァーレスク・シヨウ女体地獄・拷問篇)と替えた。その夜、北川は西村とドラムの河上に命じて踊子のうち、比較的身体の美しい八重子と千加子、友紀子を選んで責めの打合せを行つた。

「じや分つたね。女達は貴族の娘。お前達は海賊だ。船の帆柱に女を縛りつけていろ／＼な拷問にかけて、長い航海のつれづれを楽しむと云う海賊達のニヒルな性格を扱つた芝居だ。勿論、踊りも加わる。アパツシユを入れてみる。こいつは徹底的に鞭打つていい。美樹とテコの広瀬を組せる。フィナアレが逆さに吊された女達の前で猛り狂う海賊達の群舞で華やかに幕を下す。——こう云つたアイディアでゆく。そこで最初にスティールを四、五枚撮つておこう。千加子と友紀子から始める裸になつてこゝに寝るんだ。男達は縄で縛り上げる。縛つたら天井から吊す。早くして」北川愛用のローライフレックスのシャッタアがきられた。

「今度は逆吊りで行く。千加子を吊して」男達は千加子の両足を縛つてそのつなを天井の滑車に掛けてグイ／＼と引っぱり上げた女の両手には痛々しく鎖が巻きつけられた。

北川は逆さにされた千加子に近よると、

「千加、すこしの間辛抱するね」

云いながらバタフライを外してしまつた。

「先生、あたし、そんな嫌です。これだけは脱らないで……」

「ギヤラをはずんでやるよ。宣伝写真だからすこし凄味を利かさなきや役に立たないんだよ」

千加子は真ッ裸にされると声をあげて泣いた。

「うるさい、西村君、千加に猿ぐつわかましてやつてくれ。その方が一層気分が出ていゝものが撮れるかもしれない」

ブラジヤを脱がされた豊かな乳房がたれ下つて可愛らしく揺れた。切ない呻き声をもらしながら千加子はしきりと手をもがいて舞台の床に必死でしがみつこうとしている。

その手を北川は冷やかに靴で踏みつけると「ほえるなよ。いゝ加減にしないと、又やきを入れるよ」

革鞭を吊されている千加子の真白い尻に当てる。

「あつ……………」

と身をふるわせてもだえた。苦痛が全身を締めつけるのである。

「じゃ、ようしこのポーズで一枚撮つておくから——」

北川は鞭の先端でぐいと肌をえぐるようにして

「痛い、千加、あともつと気持よくさせてやるからね」

宣伝写真の撮映が終つてから稽古はその夜徹底的に行われた。

海賊団のシーンでは十人の踊子達は全部丸裸にされて吊されることに改訂された。北川自身海賊団長に紛すると云う異常な熱の入れ方であつた。一晩中、鞭の音が狭い小屋なみなぎつていた。

八重子は昨夜の北川の苛責ですつかり疲れていた。それに叩かれた股の痛みで途中からレッスンをやめて楽屋に引揚けてしまつた。それを知ると北川は、

「八重を連れて来い。少しあいつは姐御かぜを吹かしてのぼせ切つている。冷してやるから」

そうでなくてさえ、不気味な雰囲気にかまれたこのシヨウの舞台場面に、北川はあたかも本物の海賊団長のように振廻つてはばからなかつた。

男達の手で左右の腕をぬじ上げられて引き

づられて来た八重子を見ると、

「ようし、今夜はシヨウの前夜祭にする。八重子。うんと泣くんだよ」

まだ絵具も乾かない帆柱の大道具を指して北川は、裸にしてこれを抱かせようとした。「八重、恋しい男のつもりでこの柱を抱け、すこしは痛みがちがうから」

ズロオースが脱がされた八重子は柱を抱いて観念のまなこをつむつた。

手が縛られ、猿轡が噛まされた。両脚は思い切り開かされて三尺棒の先端に左右の足首が結ばれた。間もなく北川の革鞭が乱打された。ひきつるような凄惨な呻きと、革の臭い汗の臭いが踊子たちの鼻をかすめた。もう誰も生きた心地はなかつた。さながら狂人と化したような北川の眼であつた。血走つた眼が恐怖におのゝいている踊子達をなめ廻すと、「今度は誰だ。誰がこうして責めて貰いたいんだ。誰もいないかな。いなければこつちから引っぱり出すだけだが」この地獄の責め苦に自分から志願する者のありよう筈はなかつた。しかしこの儘では十人が十人皆責め抜かれるかも知れない。「後は誰だね。早く来んだ。来なければ片ッ端から責め抜くが承知かい」ぜい／＼息をきらして北川はにらん

だ。

千加子は意を決すると、進み出て云った。

「先生。もう許してあげて。そのかわり、私がお相手をします。ですから……」

「よし、解つた。君はなか／＼友情が厚いぞ。じゃあ、美保を残して皆もう寝なさい。明日は日曜だから六回興行をやる。時間が足りないから、飯は抜きで通すからその心算でしつかり踊つて呉れ」千加子は八重子の縄をほどくと、自分の羽織を肩にかけてやった。そして舞台の隅でズロースを脱いで手を後ろに廻すと、

「先生、じゃ始めて下さい」

とかなしいあきらめに似た笑いを見せた。

「かわい／＼子だね、いつもお前には感心しているのだ。じゃ西村君。千加子を縛つて、用意してくれ給え」

千加子は西村と森の手で椅子に縛りつけられた。これは北川の拷問椅子であつた。北川は何時も

どろんをした踊子を連れ戻すと、この罰をあたえて、二度と逃亡出来ぬようにこらしめるのであつた。

森がヤカンの水を千加子の口を割つて注ぎ込んだ。千加子は眼をつむつた儘、無表情でその水を飲み乾すのである。一合、二合、三合。ヤカンが代つて運ばれた。もう一升近い水が腹に入つたことになる。頭をとお向けに押えられて注がれる水を飲むことは一通りの苦痛ではない。とう／＼声を出して千加子が許しを乞うた。北川はそれを見ると、

「馬鹿なことを。十八人の代表で拷問を受ける筈じやなかつたのかね。未だ／＼これからだ。しつかり飲んで」

少量の塩が混入してあるので、しばらくすると小用を催してくる。これが責めであつた。こらえにこらえて悶える姿は北川にとつてたえがたい素晴らしい地獄図絵であつた。千加子は次第に加わえてくる下腹の痛みにもう恥も外聞もなかつた。

「――先生。こゝで御不浄させて。もうとても……」



膨れ返つた白い腹をくねらせて千加子は椅子をきしませてもだえ抜いた。「未だ／＼。もつと苦しんで。――」

淫らがましい笑いをのぼせて北川の顔は、千加子の下腹部をなめるようにながめ廻した。

舞台の隅でふるえていた美保は、思わず声を挙げて泣き出してしまつた。余りの恐ろしい拷問に処女心に衝動がつき上げて来たので

あろう。それを見ると北川は

「何だ、美保が残つていたんだね。じやもう許してやろう。西村君。縄を解いてやり給え」

千加子はその場に屈み込むと、たえにたえていた生理の液体が烈しい音を立て、舞台の床に浸んで行つた。北川はそれを冷やかに見乍ら、

「森君。芝居の娘は美保を使つてみることにしたよ。ストリップアが裸になるのでは客は馴れてしまつて少しも刺激を感じないし、それに裸になることを何とも思つてない、手合だから所謂恥らしいの心理性が表現出来ない。美保はこの間の晩、君が裸にしたのを見て思いついたんだ。いゝ身体だしもう十九だから女としても一人前だ。始めて舞台で裸になるんだから美保は一寸辛いだろうが辛抱して貰う。いゝね。——勿論、リアルに持つて行くのだから、責めた後、ベットで犯すまで総て本物でやる。日曜だし客の入

客席



りはいゝだろう。美保も女として初めて多勢の前で裸になる。水揚げと同じだ。これはきつと受けるよ」

森は、がくと頸をうたれたようなショウクを受けて思わず北川の言葉を疑つてしまつた。

「そこで犯すサド公には僕がなる、観客の多勢観ている前で堂々と女を犯すアクションだ。どうだね、これ程リアルな演出はあるまい」

そう云うと北川は声を挙げて笑い抜いた。美保と千加子は抱きあつてこの恐ろしいサジストの顔を唯、呆然と見つめるばかりであつた。

その日は日曜でもあつたせいか朝の第一回目から入りは好調たつた。珍しく人念に化粧した北川はサド公爵に扮して出番を待つていた。海賊シヨ―は大変な拍手を浴びて幕になつた。愈々大詰の幕で「犯された女」のパンツマイムである。ベ

ルが鳴つて場内は暗くなつた。幕が開くとシルエツトが浮く。縛られた裸女の姿それを打つ鞭の音、それに伴う哀しい悲鳴。それ等が交響楽を構成しているのだ。やがて明るくなると緋の長襦袢を着た二人の日本娘が縛られたまゝ舞台の中央に引き据えられた。

サド公と二人の責め役人が登場すると千人近い観客がざわ／＼とざわめいた。美保はもうあきらめていた。裸にむかれると白い尻を客席に向いて柱を抱いて縛りつけられていた

痴迷

— アブニストの記 —

(ちめい)

(1)

鬼山 絢策 (方金三・画)



☆

この一篇は創作ではない。

或る夫婦の性生活に、一人の男性が加わつたために、そこにアブの世界が誕生した事実をそのまま筆にしたまでのものである。その三人の間に行なわれたことは、非常に奇妙な事柄かも知れない。また存外ありふれた、世間にはザラに転がつて居る閑房の一挿話にすぎないかも知れない。

たゞ筆者はどこまでも真実を赤裸々に述べたいために、何の粉飾も加えず、筆者の勝手な想像も交えず、些かの作為も加えずに、ありのままの事実を忠実に記録したものである。

一、三木安生

三木と言う男は終戦後奥羽線の汽車の中で、知り合つた男だつた。

昭和二十二年、インフレの激しいときだつた。

私は終戦直後、横須賀の海兵団からとび出すと、家族を疎開させて居た東北のA市にまっ直ぐに帰り、そのまゝA市に住みついて、恐らくあの当時誰でもが経験したであろう、ヤミのブローカー的なことをやつて居た。

三木は私の住所を聞いてA市の駅で分れてから二三日する



とやつて来た。

私の住居は、当時妻の実家の二階三間を借りて居た。

三木の境遇は私とよく似て居た。

彼の妻が私の妻と同様このA市の生れであること、戦災者で、私も彼も妻の実家に疎開したまゝ住みついて居ること。女の子が一人宛居て、その齡迄が、私の子供と同一年であること、そんな点が、私と三木の交際を親しくさせた。

当時私は秋田の在から、百姓が副業にやつて羊毛を買つて来て、A市の毛糸工場に売りつけ、出来上つた不細工な毛糸を、ヤミ売りして居た。非常に太い所と細い処のある不格好な毛糸だつたが純毛であることは確かだつたし、当時はそんなものでもよく売れたのだつた。

三木は早速私の毛糸を捌いてくれた。

彼の本来の職業は療術師だつたが、戦時中は会社勤めをした経験もあり、現在はやはりヤミブローカーをやつて居る男だつた。

大学も出て居るし、一かどの教養も常識もある男だつたが非常に正直で、正直すぎて人の言うことを信用してハメられたり失敗ばかりして居る男だつた。ブローカーと言うと、常識的に人相の悪い筈にも棒にもかゝらないような人物を連想される方があるかも知れないが、彼は決してそう言うタイプの男ではなかつた。純真そのものの性格で、こんな男が性に合わぬブローカーなど、よく出来るものだと思つて居た。

只彼の取柄とするところは、顔の広いことゝ、悪押しではないが、或る程度押しの強いことであつた。

そのうち彼の方で「東京に安いゴム合羽が三百着あるのだ」が」と話を持つて来た。この仕事で二人して東京に行き、A市に持つて帰つて、これは成功した。彼は私を非常に徳として、其の後いろ／＼の話を持込んできた。

彼は事業狂だつた。

何でも彼でも手当り次第事業化する計画をたてた。

肥料会社の設立、瓦工場の建設、杉皮利用のスレート会社の創設、リンゴの農薬デリス根の大量製造、リンゴ箱の木取りの定期販売、等々で、彼の計画し、半ば手がけた所謂「事業」の数には、それからの四年間に数えきれぬ程ある。そのうちのいくつかは私にも仲間入りをすゝめられた。

私も始めのうちは、彼の熱意に動かされて、資金の運動に奔走したが、彼の調査と計画があまりにも杜撰なのと、虫のよすぎる点があつて、資本家を動かす所迄に到らず、どれもこれも失敗して途中でこわれてしまうので、彼のやり方が一応分つてからは、あまり一緒に仕事をしなくなつた。

それでも彼は私の所にチヨイ／＼顔を見せた。そして来れば長つ尻で、午前中から黙つて居れば日暮れがたまでネバつて居るのだつた。で私は彼が来ると頃合を見計つて用足しに外出することにした。すると一緒にいて出てどうかすると私の訪問先の門前でやつと別れる事など珍しくなかつた。

そんなに長つ尻で居ながら、趣味も道楽も何もない男だから、只ベラ／＼と仕事の話をし、それが終れば人の噂や、家庭のことなど喋り、彼はしば／＼「家内が／＼」と自分の女房のことを言うが、さりとて褒めたことは一度もなかつた、



そして私の妻のことを「いゝ奥さんだ」としきりに賞める。「やさしくてお宅の奥さんはほんとにいゝ、うちの家内はどうもきつくて困ります。」

と始めはそんなことをくり返して言つて居た。

以前に彼の持つて来た仕事のことと北海道に旅行した時、旅館でワイ談や性の話をしたが、その方面の話となるとまるで無智で、彼は学生時代に鎌倉の円覚寺で座禪を組んだりして青春時代は至極謹厳にロマンスの花も咲かせずにすごして来たらしかった。私の方は若い頃は一通り道楽も恋愛も事業して来た方だから、そんな時代の自慢話でもして聞かせると興あり気に聞いて居り、専ら私は話し手、彼は聞き役に廻つて居た。

彼が結婚したのは三十五の時、それから三、四年経つて現在の女の子が生れた。恰度私に二番目の道子が生れた時、彼も又間もなく次女を儲けた。私が名づけ親になつてやつた斯うして彼との交際は次女の道子が生れる迄四年間続いたその間に私は妻の実家から出て、同じA市の東端から西端迄一里余も離れた所に引越した。妻の実家は彼の家の近くで、彼の家は在にあつて、町へ出る時はいやでも私の家の前を通り路であつたから便利だつたが、今度は非常に遠くなつたにも関わらず、それでも彼はチヨク／＼とまめにやつて来た。

二、三木の環境

彼がもとやつて居た療法と言うのは、一種の靈動療法で、念力に依つて、患者の血液を患部に集中せしめて治療する方

法で、中風と中耳炎の治療は得意中の得意だと言つて居た。私も慢性胃弱で、彼に施術して貰つたが、胃から始めて全身に及ぼし、終ればいくらか気分がよいような気がした。殊に肩や首の凝りにはよく効いた。

長女の智子が慢性中耳炎になつた時も、医者にもかゝつたが、彼にもやつて貰い、どつちのお蔭か兎に角治つた。

ところが今度は妻のきよ美が腰が痛いと言ひ出すと、「じゃ私が治療してあげましょうか」と、例の療法を始めたきよ美は「とても具合がよくなつた」と言つて喜んだ。

「奥さんは腰が大分冷えてますからほんとに少し続けてやるといゝんですよ。暇を見てチヨク／＼やつてあげましょう」彼は得意そうに、そう言つた。

その療法はきよ美を座布団二枚の上に仰向けに寝かせて、着物の上から全身を揉みほぐすかなり労力の要るものだつたきよ美には確かによく効くと見えて、治療した後暫らくはまめ／＼しくよく仿らいた。

きよ美はお礼に石鹼をやつたり、リンゴを剥いたり、療治のたびに、何かしらでお礼をして居た。時には晩飯を共にしたりした。私は二合位しか飲めぬ方だつたが、三木は一滴も口にせぬ方だつた。中ではきよ美が一番強いかも知れない。

北国生れのきよ美は、小さい時から酒を飲まされたと見えて、五合位は平気で飲んだ。

始めは私の見て居る前でしか治療をしなかつたが、「少し続けてやらないとよくならない」と言つて、私の留守にも来て治療するようになった。



「今日も三木さん来たわよ」

「何か仕事の話でも持つて来たのかい？」

「いえ別に……。近所まで来たからお寄りしましたつて」

「治療して貰ったの？」

「ええ、随分丁寧によつて行つたわ」

こんな事を聞いても、私は三木を疑う気持はさして起らなかった。

三木は私の居る時に来て居ても、来客があつて私が中座すると、その間にきよ美に治療することがよくあつた。

そんな風にして居るうちに何だか私の留守ばかりに三木が来るようになった。

私は毎日必らず外出するので、午後は殆んば家に居なかつた。それをよく承知して居る三木は、以前は午前中にばかり訪ねて来たのが、此の頃は午後になつてやつてくるような事が続いた。

きよ美は「今日も来た」と一々その都度私に報告した。少々訝かしいなと思つて居ると、或る夜きよ美から



「三木さん妾が好きなのよ」

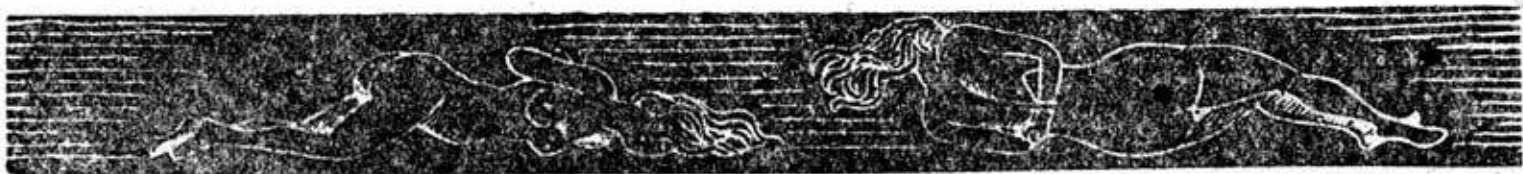
と聞かされた。

「あの人の奥さんとても冷たい人なんですつてねそれに今だに奥さんのさとに厄介になつてゐるでしよう。おまけにいつか話して居た自転車を十台とか買う時に奥さんの兄さんに迷惑をかけたでしよう。そんなこんなで肩身が狭いのね。奥さんがとてもいばつてゐるらしいわね。」

私も一、二度彼の家を訪れて、細君に会つたが、不愛想極まる女で、服装も在郷の女らしくモンペを穿いて、髪もボウ／＼として、三木と同様サツパリ色気のない恰好をして居た。

彼女の兄が村長をして居るとかで、家はかなり大きかつたが、私に対して家に上れと言わないのだつた。三木は留守だつたから例え「上れ」と言われても上るつもりはなかつたが一度はかなりこみをいつた要件で彼を訪ねた時でも、やはり玄関にでしか応待しないのだつた。

不愉快だつたから其の後は三木の家を訪問しない事にした



が、三木に

「あなたの奥さんは一寸変つてますな。あなたが留守のせいだつたからか、僕が二度行つたけれど、二度とも家の中にあけてくれなかつたんですよ。なか／＼貞淑な奥さんですね」と冷かし半分に言う

「えゝ、あれで困つてゐるんですよ。誰でも私の友人は一人も家にあげないで、皆門前払いなんで有名になつちまつてゐるんですよ」

と彼は天然パーマネントのモジャ／＼頭を掻いてテレ奥さそうに笑つた。

その時に私は彼が家庭生活に恵まれて居ない環境にあることを見抜いて居たから、今きよ美から聞かされなくとも分つて居た。

三、妻への信頼

妻からそう言われても私は別に嫉妬がましい気持は起らなかった。

私は三十八、きよ美は二十八、三木は四十二、四十男の、然かも齡より老けて見える三木が、二十八のきよ美にモーションをかけて見たところでどうにもなるものでないと思つて居た。私は自惚れでなく、年より若く見えたし、容貌も三木とは比較にならないと自負して居た。又彼は日頃大きな話ばかりしては居るが、実際の経済力は、独力で自活するのさへ怪しい程、生活力のない男だつたし、私は別に財産はないけれども、さし当つて食うに困る程でもなく、収入も當時は北

海道から石鹼を仕入れて卸して居ただけで、定収があつたし第一私達夫婦は愛し合つて居たから、三木が仮にきよ美を誘惑したとしても、屁とも思つて居なかつた。

私がきよ美の貞節に対する信頼は、私が海軍に一年間応召して帰つて来た時ほんとうに深まつた。

兵隊に行つて居る間、私は妻が蔭でどう言うことをして者るか相当疑惑も持ち、悩みもした。だが一年の間、十日に一本の割で、私達の交通は続いたから、留守中の表面的な家庭の模様は大体分つて居たが、それでもそれだけでは私はきよ美を信用しなかつた。

が帰還して妻の実家の敷居を跨いだ時、私はきよ美が、言行一致して貞淑を守つて生活して来たことを知つた。その時玄関へ迎えに出たきよ美は、私が突然何の前ぶれもなく帰つたせいもあつたが、化粧もせず、モンペを穿いて、二つになる智子を抱き、只喜びと安堵を一ぱいに表わして、迎えてくれた。家の中を見廻しても、嫁入り当時彼女が持つて来た着物子供に着物に化け、敷布は彼女の浴衣が二枚も代用になり、私の前に出された貯金帳は、出征当時よりもいくらか殖えて居て、会社から送られた月給のみで、つゝましく暮して居たことが分つた。私の衣類は何一つ失われて居ず、洋服は総べてプレスされたまゝ、キッチンと箆簞に納まつて居た。

そしてつとも彼女の貞淑を証拠立てたものは、彼女の身体であつた。帰還第一夜のナイターの手応えが、彼をして絶対信頼の感じを抱かせた。

私が帰つてくるとききよ美は、水を受けた草花のように、み



る／＼生氣を取り戻し、モンペを脱いでスカートをはき、久しくかけなかつたバーマもセツトして、一年前の妖艶さにかえつて行つた。

それから三年間、私達の夫婦生活は極めて円滑に、そしてノーマルに持続して居たのだつた。

三木のことに就いても、私の留守中の出来ごとを、きよ美が少しでも隠すような態度があれば、私は一応疑つたかも知れない。が清美は、総べて細大洩らさず私に話すのだつた。だから私は安心して居たのである。

「三木さんたら僕の女房と笹岡さんの奥さんと交換出来たらいいなあ」つて言うのよ、どう？あなた三木さんの奥さん好き？」

「バカなこと言うなよ。あんなり志村喬みたいな女に抱きつかれたらへドが出るよ。」

と私は妻の冗談を相手にしなかつたが、きよ美の言うには三木は決して浮わつた気まぐれの出来心で言つて居るのではないと言う。彼の生一本な性格から推して、三木は色魔的な性質は微塵もなく、又良心も常識も備えた男であることは私もきよ美も承知して居たから、確かにそうかも知れない。だが彼にも妻子があり、きよ美とて独身ではないのだから彼がきよ美を好きだと言つても、それはただ想念だけに留まるもので、そのリミットを超えることはないと思つた。

彼が私の居ない時に来ると言つても、夜来る訳ではないし家には六才になる長女と三才になる次女が傍に居るから極端な直接行動は出来つこないからと安心して居た。

其の後もきよ美は寝物語に三木のことを話すのだが、三木の態度が段々熱を帯びて来たと言う。「妾をみつめる眼の色が違つて来たし、治療の時に後から胸をグツと抱きしめる時など今までは何とも思つて居なかつたが、この頃は何だか一きわ力がこもつて来て、情熱的で薄気味が悪くなつて来たわ」と言う。然しそう言う反面妻も男に真剣に恋されたのが嬉しいらしくどこか得意気なところが感ぜられた。

私は妻への愛情の表現とて、多少の儀礼的なやきもちや冗談まじりに言つたが、心の中ではまだ別に何とも刺戟された気さえ起さなかつた。

「俺がもしお前を盗まれて居るのをちつとも知らないとしたらほんとにお人好しと言うもんだね。俺位女房を信用してる亭主も少ないからね。」

と言つて笑つた。きよ美は神妙な顔をして聞いて居た。

四、妻の告白

習日私は出先から帰ると

「どうだい、今日も三木の奴来たかい」

「えゝ来たわ。だけど明日からも来ないでしょう。」

「どうして？」

「主人に用のない限り、もう留守に来ないでくれつて言つたのよ」

「どうしてそんなこと言つたんだい？」

「いえそんなに露骨には言わないけどさ、来ないようにしたのよ」



「何故？」

「あんた怒らないでね。妾ほんとの事言うから」

と前置きしてきよ美は一寸ためらったが「実は昨日三木に接吻された」と言うのである。これには私も一寸驚いた。

「それでお前黙つて居たのか」

「仕方がなかったの」

「黙つてゐる奴があるか。〃何をなさるんです。三木さんはそんなことをする人とは思いませんでした」と言つてたしなめてやらなくちや駄目じやないか」

きよ美は始め私に隠して居るつもりだったが、昨夜の私の言葉を思い出し、それ程自分を信頼してくれる夫に少しでも隠しごとがあつてはならないと思つて、打明けたのだと言う。そして三木に「この状態のまゝでいつか道を踏み外すような事にならないとも限らぬから、もう治療も結構です。三木さんの気持はよく分りますけど、妾は笹岡を深く愛して居ますから、こんなことをしては夫に対して申し訳ないと思ひます。今後は一切私の身体に手を触れないで下さい」と言つてやつたのだと言うのである。

「で三木は何と言つたの」

「私が悪かつたと言つて居たわ。もう絶対奥さんの身体には触りませんと言つて居たから、もう来ないと思うわ」

妻が私に思ひきつて打明けたのは、彼女が何もかくしておけない性分であり、今迄に私達夫婦の間に何の秘密もなかったし、私を愛して居ればこそ告白したのだと思つた。

「許して頂戴ね。もう絶対にそんなことさせないから」

「済んだことは仕方がないさ。これからは気をつけなけりやいけないよ」

と私は注意した。きよ美は私の態度が隠やかなのに安心したのか、三木の態度に就いて委しく喋つた。

「今までも治療の時に後から妾を抱いて頬をおしつけて来たことがあるの。ハツハツと息が荒くなつて、あのいつもはドロロンとした眼がらん／＼と輝いて気味が悪いの。それにあの人の体臭ときたらあなたのと違つて、ヘンに強いよ、それが何だかイヤな臭いのなの」

などと話をした。

私は三木がきよ美にどんな気持で居るかを想像して見た。

きよ美は決して一時的な性慾衝動にかられての「浮気心」ではないと言う。ほんとうに四年越しの心の奥底に秘めて、抑え抑えて居たものが、抑えきれずに出てきたと言うのだ。

それはそうかも知れない。然し或はあんなまじめそうな顔をして居て、存外色事師なのかも知れない。私は漸やく三木に対して警戒と疑惑の心が頭を持上げたのであつた。

翌日は在郷へ出張して石鹼を卸し、かなり遅く帰宅した。

「今日も来たかい」

「来たわよ」

私の一寸不安そうな表情を見てとつた妻は

「でも今日は一切変なことはしなかつたわ。治療はしたけれど、今迄と違つてグツと離れてやつたわ。〃今日私が来ると思つてましたか」と聞くのよ。来ないかも知れないと思つて居たと言うと〃そうですか。もう決して奥さんに対して変な



真似はしません。これから一生懸命奥さんを嫌いになろうと努力して居ます」と言つてたわ。〃それでも奥さんの顔を見ずに居られなくて、治療するだけならいゝと思つて来ました。〃つて言うのよ」

私も三木の性格は凡そのみこめてた。昨日は三木がことによると天才的な色魔かも知れないと疑つて見たりしたが、そうではなく、或る程度真剣にきよ美に恋して居るのだと思つた。ブローカーなどと言う商売柄に似ず真面目な性格だし、女に対しての経験も浅く、恐らく自分の妻以外の女は知らない男だろうと思う。現在彼と彼の妻との折合いがうまく行かないので、一層きよ美が慕わしく感ぜられるのであろうと想像した。その点には一面三木に同情はするが、何としても妻の唇まで盗んだと言うことが癪にさわつてならなかつた。その時私の体内に久しく眠つて居た異常な性慾がムラ／＼と沸きあがつて来た。

五、私の性向

そこで私は恥を記さねばならぬが、私の異常な性向に就いて、書かねばならなくなつた。

私の性慾にはまことに複雑な異常心理から仇らいて居た。私は、私自身が主役として異性に接する場合には、極めて正常な性慾であり、正常な行為しか行わないのであるが、一度私が第三者の位置におかれた場合、私の異常性が頭を出してくるのである。

それはサジスムと言つてよいかマゾヒズムと判定すべきが

自分でも解釈に苦しむのである。

が兎に角男性のマゾヒストが女性のサディストに虐められるその羞められるのを見て性慾的に昂奮すると言つた型なのである。又それを想像しただけでも慾情が昂進してくる。

空想力の強い私は、正常な行為の際にも、いつもそうした場面を脳裡に描いて、私の力を昂めるのであつた。その為私の空想力が異常に発達して、遂には空想に依つて性慾を昂奮せしめることが私の常套的慣習となつてしまつたのである。

然し私の過去においてそうした場面を見たことは一度しかなかった。只芝居や映画で、毒婦、妖婦が男をだましたり、醜弄したりして殺す場面を見ると異常に昂奮した。

又谷崎潤一郎、江戸川乱歩、の一部の作品の中に或は三角寛、掠鳩十の山窩小説や、小野佐世男、富田英三の漫画、などに、そうした傾向の作品があると、エロ本を読むよりも遙かに昂奮して耽読した。

然し自分自身をその主役の二人の中の男性に置き換えることは空想の中でさえ否定して居るのだ。

自分がそう言う眼に会うと言うことは思つただけでも、ゾツとする程イヤだつたし、従がつて、色々の女とも関係したが、かつて一度もそんな行為に似たことさえしなかつた。

現在の妻、きよ美に対しては勿論実行したことはなかつた。

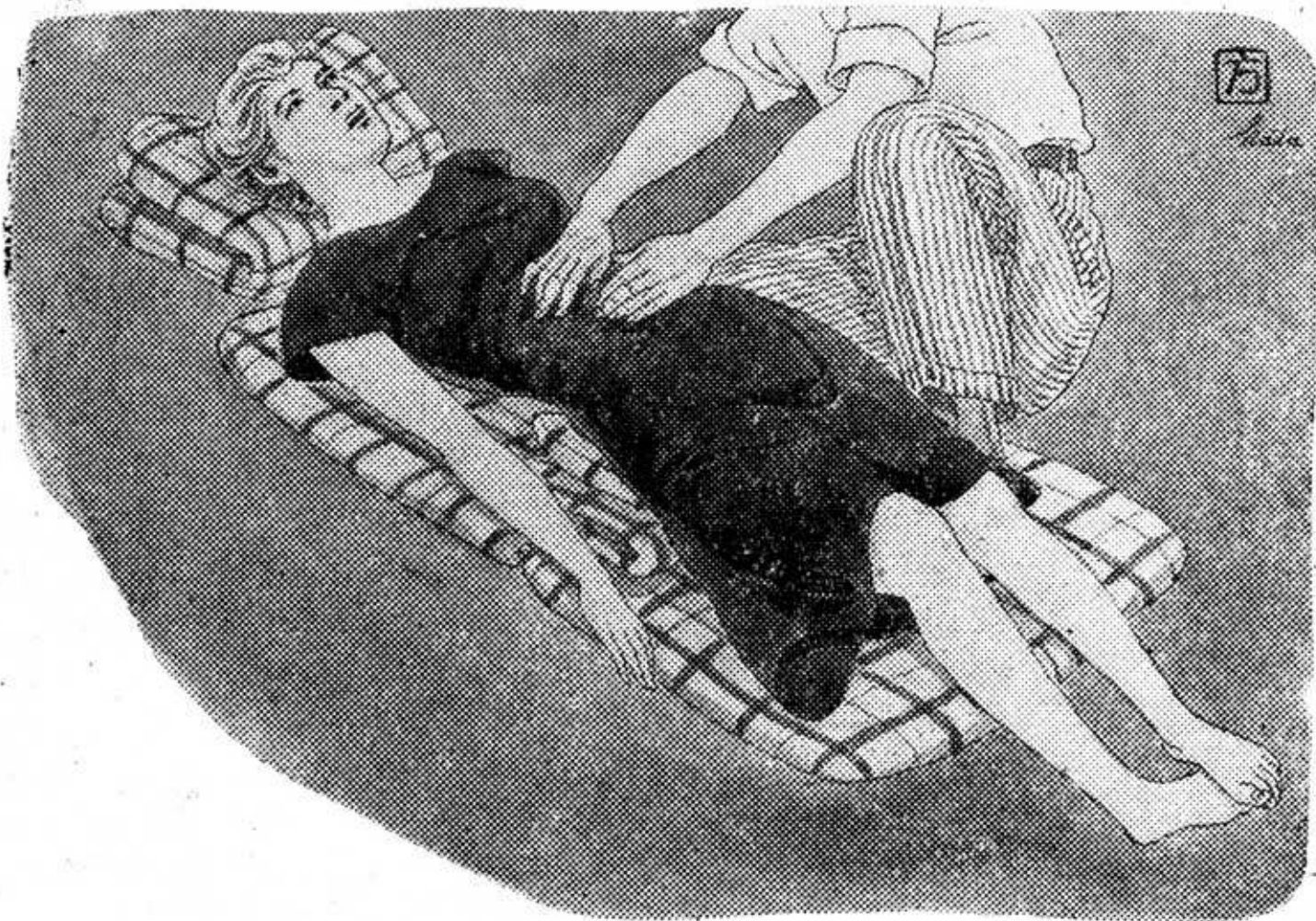
然しきよ美は私のそうした性向を満更知らぬ訳ではなかつた。それは私の日記や手記の中に、（それは絶対秘密にして居たものだが、きよ美はいつかそれを見てしまつて居るらしかつた）記してあつたので、「あなたは少しヘイタイなんじ



やない？」と言われたことがある。私は妻にも秘密にしておくつもりであつたが、知られてしまったのでは仕方がないと思つて、誤解のないように私の心理を説明しておいたこともあつた。

終戦後セックスの世界が極端に開放的になり、私の好む傾向のものかなり刺戟の強いものが演劇や書物に現われるようになって、私の久しく眠つて居た官能も眼も覚されてしまった。そこへ三木と言う人物が登場するに至つて、今迄は妄想の世界のみであつた或る種の光景が現実の世界に実現出来る可能性を見出したのである。

「もう決して三木さんに変な真似はさせないわ。けれど三木さんは真実一途に純情な気持で、妾を好きになつて居たことは確かよ。夢中になつてゐるのよ。でも三木さんじゃねせてあなたより若いハンサムの青年でもあつたら、ち



よつとは心も動かされるかも知れないけど。フ、あの汗臭い体臭を嗅いだだけでゲンナリしちゃうわ」

「ではお前は三木を肉体的には全然好きになれないんだね？」
「どう我慢しても好きなんかになれないわ。あの人自信が強いよ。妾がおとなしくしてるもんだから、妾があの人に好意を持つてると思つてゐるのよ。そりや治療して貰つて身体の調子もよくなつたから、そんな意味で妾が御馳走したりするのを、勘違いしてるのよ」

「彼奴は大体虫のいゝ男なんだ。事業の計画だつて、自分の都合のよい条件ばかり並べたてゐるんだ。それで通ると思つてゐるとに、存外世の中を知らない面があるんだよ。奴のやり方はどこか一本抜けてるんだよ」

「そうねえリンゴの農業の話の時だつて、何とか言つた、そう／＼デリス根だつたわね



あの時だつて、世話しただけで自分がその会社の重役になるつもりで居るんですものね。」

「あんな奴に唇を盗まれてお前口惜しいと思わないのかい」

「そりや癪にさわるわ、けどあなたのこれからのお仕事のこともあると思つて我慢したのよ」

「そんなことに気を廻す必要はないよ。彼奴は只色々の話を持つて廻るだけの男なんだ。実行力は何もないんだ。もう俺は彼と一緒に仕事をしようなんて思つちや居ない。癪にさわるなら仕返してやればいい、じやないか」

「え？仕返し？仕返しつてどんな風に？」

「猶太人の復讐の言葉に、眼には眼を、齒には齒を」と言うのがある。三木はお前の唇を汚した。またお前の肉体を全部を自分の官能陶醉のために弄んだ。現在は只最後の門にのみ手を触れてないだけだ。然し女性としてこれは堪えがたい屈辱だ。まして僕と言う配偶者の存在を無視した行為は僕にとつては大きな屈辱だ、お前が多少とも彼の肉体に好意がもてるなら事は多少変わるが、お前の意志に反してそう言うことをされては僕達夫婦の屈辱だろう。僕が寛大だからお前の話をブン／＼とまるで他人ごとのように聞いてるけれど、人に依つては三木を只ではおかぬ人だつてあるよ、僕だつてこのまゝ聞き流すことは出来ない。唇位なら盗まれたつていゝや、と言う考え方は、お前を僕の最愛のものとする觀念から逸脱してる訳だからね」

「だからどうしろつて言うのよ」

「間接的には僕も三木に侮辱されたことになるが、直接屈辱

を受けたのはお前だ。だからこの復讐はお前自身がするがいゝ。今も言つた通り、眼には眼を、齒には齒をだ。お前は彼に依つて唇を汚された。その他の肉体も汚された。だから今度はお前が彼の唇を汚す、その他の肉体も汚してやればいいんだ」

「……………そんなことイヤよ」

「実行が不可能だと言うのかね。彼を奴隷の如くお前の足下にひれ伏せしめることが……………」

「やろうと思えば出来るわ。だけどそんなことイヤだわ」

「ではお前はこの屈辱をそのまゝ泣き寝入りにするつもりかい。お前はうちの家憲を知つてるだろう笹本家の家憲を。うちは闘志を誇りとする家柄なのだ。世間の奴等に、何事もやりこめられて、黙つて引下ることを最も恥として居るんだ頭を殴られたら、相手の頭を二つも三つも、倍にして殴り返してやるのが家の憲法なんだからね」

「フ、フ、フ、」

突然きよ美は笑い出した。

「何がおかしいんだ」

「分つてるわよう。何もそんなに家憲なんか持出さなくたってさあ。あなたは何でも理窟をつけて物事をしかつめらしく持つて行こうとなさるのね。早い話があなたの例の病氣が持上つたんでしょ。ウフ、フ、フ、」

きよ美は私から身体を離して、私の顔を正面から覗き込むようにして微笑した。きよ美の顔は割に子供っぽい顔をして居る。それがこんな時には眼のうちに妖しい光をたゞえ急に大



人つばい色気がにじみ出てくるのを、私は魅きつけられるように眺めた。

六、妻の自信

私は妻に急所をつかれて、一寸顔が熱くなつた。

「そりや僕の心のうちにある何かさう言わしたのかも知れない。だがそれだけじゃないよ。事実僕はお前が屈辱を受けたことに対して憤満を感じて居る。お前だつてそうだろう。この屈辱に対しては何かの形で抗議し、その償いをさせなければならぬ。その抗議の方法に他に適当な方法があるかね例えば彼に謝罪させる。彼が「ゴーマンナサイ」と詫まればそれでお前は気が済むかね。又、まさか慰謝料を取る訳にも行かないだろう。取ろうたつて、出せる男でもない、話を表向にすれば恥の上塗りだろう。帰する所、僕の言う方法が一番適当してるんじゃないか」

「そう言えばそうね。だけど具体的にどう言う風にすればいいの」

「困つたねえ。お前には未だほんとに実行する意思がおきて来ないようだね」

「そりやそうよ。そんなヘンな真似なんかしたくないんですもの。たゞあなたに要求されるから、あなたのために妾は動くだけよ」

「じやお前は唇を盗まれたことが口惜しくはないの」

「だつて過ぎ去つたことは仕様がないうちやありませんか。口惜しいけれど仕方がないわ」

「お前はそれで済むかも知れないけれど、僕は済まされないう。君の唇を見る度に、あゝこの美しい唇に、他人の唇がそれもあの三木の部厚な醜い粘膜が触れたのかと思うとお前の唇が汚らしく感じるよ」。

「じやキスなんかしなくたつていいわよ。」

「おい、僕に向つてたてついてくるのは筋が違うだろうそう感じたからと言つて、お前に対する愛情が薄らいだと言うのでもなければ、又お前が悪いとも思つては居ない、皆三木が悪いんじゃないが、僕がお前に対して多少なりとも愛情のギャツプを作る可能性の原因を植えたのは三木じゃないか。」

「分つた。あなたの言う通りにするわよ。」

「何も俺の言う通りにしろと言うのではない。君が三木から受けた屈辱を、君の思う通りに仕返ししてやればいゝんだよもつとも三木がそれに従わないときは別だがね。」

「従わそうと思えば、従わせてみるわ」

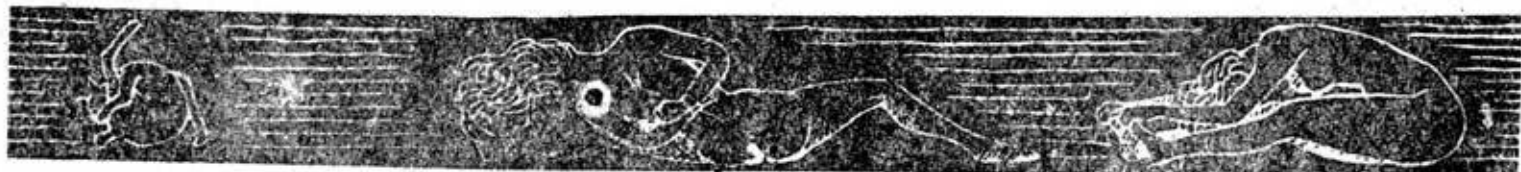
「自信があるかい。」

「あるわよ。だけど、一寸危険が伴うわね。妾の身体を三木に触れさせるのは、あなた嫌いなんじゃないの？」

「そりや不賛成だ」

「だけど、従わせるためには、多少の餌を与えなければならぬこともあるわよ。妾キツスはさせないつもりだけれど身体を抱かせる位のことは大眼に見て貰わなきゃ、最初からいきなり高ビシヤには出来ないわよ。」

「その位のことは仕方がない。」



告白と手記

愛読者の皆様の身近かな雑誌として発展して参りました本誌が更に皆様による皆様の雑誌という使命を一段と押しすすめるため、従来以上に読者の方々の投稿を大幅に採用掲載したいと思ひますので長短に拘らず何卒奮つて左記要項に依つて御送稿下さるようお願いいたします。

記

一、本誌は皆様方の真実あふれた告白手記体験記を尊重するのでありますから、文章の巧拙や長短用紙、書き方等一切問いません。

一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事は厳重に秘匿いたします。

一誌上への発表は匿名で結構です

から筆名を添記願ひます。

一、誌上掲載した分は掲載後謝礼を差上げます。

一、原稿は御返戻いたしませんに係よりの連絡は差し上げます。

一、原稿の御送附には開封の上第五種郵便（百瓦まで八円）にて御送り願ひます。

（編集部）

「じゃあなたが公認してくれるのね。」

「唇と最後の線さえのり越えない程度なら黙認するよ。」

「じゃあやつて見るわ。だけどあなたも随分変わった人ねえ」

きよ美は怨ずるような瞳を向けた。

「僕を軽蔑する？」

きよ美はかぶりを振ると私の首を抱いて接吻した。

「僕はね、お前の魅力が三木をどこ迄征服し得るかを試してみたいんだよ。お前自身もそう思わないかい。」

「あんな男を征服して見たつて仕様がなないじゃないの。も少し気の利いた男ならやり甲斐があるけど。」

「だけど、最後の一線は堅く守つてくれよ。それだけはくれぐれも言つとくよ。」

「どうだか分らないわね。フ、フ、」

「だめだよ。それだけは約束してくれなくちや」

「ウフ、。存外虐めているうちに可愛くなつてくるかも知

れないわよ。」

「だめだ。そんなになつたら困る。」

「大丈夫よ。オバカさんね。冗談を本気にして」。

きよ美は私の首に両手をかけて、仰向けに倒れた。

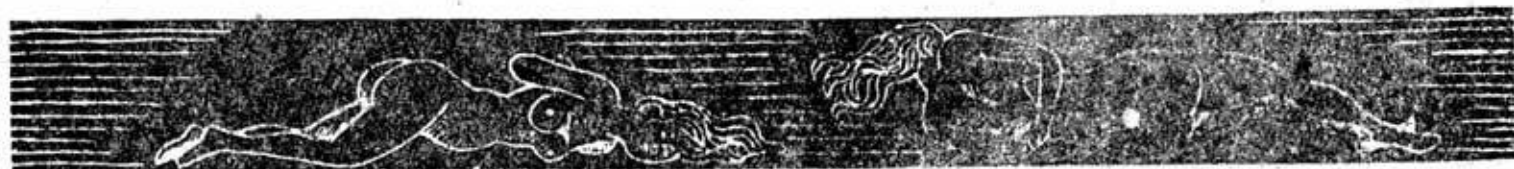
斯うして、私達夫婦の間には奇妙な提契が結ばれ、三木に対する「復讐計画」が成立した。

私はこの計画に対して一寸不安なかげがさしたが、私の心のうちに既にカマ首をもたげたものが、その不安よりもそのことから次々に発展してゆくであろう色々の場面を想像しただけで、その期待が不安を抑えつけてしまった。

既に二人の子供もスヤスヤと眠つてしまつてゐる。

夜も大分更けたようだ。それからの事柄は又明日書くとして今晚は一先ず筆をおこう。私にはこれからまだ別の用件があるから。………

（続く）





(女囚私刑体験記)

私刑に泣く未亡人

〔小坂多美枝〕

一

バスの車掌をしておりました私はあの思い出すのもいまわしい事件でせつとう犯として××署に挙げられました。そして一通り取調べがすむと留置場へ入れられました。その時奥の独房の中に若い女が入れているのをちらりと見ました。

夜になつて私が調べ室で意地の悪そうな刑事に調べられている時、やはり同じ室へつれてこられたのがその娘でした。一寸偉そうな

役の係官に

「うん、これに見覚えはないか」

といつて縄のようなものをつきつけられてさめざめと泣き伏していました。

くわしい事情はわかりませんが、何でも親を殺したかということでした。若い女の身空でおとなしそうな様子の娘でしたのに、よくよくの事情があつたのでしよう。

その翌日の朝十時頃、送庁と決つた私は検察庁へ送られることになりましたが、その娘

(康江と言いました)も一緒に送られるらしく、私は留置場を出るとすぐその娘と並ばせられてお互の右手と左手に冷たい手錠をガチャンとはめられて、つなぎ合されました。

顔をかくすようにしながら警察の玄関迄出ましたが、薄暗い処から急に外気に当つてくらく／＼とする目の前に濃緑にぬつた護送自動車がついています。その車の人の坐る所の肩の高さ位の所は高さ六、七寸位の窓になつており、鉄格子がはめてありますが、外からべ

「マの頭が鉄格子のすき間からいくつも並んで居るのが見えます。」

あゝ、私もあの仲間なのかと思うと急に悲しくなつて涙が出て仕方ありませんでした。いやな事には物珍しいのか遠慮のない近所の子供達が十数人も集つてその車の周囲をとりまいて居るのです。警察の玄関から係官につれられて出る私達を見ると、ワーと一せいにとび散るように脇へ寄ると

「人殺し」「パンパン」

といつてからかうのです、さすがに警官がどなりつけて追い払つてくれましたが、何故こんなに迄ひどい仕うちを受けなければならぬのかと情なくなりました。

係官にうながされて護送車の後から乗ろうとするのですが、丁度その車のステップが壊れていたので車の上へ上るには大きく股を開いて上らないと乗れません。幸いバスの車掌だつた私はそう醜態も見せず弾みをつけて飛び乗りました。

私と同じ鎖につながれて居る康江は右足を

車にかけたときにスカートが捲れ上つて、シユミーズもブローースも丸見えでした。係官はにやにや笑つていましたが、役得だと喜んで居るのでしよう。手をかしてやることさえしませんでした。やがて後の扉はとぎされてがちやんと冷たい響を立て、錠がおろされると街の中へ走り出しました。

狭い窓から見える車外の街の景色は自由な身で眺めるときとこうしたれいで身で眺めるのとでこんなにも違うものでしょうか。洩れてくるはつらつとした風のかおりも新鮮なミルクの匂がする思いでした。あゝ自由、早く自由になりたいと一心にそればかりを祈りつゞけていました。

ようやく落着いてあたりを見廻しますと、いずれも深刻なゆううつそうな顔をしてうつむいています。無理もありません、親を思ひ子を思い兄弟を思つて万感胸に迫つてゐるのでしょう。この時、私と同じ手錠につながれていた康江は、重罪でもあり又控訴上告しましたので、最終判決があつて入獄したのはそれから大分後でしたが、併しやはり同じ雑居房へ入れられ三三五号女囚としての生活を始めるようになりました。

何故彼女が父親を殺さなければならなかつ

たか、それは本当に聞くも涙の経緯があるのですが詳しい事は省略します。併し何といつても無期の刑ですからいづれ恩赦で減刑になつたとしても、彼女はその青春の大部分をこの檻の中で暮さねばならないわけです。

その康江が入房早々、スネイクお春といわれる副室長株の女囚の目にとまり、夜毎に夜とぎを命じられて地獄のあけ暮れに泣いていました。ここで一寸このスネイクお春のことについてお話します。

二

同じ新入りでも度胸のある女はやはり違います。私が捕えられる前に福岡の方で名の知られていた安富春子という女賊がありました。彼女は生れ乍らに悪の道を歩むように運命づけられた女で、その母はやはり毒婦型のしたゝか者で春子は刑務所の中で生みおとされたのです。それからサーカスへ売られて蛇使いとして仕込まれました。性悪の女に拘らず容貌は誠に美麗で大ていの男はふらふらとまいつてしまふ色気を持った女でした。

年頃になつた頃、丁度終戦後のドサクサでしたが、ある闇屋の親分に思いをかけられたのです。春子はその男の財産に目をつけ、それを我がものにしようと企み、巧妙にその男



の妻を毒殺して後釜に入りこんだのち、その闇屋の男を言葉巧みに人通のない海岸へ誘い出しイロの男と噛み合せてなきものにしてしまいました。

莫大な財産を握った春子は、我が世の春とぜいたくさんまいの日を送っていました。その男の二十才になる一人娘が父母の変死に不審を抱き、人にたのんで調べさせた所大体義母の仕業と見当がつかしました。警察はその頃殆んど手が廻らず、悪い事にかけては驚く程頭のよい春子の巧妙に仕くんだ芝居は容易に見抜けなかつたのです。

その時、その娘はその事をすぐ警察へ届ければよかつたのですが、逆に調べ廻つたことを春子にかぎつかれ、土蔵の中へ監禁されてしまいました。そして言語に絶する辱しめを受けた挙句、春子に責め殺されたのですが、それがばれてここに抛り込まれたわけです。

お美代の前にキッチンと両膝を揃えて坐つたスネイクお春はキビキビとした胸のすくような挨拶をしたのです。

「妾しやスネイクお春でござんす。初にお見知りおきを、三匹程ひねりつぶして無期とはきこえません。姐ごこれから御ひいきに」と伝法なたなかを切つて股倉にかくしもつ

て来た札束をお美代にうやうやしく捧げました。最近ツルの差入れがなくて、ヒロインを入手出来ず今迄さんさん当り散らしていたお美代はそれを見ると、あのエンマ顔がこんなエビス顔にかわるのかと、びつくりする程目を細め相好をくずして大喜びです。

「ああ、お前さん御苦労、御苦労、ムサ苦しい所だけどもまあ片腕になつておくれ。そこらのムシケラども、さあ、どいて場所をあけるんだ」

つるの一声に私達は追いつてお春には畳二畳分位の場所を与えられます。御陰で私達は一畳位の所に四、五人もつめ込まれ、夜もろくろく寝られずに苦しい悲鳴を上げなければなりません。

本当にここは腕つぶしと度胸のある者の世界で全く弱肉強食とはこのことでしょう。お美代とお春が得意そうに語り合っている殺しの場の模様等は、耳をふさぎたくなるような残忍なことを平気でというより自慢げに威張つて話しているのです。

三

そうした頃に康江が送られて来たのです。齢は二十四と言っていました。丁度女盛りで襟足も清らかな、こんな所に抛り込まれて

いる私達とは全くお門違いといった感じの女でした。

彼女は素人娘のこととて房内の新入りの作法等知ろう筈もなく、矢張りツルはもたずに来たのでした。

お美代もお春もこの新入りの自分等にもたない清楚で気品のある美しさに打たれて、又それだけにはげしくしつとしたらしい様子でした。あゝ、これは荒れるなと思つて見ていました。入房のときは京子のように狂い廻つて泣きわめくぶざまな醜態は見せませんでした。たが巡視もすんで例の新入りの挨拶になるとこの女は死んでも操を守ろうという型の女らしく、ここ迄おちぶれたらそんな事はどうでもよいと私は思うのですが――。

「何つ、お上品な顔をして、ツルはないのかよ、ツルは――、図々しいたらありやしない大体シヨバ代も払わずにこの地獄のえんま鑑の前が通れると思うんかい。電車にのつたら切符、食堂へ入つたら飯代払う位分っているんだらう。同じ事じやないか、それ位の事が分らないのか、ふんお嬢さんがきいてあきれらあ」

康江はぶるぶる震えて真青な顔をして居ましたが、お美代が顎をしやくると、淫売たち

によつてたかつてすつぱだかにされた上、
しやば忘れを踊る様強要されます。しかし
必死の覚悟をきめたらしい彼女は顔をそらし
乍ら顔として応じません。

「いくら嫌だといつても泣いても喚いてもや
らせるだけのことはやらせるからね、よくも
強情をはつておくれだね、このドスベタ」

と罵り乍らお美代は顔をそむけた康江の鼻
をネシリ上げる。女角力とりと仇名されてデ
ツブリ太つた力三人力といわれる敏子は、召
しに應じて前に進み出て、

「新入りのくせに御手数をかけやがつて」と
言いざま逞しい右足を上げて足の裏で康江の
顔を押しつぶすようにけとぼします。

ワア—と顔を押えて康江は浅間しいあられ
もない恰好で二の足を宙に上げて後へドスン
と引つくりかえる。敏子は情容赦もなく康江
の上におどりかかり、うつ向けにして背中に
馬乗りになり康江の右手を背中にネジ上げぐ
いぐいしめ上げます。

ボキボキと今にも骨のおれそうな音をたて
ぎゆつと握つた右手の拳が首筋近くまで上つ
てゆきます。苦痛のあまり康江は、

「ヒー」と絶叫する。

煙草をふかし乍ら立て膝で笑を浮べて康江

の前に坐つて眺
めていたお春は
康江の髪の毛を
つかむと右手で
こぶしを固めて
鼻柱をなぐりつ
け、

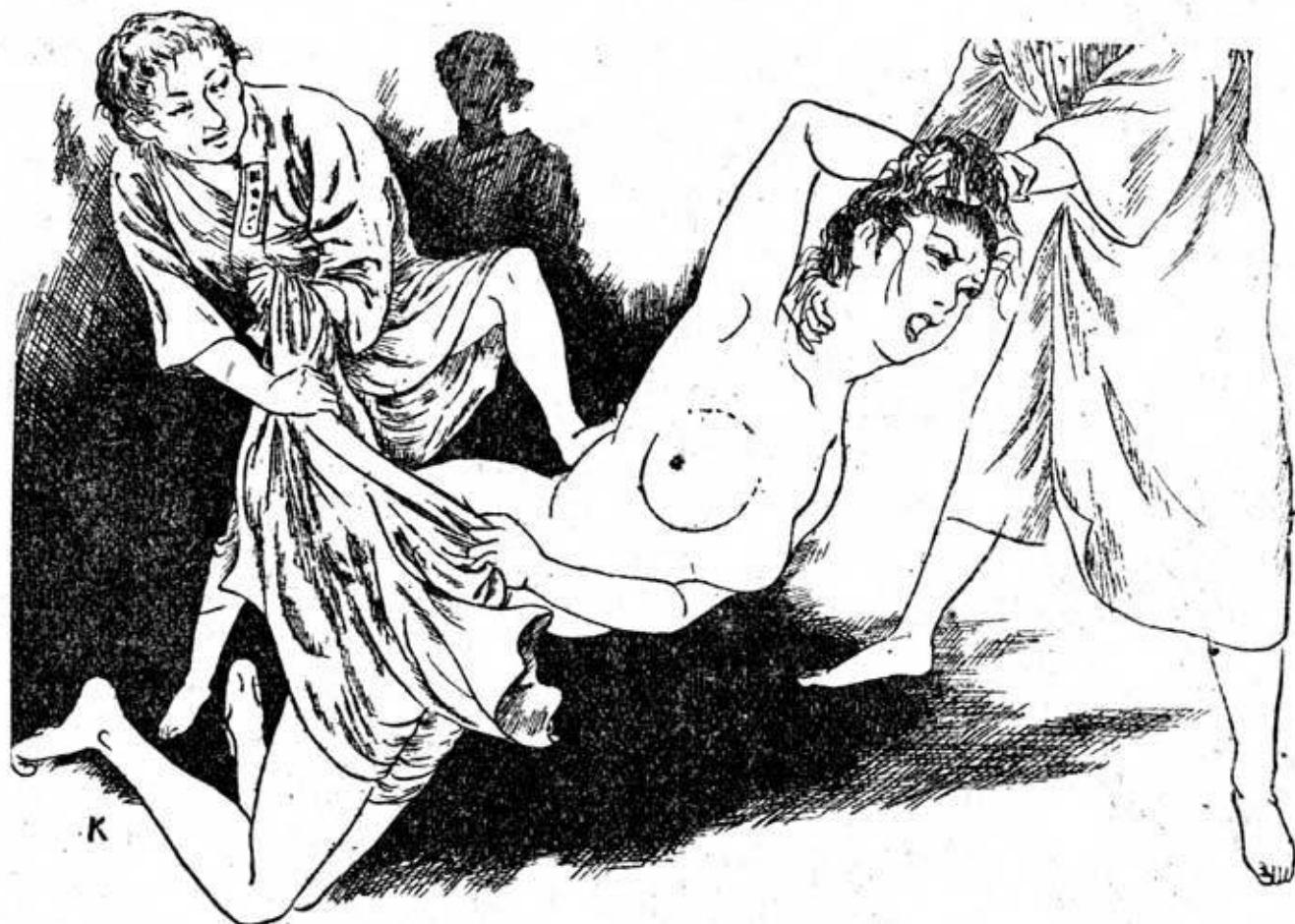
「少しは性根が
入つたかい。し
やば忘れを踊る
ならよし、どう
してもおどらな
いならお前さん
の両腕はボキボ
キ折れてしまふ
よ」

「オ——おどり
ます、おどりま
す。痛い、堪忍
してー」

「敏子、ゆるめ
ておやり。新入

さんは気が変つたらしい」

看護婦上りの女囚の注意で舌をかんで自殺
を企てないようと口の中へ自分の汚い下ば



きを無理やりに
ねじこまれた康
江は、淫売の千
代に引立てられ
て房内の真中に
立ちました。

遠慮会釈もな
く浴びせられる
ギリギリした三
十数名の女囚の
視線、恥しらず
な嘲笑の中に立
たされて、康江
の身体はお尻迄
真赤になつてい
ます。本当に恥
しい時はお尻迄
赤くなるとはこ
の時知りました
自分でものを
言えない彼女に
代つて

「スツテン、スツテン……」

のはやしは前に坐つて
やります。

「スツテン、スツテン、スツテンテン……」

「こらつ、早くおどらんか」

千城の無情のキメ板ははじらいに真赤になつた康江のお尻にビシヤ、ビシヤ、と打ちおろされる。

絶望的な瞳の光を見せた康江は、ボロボロ涙をこぼし乍らはやしにつれて手足を動かしますが足を高く上げるしぐさ等生れて初めての事らしく、真赤になつて左足を挙げたかと思ふと忽ちヨロヨロと安定を失つてスベスベとした女盛りの純白の裸身はズツテンドウと畳の上に倒れます。

皆の手を叩いて喜んでけしかける。

この踊りの圧巻はなんといつても後半の自分の股を大きく開いて頭をその股の間につきこみ、所謂股のぞきという浅間しいあられない恰好で腰を大きくグーグーと上下に振る仕草です。

康江は今極度の恥じらいの中にも、その白い大きなお尻を股のぞきの恰好で盛んに上下に振つています。女囚達の悦ぶことつたら後に坐つて居るパン助たちは

「×××××」 「×××××」

等と盛んにやじり乍ら感極つて後から手のばしてなぶりものにする。

「こんどはこつちへお尻をお向け」

いや賑やかなことつたらありません。

あらゆる方向にお尻を向けさせられて、身体のスミズミ迄皆をたんのうする程玩具にさせて、この狂宴は康江がくたくたになつてぶつ倒れる迄続けられるのです。私も目の前に大きく開いた花に思わず手をのばして玩具にしてやりました。

身体の中がジーンとするような何ともいえない気持です。

四

大田初子は子殺しの罪を着て抛り込まれたのですが、本当に気の毒な事情があるのです。炭坑で働いていた夫が落盤の為に頭を打たれて死亡二人の子供を残して先立つたのです。勿論相当額の労災補償金の下附を受けたのですが、それを放蕩な彼女の実兄に言葉巧みに欺しとられたのです。

無一文になつた彼女は小倉の町へ出て運送会社の掃除婦にやとわれましたが、昭和二十四年の頃は未だインフレがようやくおさまろうとする前で中々生活は苦しかったのです。

そうした或る日の事、社員の机の抽出から高価なドイツ製のライカというカメラが紛失しました。疑をかけられた彼女は、そうでな

いと判つて居乍らかんたなまつたのです。二人の子供をに窮した彼女は職を求めてあちこち、ましたが、中々適当な職もなくどん底迄おちぶれたのです。

売り喰い生活で普通の勤めをする服装も出来なくなり、日雇人夫として働いて子供を養つていましたが雨の日はアブレて遂にどうにもならなくなり、他の女のように身を売る事を恥とした初子はとうとう二人の児を道づれに心中を決心しました。生れ故郷の有明海に遊んで楽しかったありし日を偲び乍ら二人の児を胸に抱いて生きようか、死のうかとどれだけ煩悶した事でしょう。

夜もおそくなつて意を決した初子は二児の首をしめて殺した上、自分は有明海にとびこんだものです。所が水音を聞いてかけつけた附近で魚釣りしていた青年に救い上げられたのです。

気がついて美智子と健一の最愛の二児を失つたことを知つた初子は半狂乱の体で子供の名をよんで泣きくずれました。併し法律というものは冷いものです。そのような事情に於ける殺人もやはり殺人罪として処理されるのです。

裁判の結果は情状をしやく量されて、殺人罪の最低刑懲役三年を下廻る破格の懲役一年でしたがやはり実刑を科されたのでした。彼女はここに送られて来たのは十月も終りの頃でした。

殺人犯は刑期は短くても重罪犯としてとり扱われ、入所ときは捕縄で縛られた儘雑居房へ抛り込まれるのです。酷いので評判の丸

山女看守に縄の端をとられ無情に肩をこずかれ乍ら彼女は雑居房の入口の扉の前に立ちました。

覚悟をきめていたらしい彼女は、鉄格子の隙間からちらりとぞいたその中から、恥知らずな言葉で冷かす嘲笑にびつくりして後手に縛られたまゝ丁度枕探しの高山京子のように強情に入房を拒むのです。入口の両側に両

力まかせに初子を後から押し込んであられもなく右足を上げて初子のお尻をけとばしました。

初子はけとばされて畳の上に蛙のようにへちやばつて垢じみた汚い畳にいやという程顔を打ちつけましたが、後で鉄扉はギーと音を立てて無情にしまります。

こうして入房した殺人犯は房へ入ると室長によつて縛しめを解かれるのですが、室長の氣に入らなかつたりするとそのまゝ放つておかれることもあります。

「虫も殺さんような顔でコロシかい。いい度胸だね。おかみさん、コロシが何をめめめと泣くんたい。泣くとひどいよ。夜の挨拶の時迄そのまゝ立つておいで」

可愛想に初子は後手に縛られたまま鉄格子に縄の端を結びつけられて約三時間もそのまゝそこへ立たされます。

点呼もすんで愈々地獄の時間がきました。

初子は千代と澄江に縛られた縄尻をとられお美代の前に土下座さゝれる。

「面をあげる」とお美代は叱咤します。

鼻をネジ上げて顔を無理に上げさせ、

「コロシなら、ツルはウンともつて来たろうな？」



足先を突っかけて獣のように吠え乍ら後手に縛られたまゝで頑張り、拳句の果は丸山看守の肩に噛みついたります。

房内のあばずれ女の三十数人は面白がつて一齊に立ち上り鉄格子の中間から鈴鳴りに顔をのぞかせてはやし立てます。丸山看守は自分の權威を傷けられたと思つたのでしよう、

五

ここへ送られて来るのはやはり窃盗が一番多いですが、中には強盗をやつたような勇ましい娘も居りますし、詐欺や火付けや中には殺しをやつたような凄い毒婦もあり、したたか者のより集りで、そんな物凄いのが三十人以上も夜は狭い雑居房の内で暇をもてあましてゐるのです。

尤も新入りは昼間の作業も要領がわからず看守や古参の女囚にこき使われて夕方帰房すると物もいえない程疲れますが、二月たち三月たてば作業の要領やさぼるこつを覚え、又次々と新入りが入つて楽になりますので、夜の退屈な時間をもてあますようになります。

又男とは全く隔てられた異常な生活には娘である私でさえ変な気がするのです。ここへ入れられてからは室長や古参の女囚達に散々にしこまれましたが、本当の男はまだ知らない私でさえそうなのですから、日々男と交渉を商売にしていた女囚、それは全体の半分近くもありますが、彼女達の肉体のうづきもさこそと想像されます。

それで夜の狂宴もすんだ後は役付の淫売たちにいどまれて夜とぎの相手を仰せつかるのですが、私は役付のパン助の澄江に目をつけ

られ、色々となぶりものにされたのですが、いくら何でも誌上でそこ迄は書けませんのであしからず。

室長の思召に預つたのはあのミンミン踊を踊つた木村妙子です。又お春の相手には先程もいつた康江が見こまれました。お恥しい話ですが、お相手すると後で食べ物をめぐんでくれるのです。

目の廻る程腹を空かす新入り達はそれを目当てに悦んで身体をそんな下品な女達にまかせるのです。世にある頃は鼻にもかけないそんな女達と一片のパンのため「淫売」をやるのです。又、スネイクお春が来てからは夜の遊びが増々ひどくなりました。

退屈なままに室長と一緒に私達新入りを集めてお仕込みと称して色々の卑猥な芸を競走的にやらせるのです。例えば私、京子、妙子、初江、初子、康江の六人の新入りを一緒に集めて「はさみ」という芸をやらせます。サーカスにいたただけあつてお春は色々なことを知つてゐるのです。

「はさみ」というのは腰から下を丸出しにしてやがみ、下におかれた昔の一銭銅貨を手も足も使わないで身体のある所でひろい上げるといふ見出物です。六人は前に呼び出され

て、ペソをかき乍ら云われた通りにやろうとするのですが、男を知らない私などはそんな事が出来る筈ありません。そこを修業をつんだお女郎上りの女囚が出て来て、ここをこうして、ここをこうすると手をとつて教えてくれるのです。

「まあ、あの面白い恰好つたら」

と皆は私達のこつけない恰好にげらげら笑つて喜ぶ中を顔を真赤にし乍ら、一番おくれたものはおセンチ跨ぎをさせると、おどかさるものですから人に負けまいと一生懸命にはさみ上げようとするのですがそんな事が簡単に出来るものではありません。

それでも三日目には京子と初江はどうやらはさみ上げてやんやのかつさいです。私は一週間も仕込まれた末、どうやら出来るようになります、どんじりの悲運はまぬがれましたが、どんじり迄どうしても出来ない康江は全く悲壮でした。何人もおれば自分にだけ視線は来ませんが、最後の一人となれば全部にじろじろと浅ましい姿を眺められるわけで、それがあの一番恥しがりやの康江ですからおかしなものなのです。

まだ色々とお知らせしたいこともあります、今日はこれで失礼させて戴きます。

サド・マゾ・ソドミヤに利用される

コンピネーションという下着について

長^は谷^せ川^{がわ}洋^{ひろし}

皆さんは人間の全裸の姿より薄い肌着をふわつと纏った姿の方がより煽情的であるというのには御存じだと思います。僕は自分の幼い時の思い出から僕の下着について異常なまでの感覚について申し上げます。

僕は現在或る美容院のボーイをしています。がマダムが僕を奴隷のように玩具にして、いつも眼を放しませんのでゆつくりお便りを書くひまもないのですが、今晚はマダムが映画を見に行つて留守ですので今天好きな奇譚クラブを取り出してこの手紙を書いています。

僕がいう下着というのは普通の肌着の事ではなくて、俗にコンピネーションと呼ばれている上下続きの肌着の事です。日本ではそれ程用いられず、主に十二、三才位迄の子供用が

殆どですが、外国では男でも、女でも、子供は勿論の事、大人にも実に多く用いられています。これは外国のカタログや本を見ればすぐ判りますが、上下が続いているのですから、前は上から股までずうとボタンが掛るようになり、それから股下を通つてお尻の辺まで割れています。さもないと大小便の時一々脱がなければならぬのですが、コンピネーションは一番下かその上に着るものですから着たまゝ用便の達せるように前も後も開くようになつてゐるのです。

その上前はボタン掛け(ワイシャツの様に)ですが後は割れていてもボタンはついていず相当ゆとりがあるのが普通です。だから日本で余り大人が使わないというのも住居の関係

と共にもう一つは日本人特有の羞恥心からだと思ふのですが、コンピネーションを着た姿というのはその割れ目からお尻の肉がチラチラ見えるという凡そエロチックなものです。

僕は小さい時から身体が弱く母は寝冷えするといつて夏はタオルで寝巻までコンピネーションを作つてはかせてくれました。冬は冬でメリヤスのコンピネーションの上に毛糸のコンピネーションを着せられました。何故その頃すではやらないこの様な下着を母は僕に着せたのか知りませんが、夜中に用便に起きた時都合だという外に、後から一寸手を入れればお尻の割目は左右に開いてすぐアムス迄触る事が出来るのです。だから母も無言の中に僕のそんな姿に興味を持っていたの



かもしれません。

僕はよく便秘しましたので、母は僕が二日も便秘するとすぐ万年筆位の太さのゴムの先とゴムの大きな球のついた浣腸器で浣腸をしました。お尻をまくられて肛門にこんな異物を挿入されるということは何度繰り返えされても苦しくもあり恥しい事でしたが、浣腸されるのが癖になつた為、年中便秘するようになったので、殆ど毎日のように浣腸されました。こんな時、このコンビネーションは大変便利でした。四つん這いになつて足を開くとすぐお尻がまるだしになるのです。そして僕はずつと大きくなつてからでもコンビネーションをはかせられていました。

それは中学二年の夏のことでしたが、僕がコンビネーションをはいていた為、思いがけない事が起つたのです。遠足へ行つて川原で昼食の休憩をした時、僕は一人で草むらの中

外国雑誌に於けるコンビネーションの広告



でうとくとしてゐる所を三人の上級生に襲われ、所謂解剖という悪戯をされかけたのですが、僕がはいているコンビネーションに対して彼等は非常にエロチックな興味をそゝられたらしく、その時とうく受身の同性愛を身を以て体験させられたのです。それ以来次第に女性化してきた自分の感情の変化もこのコンビネーションに負う所が大きかつたと思うのです。

本誌九月号二十二頁中段の吾妻新氏の鞭打たれる外国の少女達の所でも「スカートをまくり上げ、コンビネーションのボタンをはずす」と書いてありますが「これは普通のズロースでなくてコンビネーションであるところにその光景は考えただけでも素晴らしいものです。何にしる割れ目のあるコンビネーション

の事です。前へかがんでお尻を後へつき出せば、そのまゝで割れ目は左右へ開いて、アーヌスもヴァギナも完全に丸見えになつてしまふからなのです。外国では鞭打ちや浣腸が一寸した口実の下に行われる様に、この責めに便利なコンビネーションが広く愛用されています。

同じく二十四頁の上段で「寄宿生は十三才以上はコンビネーションがきまりになつています」とありますが、十三才以下でなく十三才以上である所に、コンビネーションが単に便不便といった実用的方面ばかりでなくエロチックな物であり、十三才以上の思春期の女生徒たちがその感覚を楽しんでいる事実を察することが出来ます。とも角コンビネーションはアーヌスもヴァギナも保護をしてはいま

せん。一応被さつてはいますが、そこを通つてゐる割れ目はいつでも、かすかなスキ間を作つており、又いつでも必要とあれば左右に大きく口を開く事が出来るのです。先ずこんなにエロチックな肌着はないでしょう。

僕は今、美容師のマダムに可愛がられ、その人の奴隷として色々奉仕させられ、お客の間でもボーイとして追い使われています。マダムは僕に桃色のコンビネーションを使わせズロースは所謂婦人の和服用という股下の全部割れているのをはかせ、すべて僕を女性的に、又なるべく柔順な様にしつけています。

時にはおフロ屋の三助の穿いている様な日本式の股割れ猿股をはかせられる事もありますが、然し家の中では大抵コンビネーション一枚にされています。お尻を見られていることは慣れていても、このまゝの姿で廊下の拭掃除をさせられる時はとても羞しい氣持がします。四つ這いで雑布がけをしながらマダムにお尻を鞭打たれたこともありますし、肛門に対して悪戯されたこともあります。

今迄奇譚クラゲでも余り見受けませんでした。サドマゾの遊戯を行う人々にはどんなに適しているかはお分りになると思います。又少年を女性的にしたい場合にコンビネーション

を穿かせることは素晴らしい効果があります。誰でもお尻や肛門を見られるのは恥しいのですから、どうしても内股に内股に歩くようになりますし、ズボンを脱いだり着たりするのさえ、足を大きく上げれば股の部分が開くのですから控え目になります。又アグラをかいいたりすると自然に前が開いて、僅かながら合さつていても冷たい空氣が出入りして、いつも大きく左右に開かれてゐる様な錯覚を起させます。勿論立膝なんかも出来ません。又こんな恥しい子供っぽい姿を自分で想像しただけで自分から生意氣な事を言つたりしたりする事はしなくなつてしまいます。

だから少年を女性的にしたい場合は、コンビネーションを穿かせる事は素晴らしい効果があります。尤も男性的な少年達はどういう股割れ式のものを着せようとしても、最初から全然嫌つて受けつけないでしょうが。

先に述べました様にサド・マゾの人達に利用されても充分な満足が得られますが、更に受動的ソドミア達にとつては、肛門の個処が年中無防備な態勢にあるという事は、起居動作に自然的な色つぽさとなつて外に現れてくるものです。これは不思議な心理作用であつて、猿股では決してそういうわけにはゆきま

せん。これはたとえ上からズボンを穿いていてもそういう心理になることに変わりありません。だから僕は受動的な少年は断然猿股等をやめてコンビネーションにすべきだと思ひます。

たゞ女性的な少年でもコンビネーションを使い初めて四、五日で恥しがつて普通の猿股をしたがる時がありますが、そんな時にも絶対コンビネーション以外の物を用いさせてはダメなのです。その時期が過ぎると、男物の猿股などは窮屈で不便で、どんな恥しくてもコンビネーションを愛用する様になります。

私はコンビネーションをはいている關係上便所へ行つても必ずまたいでしやがんでします。たとえ小便の時でも立つて普通の人のように立つてする習慣がなくなつてしまひました。しやがみ込むだけでお尻から股下は自然に左右に開くのですから何の面倒もないんです。ただメリヤスのコンビネーションは一週間十日と使つてゐる中にお尻のふくらみでだん／＼拡つて新しい時は割目がよく合つていたのが割れ目が大きくなつてゆくようで余り割目が拡がり過ぎて恥しくなることがよくあります。

紅花草紙 (切腹遊戯のシリーズ)

草^し木^ど瓜^み

川合伊都子

伊都子は草籠を背負い鎌を片手に黄昏深く
なつた野路を急ぎます。生垣が高く遮つてい
て、垣の向うはまるで見えぬ。どこからもこ

こを一人で歩いていることを見つけられる心
配のない路(実は私の家の庭先なんです)が
で、生垣のところどころに咲いているしどみ

の可愛らしい花の朱色も仄黒く見える程、夜
のとりは濃くなつて来ました。

伊都子はこんな暗がりでも、もし本当に暴漢
にでも出会つたらどうということになるんだろ
うと、そんな場合を想像して見ます。——終
戦後間もなくあつたような暴行した拳闘相手
を絞殺してしまふ。そんなのいやだわ。抵抗
する自分を押えつけて手足を縛り、納屋へで
も担ぎ込んで凌辱する。でも汚ない醜男じや
いけないわ。いゝえ私は手に持つてゐる草刈
鎌で出来るだけ抵抗しきつと暴漢を傷けてし
まうでしょう。

併しもうすぐ現われる筈の暴漢は、そんな
醜男ではなく、きつと伊都子の好きなタイブ
の男性に違いありません。いきなり伊都子を
後から抱きすくめて無理矢理に接吻をしてく
るかも知れませんが、でも私は唇を許しません
激しく抵抗し振り切つて逃げます。勿論男は
追いかけて来てそれから——など、想像を逞
ましくしている矢先へ、思つた通りぬつと現
われました。鳥打帽を真深に、覆面をしでる
ので顔はわかりませんが、毛糸のセーター
にやゝそれより暗い色のズボンをはいた壮漢
が伊都子の行手に立ちちはだかつたのです。そし
て物をも言わずにいきなり伊都子の鎌を持つ

ている手首をむずと掴みました。

あつと思う間もなく脊負つていた籠へ手をかけて強引に引き据えますので、逃げようとして大急ぎで肩へかゝつてゐる紐をはずしました。すると帯の辺りへ腕を廻してぎゅつと横抱きに抱き上げて大股に歩き出しました。

「離して、何するのよ」

と言いながら伊都子は手足をばた／＼させましたが、男は

「おとなしくしろ、今嬉しい思いをさせてやるから」

と低いが力強い声でいいます。

とう／＼伊都子を一軒の家の中へ担ぎ込みましたが、電燈も何もなく真暗です。

「さあ、娘さんだか奥さんだか知らないがおれの言うことを聞きな、驚くことはないぜ、生命を貰うとは言わねえんだ」

壮漢は伊都子の家へ入つてすぐの板の間へ置くと入口の戸をびつたり閉めてこう言いました。

伊都子はそこへ固くなつて坐り口も利けません。すると男はマツチをシュツと擦つて、ボケツトから蠟燭を取り出して灯しました。蠟燭の火に照らし出された壮漢は帽子をかぶつたまま、覆面からのぞかせた眼は好色に燃

えて喰いつきそうに伊都子の方を見守つています。

伊都子は思わず両膝を固くくつつけて、両手で覆るやうに後退りしました。その時の姿は紺紺の元祿袖の着物に派手なメリンスの帯を締め尻端折をして（戦時中作つた服装のもの）を脱いだ上衣を着たのですからはしらないでも裾はないのです。膝きりぐらいの赤いお腰を出したまゝなのです。

「ほう、いゝ肉付きだ」

と言いながら蠟燭を傍へ立てるといきなり近付いて来て右手を伊都子の股のあたりへ触れようとします。

「何するんです！ 帰して下さい！」

「帰さないとは言わないよ、すめば直ぐ帰してやるよ」

覆面の中から物言う声はくぐもつて、とても陰惨な感じです。

「さ、大人しくするんだぜ、な、いゝだろう」

ぐつと伊都子の体を抱いて押し倒しました。「いや、いや、ゆるして」

伊都子は必死に抵抗します。それを押えつけようとする男と二人の大きな影がはげしく揺いで、この場の情景に適わしいシルエツト

が一方の壁に描き出されます。

伊都子は遂に捻じ伏せられ、あり合せた荒縄で後手に縛られ猿轡までされてしまします。「手数をかけさせやがる。だがもういやも応もなからう。はゝゝゝ」

と淫蕩的に笑つて、伊都子の裾が乱れて白い腿のむき出しになつてしまつたあたりをじつと舐め廻すように見えています。

伊都子は今の格闘で息が切れてしまつて、お乳からお腹のあたりまで一息ごとに大きく浪を打つて、両足も余り固くしていたので痺れるやうに疲れて来て、やゝもすれば股が開きそうになるのを必死に我慢している始末です。

男はやおら立上りました。そして伊都子の前へしやがむとその両手を伊都子の膝頭へかけてぐつと左右に押し開きました。あゝ、もう駄目です。



伊都子は口惜しさと恥しさに暴漢が立去つた後、暫くは泣き濡れていましたが、やがて縄目をどうかして脱けようと両手首を捻つたり擦り合せたりいろ／＼に試みました。縄が幾分ずね出したやうなので、それに力を得て右手の指で左手首の縄を引つぱつたりゆるめ

たりしている内に左手首の縄は掌の方へずれて来ました。暫くやつている内に右手の縄が輪になつたまゝするりと脱けました。もう占めたものです。とうとう左手が肘から先だけ自由になりましたので、乳房のあたりへ廻された縄を咽喉の辺までずらせると右手もどうか前へ廻りました。

やつこのことです。つかり縄をはずしてはつと一息つきましたが、どう考えても、このままおめ／＼夫に合せる顔がありません。ふとさつきの鎌が目につきました。伊都子はそれへ飛びつくようにして手に取り上げました。何ということもなく刃先をじつと見詰めていきますと、又口惜しさが込み上げて来て涙がほろ／＼と膝に落ちます。伊都子はこれで自殺して申訳する覚悟を決めました。

いとしい夫を残して死んで行く不倅な身、でもそうするより仕方がないと思ひ込んだのです。あの呪わしい一瞬、汚らしい血の入つたお腹を一と思ひに掻切つてしまおう、と伊都子は心を定めました。英国のある炭坑で凌辱された娘が坑夫の使う小型のダイナマイトを鹽の奥深く入れて自ら爆発させ、腹部を滅茶々に寸断四散させて自殺した例を何かで読んだことがあります。丁度今の伊都子の身の上がそれなのです。それこそ腹を十文

字にでも掻つ裂いて腸を繰出し殊に子宮など掴み出し引き千切つて踏み躪つてしまいたい氣持でいつぱいです。

伊都子は鎌の刃先を二寸ぐらい残して手拭で巻き、双肌を脱ぎ捨て、左手で乳の下から撫で下げようとしたが、帯が固く締つていて思うようにいきません。鎌を一旦傍へ置いて帯を解き捨て、再び鎌を逆手に取上げました。左手でお腰をぐつと下へ押し下げ（例の血糊を入れた氷嚢をぐつと動かないように左手で押えます）鎌の切つ先を下腹へ当てました。思い切つて突立てられません。夫に対する未練、愛着、それらを一切振り切つて決然ぶすつと突立てました。

「ウム」と苦痛の呻きを発しますが、用意してある鏡に移つた伊都子の姿は何という凄惨さでしよう、眉の間に縦皺が深く幾筋か現われ、下唇を噛みしめた苦悶の表情、裸身の肩から乳房への大きな喘ぎ、血汐がベツトリと下腹から纏つた衣類にまで流れ、鎌を持つ手もお腹を押えた手も血に染まつた姿がもう一寸ぐらいしかない蠟燭の光りに或る部分は濃い陰影を作つて映し出されています。

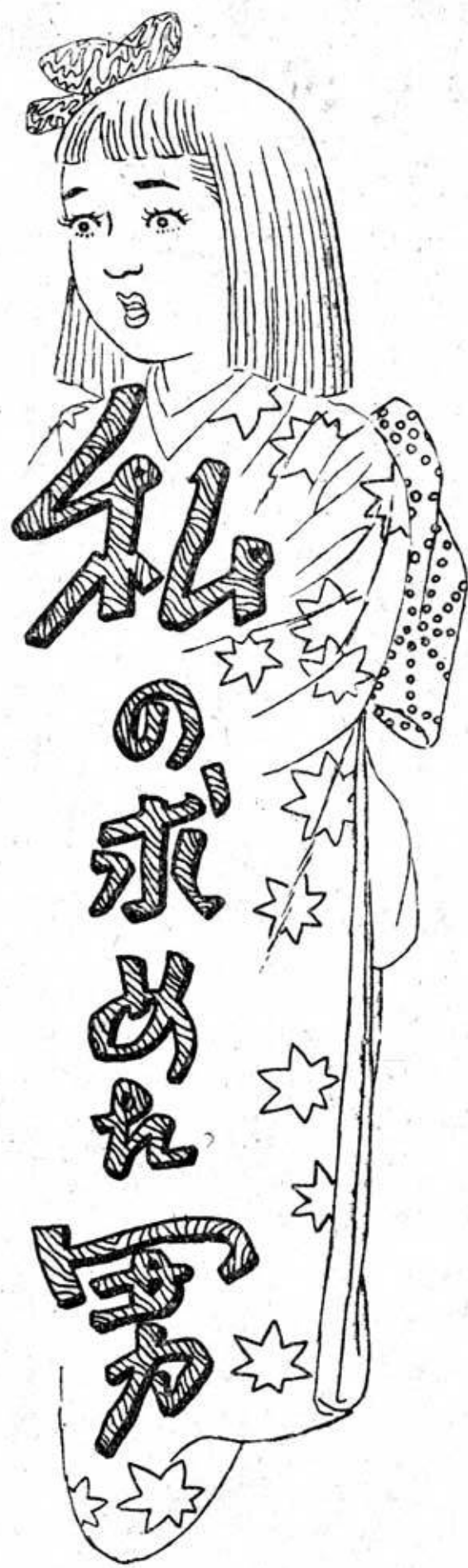
この蠟燭が燃えつくす頃伊都子の命も消えて行くのでしよう。

◇ 遠くの方から「伊都子、伊都子」と呼ばれ

たように覚えてふと氣がつくと、明るい電燈に照らし出された伊都子は、鎌を左の下腹に突立てたまゝの姿で夫の手に抱かれていました。私は死に切れなかつたというわけですが意識を取り戻すと襲つてくる灼けつくような痛みをこらえて夫に一ぶしじうを語ります。そして夫が傷の手当をと立騒ぐのを退けてそのまゝお臍の下へ引廻し、更に右の方へ掻切つて引抜き、夫の腕に抱かれて死んで行くのです。

勿論筋としてはつまらないものですが、私達にとつてはとても愉快なのです。筋書通りなんです。が、暴漢に出会う処など、街燈の光も届かず、家の電燈も消して置きますと、狭い庭でもその暴漢が本物じやないかとびくつとしますし、縛られた縄を脱げるのも本氣に骨を折つてやらないと仲々脱けられません。そんなこんなで強いて掻き立てなくつても本氣になつて切腹するまで氣分が進展してしまします。ですから初めてやつた時など切れないうちに刃を潰してある鎌なんです。が、つい引つかけてしまつて深さ一センチぐらいの傷をしてしまいました。でも皮下脂肪は二センチ以上の厚みがありそうですから大丈夫です。このような傷は滅多にしませんけれど蚯蚓ばれや猫の引掻き傷ぐらいのものは始終なのです。

（この項終り）



第一回

松井籟子自傳的小説

松井籟子

瀧麗子画

〔一〕

子供達が走りながら路地に消えた。

大人達が二、三人ずつ一とかたまりになつて、ざわざわと話し合つてゐる。

物見高いのはなにも江戸ツ子に限つたわけではないだろうが、

「何かあるな?」と、ピンとくる感の早さは、江戸ツ子の常だつた「見てくるわ」

私は長い袂を小脇にかゝこむようにして、走り出していた。年寄りの乳母がとめるひまもなかつた。

細い路地の一軒の家の前に人だかりがしている。

路地といつても棟割長屋が並んでいるわけではない、新橋や赤坂には一寸格が落ちるが、三流とまではさがらない花柳界だつた、一軒一軒が小じんまりと、粹に建っている。しかし、土一升金一升という土地だから、庭といつたら窓の下、二尺とはない幅に土が顔を出しているぐらいだ。大抵の家が二間間口で、一間は格子戸、一間は窓という建て方で、ひしめくように並んでいた、道幅は一間あるかどうか、だから家の前に黒山のように人が立つてみたところで、家の中をのぞけるのは、その小さな窓を通してだけだ。

「可哀想にね」

そんなことをつぶやきながら、通りすぎて行く人もある。

「ねえさんが怒るのも無理ないのよ」

そんなさゝやきもきこえる。

子供達は無遠慮に、格子窓にぶら下るようにして中をのぞきこんでいるが、大人達は見るとな見ないような、曖昧な恰好でさゝやき合っていた。

私はお稽古帰りの舞扇を、兵庫帯の間にさしこむと、人をわけてその窓へ近づいた。私はその時、何が起っているのか、全然予測出来なかつた、だから其処に縛られた女の人を見た時、目にそれが入るよりさきに、胸がどきつと鳴る方が早かつたような気さえした。

着物や紐が部屋一杯に散らかつた中に、一人の女が縛られていた私は見てはいけないものを見てしまったような罪悪感に、背中がカアツとほてつた、ちらつと後を向いたが、知っている顔もないし、乳母はまだ追つて来ていなかった、私は大胆に窓の格子につかまると、背のびして、中をよく見ようとした。私はその時十ぐらいだったと思う、道からは中が見えたのに、窓の下へ近づいてしまうと、かえつて私の丈は窓の高さに届かなかつた、私は格子にぶらさがるようにして、爪さき立つた。

「許して！もう、かんべんして下さい」

縛られた妓は泣きながらあやまつている。赤い衿が細くついているさらしの襦袢一枚で、後手に柱にくゝりつけられているのだ。頂度玄関と、窓に近い部屋と、奥の座敷との間が、襖と障子をあげ放せば、手頃な仕置柱になるのだつた。

とき色のしごきで柱にくゝりつけられている人は、髪をもつて引

きずられてもしたように、島田の髻の根ががつくりと横に倒れ、髻の毛は長く乱れてたれていた。

「どんなにあやまつても、今日という今日はお仕置きしてやるからね」

丸髻に結つたおかみさんらしい人が、手に線香を持つて、縛られた妓の腰巻をまくつた、短い赤い腰巻はすでに両方の脛を見せていたが、おかみさんの手でまくられると、内股までくるつと皮をむくようにあらわになつた。

「あつ！」

と言つて、妓は隠すように二つの腿を重ねて座り直したが、手の自由をうばわれているので、まくられた腰巻をもとのようには出来なかつた。

おかみさんは邪慳に重ねた腿を自分の足でふみつけるようにしてもとに戻すと、

「さあ、お灸をすえてやろう」

と、その白い腿の上へもぐさをのせた。

「許して！おかあさん、もうかんにんして！」

そう言いながら、妓は足をこすり合わせて、のせられたもぐさをふり落してしまつた。

「強情つばり、まだ手向う気だね」

おかみさんはいきなり腿のやわらかい肉を抓りあげた。

「おとなしくしないか」

「ああつ！」

と、縛られたまゝ、女は背のびするように、くゝられた手を柱にこすりつけて悶えた。

くずれた髪がじりじりと音をたて、柱できしむ。

「お前が悪いのだから、あやまる気があるのなら静かにおし」

言われて、神妙に膝をそろえて座り直す妓の目から、はらはらと涙がこぼれた。

おかみさんは両方の腿の上へ大きなもぐさをおき、火をつけた。縛られている妓は観念したように、伏目に首をたれてじつとしていたが、火がジジシーと肌を焼くと、

「あつ、熱い！」

思わず言つて、足を泳がせるように動かした、もぐさは落ちて、畳を焦した。

「チョツ」

と、おかみさんは癪をたてたように舌打ちすると、

「静かにしないんだね。いいよ、たんとあばれておいで」

捨てゼリフを残して姿を消すと、荷物を縛るような麻紐を持つて出て来た。

「さあ、あばれてごらん」

言いながら、腿と脛とをぐるぐると何重にも廻わして縛りあげ、それでもたりないと思つたのか、両方の足首から柱へときつちり縛りつけてしまった。

「お前にお金のかゝつてゐることは誰だつて知つてゐるんだよ。ほら、あんなに御見物衆がいるけど、誰も助けてくれやしないだろう」

そういうと窓の外の子供達に向つて、
「いいかい、お前達も恩を忘れると、こういうめに合うんだよ。よく見ておいで、ほらね、恩知らずの顔というのはこういう顔をしてゐるんだよ」

と、妓の髪を手でぐつとつかむと、ねじ向けるようにその顔を窓の方へ向けた。

「わあ、泣いていやがら」

男の子がはやした、そういう男の子の方が泣きそうな緊張した顔をしていたが、そうひやかしたのも男の子の強がりだつたのだろう。それが波の様に伝つて、ざわざわと窓の外の子供達は口々に何か言つてはやした。

妓は柱にくゝられたみじめな恰好を、人に見られているだけでもどんなに恥しかつたらう、それを無理やり顔まで向かされ、「泣いていやがら」とはやされては、鞭で打たれるよりつらかつたかもしれない。

おかみさんは座敷一杯に散らかしてある色とりどりの紐を何本かつなぎ合わせながら、

「いいかい、見といて、この恩知らずが、もつと泣いたりわめいたりするかね、笑つてやるんだよ」

そう言つて、ぐるぐると妓の体を柱へ縛りつけていつた、首を一と巻きして、肩から胸へ十文字のように交叉させるとお腹へ廻してぎゆうつと締め、さらに腰の下の方から又お腹へかけて、ぐるぐると紐のありつたけ、荷物でも柱へくゝりつけるようにぎゆうぎゆうと締めつけた。

「ああーッ、うー、うー」

と、妓は獣のような荒い息を、苦しそうに吐いていた。

「もうこれで動けないだろう、いいさまだね」

おかみさんは足のさきで妓の縛られた膝をゆすぶつてためしてゐていたが、それは水平に少し動くだけで、縛られた女はもう人間と

いうよりは、何か得体の知れない生きもののようだった。

「さあ、ゆつくりお灸をすえてやろう」

おかみさんは先ず一服というように、長煙管をとると、煙草をつめて、うまそうに一服すった。そして、ポンポンとその火を妓の裸の膝へあけた。

「ううっ！」

と、妓は齒をくいしばつてこらえた。

それが先ず熱さのかわきりだった。

おかみさんはもぐさをとると、妓の膝頭から順に内股の方まで、五つも六つも並べて、両方の腿に同じようにのせた。そしてそれに火をつけ出した。細い煙がすうつと立ち昇る。一つの火が消える、別の火が肌を焦がしている。それが消える頃は次のがじりじりと皮膚を焼く。

「あつ！熱イ！ヒーツ！」

こらえかねた悲鳴が洩れて、動けないと知りながら、縛られた身をよじるようにした。

「フフム、ちつとはこたえたかい？」

おかみさんは次々にもぐさをのせて、次々に火をつける。息つく間のない責苦だった。

涙と汗と一緒になつて、妓の顔がくしゃくしゃに歪む。その奇妙に歪む顔さえ隠しようがなく、窓の外へ向けているのだ。そして、まるで天井から芋ざしになつていような姿で、体中をもむように悶えつゞけなければならなかった。

子供達は真剣な顔で、苦痛という名の生きものを見ていた。もうひやかす子供もいなかった。



私は急に尿意を催して、どうしていいかわからなくなってしまう。ジーンと尿なのか、血なのかわからないものが、胴と脚の境目に集つて来てしまったのだ。

「もうやめて、やめてあげて！」

私はそう叫びながら泣き出していた。

乳母が私の手を引いて通りへつれ出してくれたけれど、私は地面へしやがんでしまった。尿をもらしてしまったのだ。そして、動けばもつともらしそうで、私はどうすることも出来なかった。

(一)

家へ帰えつて私は今日見たことを、家の者には話さなかった。何となく話してはいけないように思つたのだ。

しかし今考えると、その時も母に

「今日おねえちゃんが縛られて、お灸をすえられるのを見たのよ」

と、虚心に話してしまえるようだったら、少女になつて、本屋の店頭で、縛られた女のさし絵に皮膚をチリチリと異常にそう毛立たせることはなかつたらう。それを母に秘密にしてみました所に、私のマゾヒズムの芽生えがあつたのではないだろうか。そして縛るとか、縛られるということは、私の場合、性慾に関連しているということが、まだ性慾というものの何であるかもしれない子供なのに、頭が知っているのではなく、体が知っているという様な認識のあり方で、知っていたといえよう。

そのくせ私は普通の「性」というものには好奇心さえ持たなかった。女の子は小さい時から、女の象徴を隠さなければいけないというのを自然に覚える。小学校六年生にでもなれば、男湯に入るの

を恥しがるものだ。それなのに私は平気だった。大人の前でも平気で裸体になれた。裸体は性慾につながりを持つていなかった。自分が持たなくても、女の裸体は性慾につながりを持つてみる人が多いのを、私はよくうっかり忘れた。一人前の女になつてからも男女混浴など平気でやつた。それはいわゆる男ずれがして羞恥を感じないのではなく、子供の頃から引きつゝいて羞恥を感じないということ、理解してくれる人は少く、誤解されやすかつた。それと同じように私は猥褻をすることも平気なのだ。何故ならそれは私にとつて生理の話ではあつても、猥褻ではなかつたからだ。

だから子供の頃から、私にもし恥しいという場合があつたとしたら、雑誌や本に、縛られた絵のあるのを見ていて、それを見ていることを人に見られた時だ。丁度それは裸体に性慾を感じる人が、春面を見ている所を人に見られた恥しさと同じなのかもしれない。それは子供の恥しさではなく、大人の恥しさなのだ。つまり、性器が完全になつていないのに、裸を見られることを恥しがる子供は、すでにその恥しさは子供の恥しさから一歩進んで、大人の恥しさになつているのだ。そういう意味で、私は性器を見られると同じような恥しさを「縛る」ということに感じていた。

私はその日、母に私の見たことを言わなかつたが、乳母は話したらしい。

「そんなものは、子供に見せるものではない」

と、母は乳母を叱つた。

私はその叱つた母の肉体の奥に、マゾヒズムが無意識に座を占めていはしなかつたかと疑う。しかし若くして亡くなつた母の思い出は清らかで、性生活なんて頭に浮かべたくないのかもしれない。

しかし、こうしたことを一々フロイド流に論じていたら、長くなるからやめておこう。

(三)

あくる日、いつもの様に小学校から帰って、長い袂の着物に着かえると乳母と一緒に踊りの稽古に行つた。その稽古所までは、いくつか電車をこさなければならなかつたので、いつも乳母が附添つて行つたのだ。

その頃の下町の娘達は、六才の六月の六日に、そうした稽古ごとをはじめるのがならいだつた。ただ踊りの稽古はおさらいの時、金がかゝるので、わりにゆとりのある家の子供が多かつた。

私の家は別段金持ではなかつたが、祖父がある大問屋の一番々頭今でいう支配人をしていたので、そう貧しいということもなく勤め人の家庭のようにひっそりとくらしていた。

近くに花柳界のある土地だけに、踊りの稽古所は素人の娘より芸者衆の方が多いくらいだつた。

勿論、昨日の路地の奥のさわぎは、稽古の順番を待つ芸者達の間で、とりどりにうわさされていた。

その家は分いづみという家で、その丸抱えの桃奴という芸者が得心づくで熱海へ遠出したのに、いざというどたん場で、客をふつて帰つて来てしまつたらしい。一晩どこへ泊つて来たのか、昼日中知らん顔で家へ帰つたのを、すでに熱海から知らせが来ていた分いづみのおかみさんがいきなり縛りあげての析檻だつたのだ。桃奴には桃奴の理窟があつたのだろうが、その通らない世界だつた。ひとりのいい客をしくじるといふことは、風が吹けば桶屋が喜ぶとい

うような因果関係をもつて、分いづみの屋台骨をおびやかす結果にもなるらしい。人身売買の公然と行われていた頃だつたから、おかみさんには桃奴を責める言いが充分にあつた。それを近所隣が同じ商売で知つていただけに、へたにとめだても出来なかつたらしい結局見番から、誰かが助けに行つた時、桃奴は素裸で水風呂につけられていたそうだ。

せまい風呂桶の中へ、後手に縛られたまゝ座られ、無理やり上から蓋をされていたという。窮屈にかがまされた体は、水面すれすれに顔がくる程に丸まつて、髪もびつしより濡れていたのは、上からおかみさんが頭を押さえつけて水を浸していたのかもしれないという話だつた。浸しては出し、浸しては出し、何度かされたあげくきつちり上から蓋をして、重しの石までのせられては、もし苦しさのあまり、気を失つて、がくつと顔を水の中へつけてしまつたら、桃奴は風呂桶の中で水死したかもしれないのだ。

「大体あそこのおかみさんは好きなんだよ、そんなことするのが」

「桃ちゃんだけじゃないつて話だよ」

「ふだんいい人だから辛抱しているけれど、あのねえさんは酔つぱらうと下地ツ子を縛つては物差しで打つたりするんだつて」

「だけど桃ちゃん、熱出して寝ているつていうじゃないの」

「そりやあんなひどいめにあわされれば、熱だつて出るよ」

そんな話を私は耳の穴をひろげるような気持で聞いていた。

桃奴という人が何故いじめられなければならないかつたか、その理由はその時の私にはよくのみこめなかつた。ただ、水風呂につけられたということが頭にはつきり、きざみこまれたように残つた。

私はその晩、風呂へ入つた時、そつと頭の上へ中から蓋をしてみ

た。そして、手を後に廻して、こうして縛られていたらどんなだろうと思つた。それはまるで生きているまま、棺桶に入れられたような気持だつた。びつたり蓋をしてしまうと、中は真暗で湯気がもうもうとこもり、耳がーんと鳴つた。外の物音が何にも聞えないような気がした。私は本当に死んでしまひはしないかと、急に恐くなつて、大急ぎで蓋をはねのけると、大きな音がして蓋が倒れた。



「又何かいたずらしているの？」
母の叱言が外でした。私は自分のしたことをのぞかれたように、それに返事も出来ず、苦しい程の胸の動悸を手で押えてだまつていた。

〔四〕

私はお稽古の帰りに、分いづみの前を通つてみたい気持を押えるのに骨を折つた。大抵いつも乳母か、時によると母が一緒だつたから、ひとりで通るわけにいかなかった。何かいゝ口実はないかと探したが、子供が芸者家の並んでいる路地に、用のある筈もなかった。

人間誰にでも好奇心はあるのだから、乳母だつて私が誘えば、もう一度あの家の前を通つてみようとしてくれるかもしれない。それを誘えないのは、自分の好奇心が単なる好奇心ではないと知つていたからだろうか。私の潜在意識の世界で、マゾヒズムに対する憧憬が、同じ潜在意識の世界で性慾につながるのを表面には単なる羞恥として現れたのであつたとしても、子供の私は何故その家の前へ行つてみようかと誘うことが恥しいのか、考えてはみなかった。ただ、それは恥しくて乳母に言い出せなかったから言わなかつたというだけで、理窟を考え出したのは後のことだつた。

しかし、たまに誰も附添つて行かない日があると、私はいそいそと、その細い路地をまがった。それはまるで、恋人の家の前をそつと通つてみる気持に似ていた。

路地を入る時には誰かが見ていないかと気にして、一寸あたりを素早く見る。家の者か、又は家の者に「お嬢さんがあの路地をまがつて行つた」と告げるような人にさえ見られなければ、路地は通り抜けられる路地だから、べつに言い訳の言葉を用意しなくてもすむのだ。それも踊りの帰りなら、長い袂の着物で舞扇を持つてゐるのだから、芸者屋の建ち並んだ道を歩いていて、とりわけ目につく姿でもないのだつた。

私は路地を入るとすまして歩く。少し行つて分けいづみの格子窓が見えてくると、胸がどきつと鳴つて、二の腕のあたりで皮膚が一枚すつと皮をかぶつたような気がするのだ。この胸の鳴るのと腕の皮膚の感じは同時におこる。

すると私はわざと何でもない顔をつくつて、その家の前を通りすぎるのだ。格子窓がしまつていれば、安堵に似たような失望を味うもし、窓があいていっていると、私はそこでもう一度、胸のどきつとするのと、皮膚が一枚すつと皮をかぶるのたと、再び感じなければならなかつた。

きれいに島田を結つた桃奴が片手に褌をとつて出て来たりすると裏切られたような気がして「イイイ」と、下唇をつき出してやりたけい程癪にさわる。そのくせ桃奴の縛られた姿が彷彿として、そのきれいな島田をくしやくしやにつぶしてやりたいような気がするのと、急に又、尿意を催したりするのだつた。

それ程私が胸をときめかして分いづみの前を通つてゐるのに、私

の通らない時に、私の見たいと思うことが起つてゐるらしかつた。

子供の私は、通るといつてもお稽古帰りの真昼間だし、分いづみのおかみさんが酔つぱらつてその性癖を表すのは、多分夜になつてからだろうから、時間的な違いがある。その時の私はそこまで考え及ばなかつた。

時々稽古の順番を待ちながら、芸者達が人のうわさ話をするのを私はいつも他の子供達とおはじきをしなが、耳だけ聞きもらすまいと気を張つていた。

「又、分いづみで大変だつたのよ……」

ある日ひとりが言い出した。

私はピリツと緊張して、兎だつたらピンと耳を立てるかもしれないように、全身の神経を耳に集めた。

「女中のおはるさんが神棚のローソク立てを掃除していて、一寸手がすべつて溝へ落ちちやつたんだつて。夕方燈明をあげる時になつてねえさんに言つたらしいのね。おはるさんのつもりでは新しいのを買つて来て弁償しようと思つただけど、あいにくお給金をみんな使つちやつたあとで、お金がなかつたらしいわ。それが折悪く、ねえさんその日昼間から飲んでいてさ、大分まわつていたんだつてじゃあ、お前がローソク立てにおなりつて、おはるさんに言つてさローソク立てが着物着ていることないだろう、さあ、とつておしま……、そういうんだつて。おはるさんが泣いてあやまるのを家中追いかけて廻わして、帯をとり、着物をとり、襦袢までとつて、とうとう素裸にしてしまつて、腰巻きにまで手をかけるので、おはるさんがとらせまいとしてねえさんの手をはらうものだから、おはるさんの手を後手に縛りあげて、とうとう腰巻まで、すつかりとつて丸

裸にしておいて、あばれないようにつて、体中がなじがらめに縛つちやつたんだつてさ」

「誰か助けてやればいいのに……」

「それが頂度みんな出ている時だし、うるさいからつて、無理やり猿ぐつわまではめられて、声も出ないようにしてしまつたらしいのよ」

「で、ローソクを立てられたの？」

「あんた人間の体の上にローソク立つと思う？」

「蠟をたらしたら立ちやしないかい？」

「立たないんだつてさ、それが……」

「おはるさんを動けないように縛つておいて、体中に蠟をたらたらとたらしはローソクを立てるんだけど、どうしても倒れちゃうんだつて。おはるさんの体、めちやめちやに蠟をたらされて、こわばつてしまうと又その上からローソクの焰でやわらく蠟をとかされて生きた心地しなかつたつて」

「そいでねえさんあきらめたの？」

「それが強情だろう、どうしても立ててみせるつて、おはるさんの腰に縄かけて、お尻を上を向くように欄間へ細引を通して吊り上げたんだつて。まるで肉屋さんにぶら下つている牛か豚のような恰好にされたらしいよ。もうそうなたらおはるさんも観念して、静かにしていたんだつて。だつてもがいてごらん、かえつてローソクが倒れてお尻を焼かれてしまうだろう。だけで熱いより何より今度は痛くて痛くて、たまらなかつたつてさ。それを無理やりローソクを立てて、火をつけると、その火で煙草を吸つたつていうんだもの、あのねえさん変つているよ」

「そいでローソク何本立てたの？」

「一本ぎりさ」

「二本立たないかね？」

「二本？」

「そうさ」

「フフムムばかだね、この人は……」

そう言つて意味あり気に笑い合つてゐる芸者達に、私はローソクが何故二本立つのか、立たないとしても、何故二本たつのだろうといつて変な笑い方をするのか解らなかつた。しかし、その疑問よりは、裸にされて縛られた体のあつちこつちに、ローソクの蠟をたらたらとたらしはれてゐる光景が強くひびいた。本当にローソクが立つか立たないかは、あまり印象に残らなかつた。

ただお尻を仰向けに吊るされて、そのお尻の穴にローソクを立てられて、じつとしているそばで、煙草を吸つていたというおかみさんが、又、煙草の火をお尻の上にポンポンとはたいてすてたのではないかと思うと、自分のお尻のあたりの皮膚が妙になるような気がした。

しかし、いつたいそういうめにあわされたらどういう気がするのか、何故縛つて苛められたいのか、そうした心理的な追求は子供の心にはおこらなかつた。

ただ一度でいい、縛られてみたいと思つた。しかし、どうしたら縛られることが出来るのか、それを考えつくよりも、縛られかたをいろいろ考えてしまうのだつた。

敗戦後の満州に於ける日本婦人の辿った凌辱の記録

流 浪 八 年

沖 野 恵 美 子

〔一〕

戦争に負けるというのはこんなにも悲惨なものでしょうか、昨日迄世界の最優秀民族として誇っていた私達が、忽ちのうちにあの油と垢で汚れきつた下層満人たちの玩具としてあの恐ろしい凌辱の餌食になろうとは。

私は今更敗戦後の満洲で受けたかず／＼のいまわしい羞しめの思い出を筆にするのものがわらしい思いで一杯です。然し私はあの一生涯忘れることの出来ない日本婦人の凌辱の記録をはからずも身を以て体験した一人として同じ日本人の皆さまに読んで頂きたいと敢えて恥を忍んで筆を持ちました。そしてこれはいつわりのない告白として正直に書いてみました。それだけに、只今現在の住居と本名だけは呉々も発表しないで下さいませ。

私はあの当時の恐怖や苦痛、羞恥、口惜しさ等をまぎ／＼と思いうかべて、あの時受けた生々しい感じを蘇えらせつゝ只今この筆を運んでおります。決して誇張や嘘は誓つて混えてはありますが、残念なことには、正直なところ、その時の恐怖よりも直接肉体に受けた生々しい官能の洗礼の方がより強く残っていることです。例えば私が殆ど全裸に近いボロをまとつたまゝで庭の立木に後手に縛ら

れ股をひらかされた羞しい恰好で晒し物にされた時のこと等、今思い出して、お羞しいながら、怖ろしさよりも官能のうずきの方がより強く残っていることを皆様に告白せねばなりません。

何にはともあれ、私はこれから何のかくし立てもなしにありのまゝ書いて参りましょう。若しそういう目にお逢いになられたとしたら皆さまでしたら一体どうなさいますでしょうか、平凡な女の辿つた道としてどうか、さげすんで読んでやつて下さい。私は本当のところ自決したりする勇氣はなかつたんですもの。

満洲の国境をソ連の軍隊が突破したという報せがあつた時には、私達の住んでいた牡丹江の駅はもう貨車も客車も手に手に包みをぶら提げ泣く子を背負つて避難しようと焦る人々で鈴成りでした。私は旅館を経営していた叔父の家に厄介になつて手伝つていたのですが、叔父と叔母とうちに仿っていた板場さんや女中さん等と一緒に駅へ駆けつけました。しかし北から南下してくる汽車はどれもこれも皆超満員、それに牡丹江仕立の汽車は金鈴街に住んでいた軍人の家族、官公署のお役人やその家族ばかりで私達のような一般人には到底順番は廻つてきそうにありません。無理

に割り込もうとする者は着剣した憲兵達によつて振り落されてしまうのです。

その中、爆撃機が二時間置きにやつてきてはドカン／＼と街の中へ爆弾を落し初めました。その度に私達は駅の周囲へくもの子を散らすように逃げのびるのです。銀座通りの大きな映画館も粉々になつて飛び散り、市中の各所からは炎々と火の手が上り、それが朝から晩まで消す手もないまゝ燃え続けています。

時々市中のあちこちで何か爆発する大きな響きが連つてきます。私達は生きた心地もなく、何時ソ連の兵隊が現れるかと怯えながら、それでもあてのない汽車を待つて駅の近くでまる二日を過しました。

三日目の朝、ソ連の戦車がすぐ近くの正金山迄来たという情報が誰言うもなく、皆の口に上りました。もうこのまゝでじつと汽車の順番を待つてゐるわけにはゆきません。一樣に煤で真黒になつた顔に眼ばかりぎよるつかせて、物も言えない驚きようでした。



やがて避難民の集団の一角から、まるで砂がくずれるようにボロ／＼と、海林へ、そして吉林へと三々五々に思ひ／＼の目的地へさして歩き出したのです。この避難者の群は丁度、映画で見たそのまゝの悲惨な行列となつて続きました。

〔二〕

それから二日目、私はたつた一人、木の枝が重り合つて空も見えない密林の中を歩いていました。海林の近くで私達の持物を狙つて

襲つてきた満人の為に、それまで互いに助け合い、励まし合つて来た人達が、散り散りばらばらになつてしまつたのです。

落葉が何寸にも積つて、歩くたびに履いているズツクの靴が見えなくなる位、めり込みます。いつも眼に見えない何物かに追いついてられるような気持で、あてもなく唯盲滅法に山の中を歩き廻りました。僅か二、三升のお米ですが、それが肩に喰ひ込んで、まるで身体でも縛られたように、ズキ／＼と痛みます。

いつの間に破れたのか、裏底のゴムとズツクとのつぎ目から、はみ出した指に枯枝の折れたのが突きさゝつて、思わず「痛ッ」と、背中中の荷物を投げ出して、落葉の上へどしんと腰を下しました。

疲れた身体をふんわりと受けとめてくれるその柔かい感触！す早く靴をぬぐとむれたように熱を帯びた足の指に一筋、ぶつとふくらんだ血、今までだつたら、針の先で突いたつて、ヨーチンだ繃帯だと大騒ぎしたのに——私はゴロリと仰向けになつて両手を頸の下

で組みました。(叔母さんたちはどうしたかしら?) ひよつとしたら殺されたかも知れないわ、私だつて果して何日迄生きられるだろう)

ネジをかけるのを忘れて止つてしまつた腕時計もたつた一人では時間を合すことさえ出来ません。朝から何も食べていないお腹が妙に頼りなく、頭がぼうとする様な気持です。

(お鍋か何か落ちていないかしら、せめて鉄兜でも、お米はあるんだから御飯を炊いて食べないと餓え死にしようわ)

そんなことを考えながらも身体の方は起き上つて積極的に探そうとはしません。いや、よし探したつてこんな山の中にお茶碗一つ落ちてゐるわけはありません。霞む様な記憶の中に、楽しかつた過去の思い出が走馬燈の様にかけめぐります。

「あら、いつの間にか夜になつたのかしら?」

私は独り言しながら立つて電燈をつけました。それなのに何故かぼうと霞んで部屋の隅も見えない暗さ、

「恵美ちゃん」

音もなく襖が開いたかと思うと、絹子叔母様が入口でそつと呼びかけます。

「今晚も?叔母さま」

私がそう問い返しますと、

「えゝ早くよ、早くよ」

薄桃色の大きな花模様の柄の寝巻、叔母はすつと私の眼の前迄近づいてきました。はだけた胸のあたりは、美しい彫刻を思わせるような乳房がふつくらと見えています。叔母と言つても私よりたつた七つ歳上の二十五、まだ子供のない身体全体が、爛熟した女の艶めかしい匂いを発散しています。

「あゝ、叔母さま、私もう」

くらゝと気の遠くなるような匂いが私を眩いさせ知らず／＼のうちに私は叔母の胸に顔を埋めています。

「さあ、早くよ」

背中の手が強く私を押す様にして、そしてもう一方の手でしつかりと腕を捉えています。薄い寝巻を透して、肥り肉の叔母の体温が感じられ、私はうつとりと、この幸福感に酔つていました。

「さあ、恵美ちゃん、そこへ坐つて」

叔母はチュツと私の頬にキスすると命令するように踏台を指差しました。

「叔母さま、今晚どうするの?」

期待に弾む声で私が聞きますと、

「さあ／＼、これを着るのよ、早く」

いつの間には、私の大好きな振袖の着物を持つてせきたてます。それ迄着ていた窮屈な服を脱ぎ捨てゝ着ようとしみますと、

「駄目／＼、ブローースもみんな脱ぐのよ」

その声は何故か私を押えつけるような抗うことの出来ない響きを持っています。キラキラと光る叔母の眼、私は後向きになつて着物を羽織つたまゝブローースを脱ぎました。そして帯を締めようと手をうしろへ廻した時、

「それでいいの、そのまゝ」

叔母の声がしたかと思うと、ギユツと両手を一緒に握られました。

「あゝ、恵美、可愛いゝ恵美!」

乱暴に私を前向きにすると、叔母の温い手は私の両腋から差し入れられてピツタリと抱き締められました。

(三)

(夢だつたんだわ、まあ私つたら)

夏とはいえ、一面に降りた露にしつぽりと濡れて私は落葉の上で眼をさましたのです。どの位眠つていたのでしようか、木の間から僅かに灰色の空がのぞいています。

眼がさめてからも尚身体中がむず／＼する様なやるせなさ、あゝ、なんであんな夢を見

たんでしよう。見た夢の幸福さに比べて今は又なんというみじめさでしようか、それにしても叔母達は一体どこへ行つてしまつたのかしら。

十五の年に遙々秋田県から満洲へ渡つてきた私、叔母の夫が経営している旅館「喜久屋」で御手伝いをして三年、その間の楽しかつた思い出を今更のように反芻してみるのだした。

あなたりは次第に明るくなつてきました。

小鳥がチチチ……と腹の底までしみとおるような澄んだ声で囀っています。私は生米を噛りながら、フラ／＼と立ち上りました。足の裏はお餅がふくれたように脹れ上つて踏みしめるたびに針で刺されるように痛いのです。負い袋の紐がヒリ／＼する肩に喰い込みます。

あゝ、こんな事で果してこの先、生きのびられるのだろうか、私は絶望的な淋しさを感じました。朝日が昇りかけたのが木の間を洩れる白い縞のような陽ざしで知りました。爽々しい朝の訪れなのです。私は勇を鼓して歩き出しました。

地理も方角もわからない女の身で只むやみやたらに歩き廻っていることは如何に無謀であつたかということ、はつきりと思ひ知ら

される時がきたのです。目当てなしに山を登つたり下つたり疲れ果てた身体を引きずるようにして歩いていった私が、獲物はないものかと鵜の目鷹の目で見廻つていた満人に捕えられて連れて行かれたのは、牡丹江から三十華里（八華里が日本の一里）も北になる五河林の近くの小さい部落でした。

南へ目指したつもりが反対の北へ向つてさまよい歩いていたことになるのです。一米余りも厚さのある土の壁で囲れた部落の入口は（入口といつても、只構えだけのものですが）これも土で作つた哨舎の前に、十四五才の男の子と女の子が紅槍（ホンチヤン穂の付け根の所に紅い房のある槍）を持つて立つていました。私はそんな少年少女までが武装しているのを見て、これからの自分の身の上について何かと暗示されたようで空恐ろしい気がしました。

私は前後を十人ばかりの男達に銃を突きつけられて部落へ入ると、カン／＼／＼と高い木を組んだ望楼の上で鐘が鳴りました。すると壁も屋根も全部土で固めた背の低い家々の入口からぞろ／＼と物珍しそうな顔つきの眼ばかりぎよ／＼光つた薄汚い人々が出てきました。銃を突きつけられなくても、もう私は逃げ出そうとする元氣もありません。それ

程疲労しきつていたのです。

満洲に三年もいたといつても、私はこんな本当の農家を見たのは初めてでした。一生に生れた時と死んだ時だけしか身体を洗わないとか言つて軽蔑しきつていたその人達が、今捕われの身となつた私のまわりへ、男も女も子供も大人も皆、素足に無帽、にしめのようなボロをまとつて、ぞろ／＼と集つてくるのです。うつむいた私の眼に、垢がまるでかさぶたのようになつた足が幾本も映じました。

グルツと取り巻かれてその真中に立つた私に、前から後からも真黄な齒をむき出しに泡をとばして口々に怒鳴っています。過去十何年間、日本人から虫ケラのようににさげすまれ、奴隷馬のようにこき使われた満人たちの憎悪の積りが爆発しているのです。

怯えきつて私の前へ、真黒い顔の人相の悪い男が近づいてきました、ニヤ／＼笑い乍ら何か言っていますが、私には何の事だかわかりません。只その男が物を言うたびに周りの人達が、「ワハ、ハ、ハ」と下卑な笑いを発して騒ぎ立ちます。ニンニク臭い息に閉口して顔をそむけている私の肩に逞ましい腕がかかりました、デシンのブラウスのスナツプがブチツという音を立てゝはずれました。私は



途端に彼の真意を知つて恐怖に思わず後ずさりしました。

その男が何か言うと、周りから馬鹿にしたような笑い声がしたかと思うと、私は背中をイヤという程固い棒のようなものゝ先で突か

れて、よろゝと前へ倒れかゝまり

した。そしてその嫌らしい男の突き出した真黒い顔に頬を当てそうになったのです。男の腕がぐつと伸びて私の全身をがつちりと抱きとめました。途端に周囲から起る爆笑、必死にもがいて逃れようとしては、男の汗じみた毛むくじやらの腕が、私の唇を掩つて首を一抱きすると、ブラウスはまるで赤子の着物をはぐように他愛なく引きはがされてしまいました。むしり取るように脱がされたスカート、自由なのは足だけですが、徒らに周囲の満人のゲラゲラ笑いをそゝるだけでした。そして二度そのズツク靴をはいたまゝの足の先が何かに当つたように思いましたが、忽ち足首を掴まれ、ポンと前へ突き離されて、私は両手を土の上について逆立のような恰好になつてしまいました。

ドツという笑い、なんという恥しさでしようか、この汚らしい満人の農夫たちになぐさまれるのかと思うと屈辱に血も逆流する思い

でした。男が大声で何かわめきましたが、もうそれを見上げる勇気さえありません。全身の力を抜いてぐつたりと大地に頭をつけてなすがまゝになつていました。

ビュツ——と突然頭上で風を切る音がします。私はビクツとして顔を上げました。あゝ、満人の毛むくじやらの手に握られた鞭、それは彼等が馬車馬を追う時に使う全部革で出来た細長い三尺程の鞭です。馬でさえ一鞭で痛さで飛び上る程のものです。

ビュー ビュー ビュー

彼は二回、三回、と空を切つて素振りしました。

そしてニヤツと笑つた顔、私は思わず彼に哀願するように両手を差し出そうとしましたが、途端、ピシツという鋭い音。そして背中にシーンと焼爇を当てられた様なシヨツク。続いて二つ、三つ、四つ、私はじいつと歯を喰いしばつて我慢しました。周りの満人達は固唾を飲んで見守つていたのでしうか、今迄の騒がしかつた人声はたと止みました。背中やお尻の痛さはもう感じませんでした。只、私の頭の中で大地がぐる／＼と廻転し、時折、ヒュツヒュツという鞭の音と、男の「チヨツ、チヨツ」という変に力の入つた舌打ちがするだけでした。

何処か遠い処で話し声が聞えます。

「……………」

私を呼んでいる様です。身体が宙に浮いたようなフワ／＼した気持——

「本当に可愛そうね」

「ええ、こんなにひどく、まさかこのまゝ死んでしまわないでしようね」

私のほん耳のそばでそんな話し声がします。あゝ、私は意識を失つていたのです。身体中がゴムの様な、自分のではない感じ、私は本能的に自分の前へ手をやりました。

「あゝ気がついたのね、どう気分は？」

三十過ぎの頬のこけた女の人がじつと私の顔をのぞき込みました。

「ええ、大丈夫ですわ」

そういつて身体を起こそうとして、思わず「あア、／＼」と呻めいて、身体を横にころがすのが精一杯でした。

「無理をなさつたらいけませんわ。本当にこんなひどくぶたれて——」

家の中には十人程居るのでしようか。私を見守つてくれている三人以外の人は一様に私と同じような目にあつたのか、皆厚く敷いた藁の上に横たわつています。誰が着せてくれたのか、破れたボロ／＼の服が私の身にまといつています。聞きますと、此の家は日本人のそれも女ばかり入れてある監禁室との事

窓はありますが三寸も幅のある太い粗木で格子が作つてありますし、入口には錠が下りていて番人がいるとの事でした。

若い者は私の外にもう一人、やつと十六になる美代ちゃんという娘さんだけで、あとは若くても二十五六歳から、年とつた人は六十過ぎの半白髪のおばあさんも居ました。

毎日、毎日、粟と玉蜀黍のお粥ばかり、今迄の私でしたらとても口にも入らないものですが、それが良かつたのかもしれない。五日程経つうちに、あんなにヒドク打たれた背中の脹れもだん／＼に治り、一週間もしたらすつかり快くなりました。いや、背中を壁にもたらすと、うずくような鈍痛がジンと全身に響くのです。退屈なので私は自分の身体をさするようにして、拇指でぶたれたあとを押してみます。その時のにぶい痛さ、私に忘れることの出来ない快さを覚えさせました。

私のあとで新しく送り込まれてきた女の人達が八人あり、何処へ連れてゆかれたのか、銃でこづかれ乍ら出ていつて、とう／＼それつきり帰つて来ない人も何人かありました。

一日中、窮屈な家の中で暮していると、何かしら物足りなく、うつら／＼としながら満人達に取囲れて鞭打たれた時の事を考えていました。あの時は生れて初めてのあんな恐ろしい目に逢つて生きた空もなかつたのですが

今顧つてみると、案外苦痛でなかつたように思えてくるのです。

氣を失つていた間の春の空を飛び歩くようなうつとりした気持、それに氣がついてからの全身の疼痛からくる快感、自分だけなのかしら、外の人はどうなのかしら、とそんな事を思つても、まさか尋ねることも出来ないまゝ、ぼんやりしていて、美代子さんから「何にを考えているの、お母さんのこと、それとも恋人の事？」

とませた口調で冷かされました。

戦争にあつて半月目、八月末のある日です。私達は思い／＼の姿でぼんやり横になつていますと、急に表が騒しくなつて、ガチャンと錠を開ける重い音がしました。又新しい女の人でも連れて来たのかと思つて、皆の眼が一齊に入口に注がれますと、赤い縮れ毛の背の高い男がにゆつと入つてきました。ソ連の兵隊です。私達の見た初めてのソ連兵なのです。私達はドキツとして部屋の隅へ一かたまりとなつておびえていました。

通訳らしいのが、ペラ／＼話しています。

一人一人の顔を覗き込むような、又何かを探すような眼つき、六尺近くもあるでしようか何といつても髯の赤いのが不気味です。私はじろ／＼と見つめられているのを意識するとじつと顔を伏せてしまいました。(未完)

蜘蛛と蝶々

(四)

—不運なニユーフェース—

飛田良二
方金三画

「トイレへ行かせて下さい、……お願いします。」

御川里枝はもう一度羞しさをおさえて頼んでみました。高窓一つの此のスタジオはむせかえる様な熱気がこもつて、その上この責苦ですからたまりません。だまされて無理に飲まされた水が素裸にされた肌に油をぬった様に流れています。それなのに、まるで寒くてたまらぬ様に里枝はガタガタふるえているのです。先刻より、これにこらえていた尿意が内臓的な疼痛となり、そう思っただけでも悪感が全身を走るのです。

「何？、おしっこ？、ワンワンのおしっこかい？……」

瀬田と滝尾は持つていましたとばかり淫らな笑い声をあげて喜ぶのでした。今迄容赦なく重ねられた凌辱に疲れ切った里枝は二つ折

りになつて床にかぐみ込んでしまいました。その細いくびには頑丈な犬の首輪がはめられ、ジャラジャラ鳴る太いくさが滝尾の手ににぎられているのです。

「ワンワンがオシッコで便所へ行くのはおかしいよ……」

瀬田が愉快でたまらない様に笑うと、スタジオを出て行きました。がすぐ引返して来ました。小さな浅いミカン箱に庭の土を入れて来たのです。

「さあ、よく飼いなされた犬ころは此の箱でオシッコをする。」
あらゆる凌辱をなめつくさせられたと思つた里枝でしたが、これは又何んと云う仕打ちでせうか。彼等毒蜘蛛共のたくらみは、未だくほんの序の口だったのです。全身が火になつて、里枝は又新し

い鳴咽をあげ床にくずれてしまいました。と忽ち無情な首輪が容赦なく里枝を釣り上げ、うなりをあげて鞭が間断なく襲つてきます。痛々しいみゝずばれと、激しい疼痛を雪白の肌へきざみ付けるのです。

「ア……………」

里枝は思わず悲鳴をあげます。

「出来んのなら、出来るまで飼いなすまでだよ。」

「四つん這いになれ！」

「おとなしく云う事を聞けば早く解放してやる。帰してやるぞ……」

如何に先刻より、何ものにもたとえ難い羞しめを受け続けた上とは云え、すべてが男共の暴力により無理矢理押し付けられた末の事であつたのですが、それが「犬になります」と屈伏してからは今度はよりたえ難い行為を自から演じなければならぬのです。

「三遍廻つてワン！」の次は小箱にまたがつて四つ這いの姿で犬のオシツコをやれと云われては、もはや到底、里枝の耐えしのべる苦しみではありませんでした。しかしもはや鳴咽も懇願もこの二匹の獣共の前には、何の支えにもなりません、只一層彼等を喜ばせる効果しかなかつたのです。一瞬の躊躇は忽ち恐しい鞭の打撃を意味するばかりです。四つ這いで這い廻るか？箱にまたがる？いずれかを選ばねばならないのです。「どうした！」「滝尾がどなりつけます。生理的な苦しみも羞しさも抑えて這い廻り、里枝は瀬田の言葉を唯一の頼りにその解放される時を一刻も早く、願うほかに道はありませんでした。

「ひざをついたらいかんだ！四つ足を立て……しりを上げて這え！」

滝尾の命令と共にその手にある無情な鞭が床を這つた里枝の腹部のゆるやかな曲線へ高い音を立て……まといつきましました。はげしい打撃！悲鳴を上げながらそれでも里枝はとうとう這い出していました。首輪から太いくさを床に落してひきずりながら――。

「もつと、手も足も開くんだ！」

もう里枝には、今自分の置かれてあるあさましくも、羞しい光景を考えて見る余裕すらありません。ただ夢中ですべてをにぎられてしまつた二人の男の命ずるまゝに、彼等を喜ばす為に奉仕するよりすべがないのです。「一刻も早く開放されたい！」ただそればかりでした。

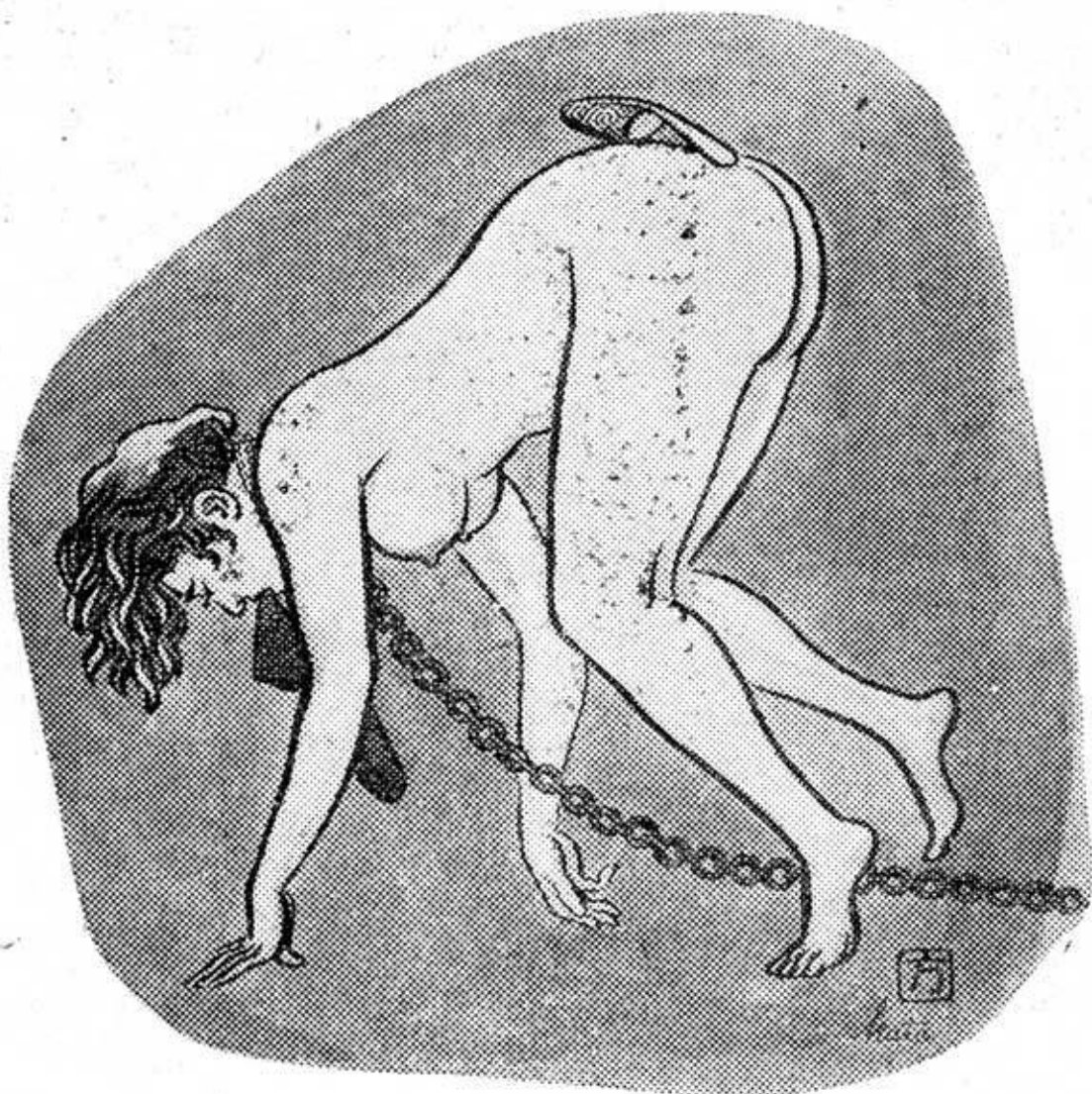
つゝの腹痛をこらえ、疲労に耐えて、打ちたおれそうな体を懸命に四肢をふんばつてこらえて……、このスタジオの東西それぞれ一つづゝあるドアの前の椅子へ別れて陣取つた男二人の間を里枝は、よたよたと往復させられるのでした。

瀬田と滝尾はとうとう此処まで飼いならした此の美しいニューフェイス御川里枝の奇妙な姿を肴に夫々、ウイスキーをあふり始めていたのでした。均勢のとれた美しい裸身、その見事な曲線が四つん這いの形でよろよろとゆれながら苦しうに瀬田の足もとへ近づきます。やつとたどり着くと忽ち新しい命令が発せられるのです。

「コラ！ワンワン、まだオシツコをしたくないのか？」

瀬田が里枝のアゴを足の先でぐいともち上げてその顔色をのぞくのでした。せわしく肩で息をしながら、涙と汗でみだれかかる黒髪をぬらして……その素晴らしい美しさはいたく瀬田を満足させます。

「いやなら、もう少し這い続けるさ！これを口でくわえてあちらの御主人の処へ持つて行け！」



それは里枝のレースの手袋でした。瀬田のワキには里枝の身の廻りの品々が重ねられてありました。瀬田は順々に、それらの品物を滝尾の陣取った出口に近いドアの処まで、上手に運んだら今日は解放してやると云うのです。

里枝はくると廻れ右をさせられ、そのみづずばれも痛々しい豊かな半球をふりふりその仕事にかゝらされたのでした。処でそれは仲々の難業なのです。何故なら、這つて行く床の敷物の上の模様が

ちようど大きな花の連なりで三寸巾程となり、それが二本の不規則な線になつているのですが、瀬田はその線を絶対にはずれぬ様に行けと命ずるのです。ちよつとでも手か足がはみ出せば又その品をくわえてもどつて来てやり直しなのです。その上おしりに何か乗せられます。

第一回目は里枝の帽子と云つた具合です。涙で視野も失い勝ちな里枝は失敗ばかり重ねねばなりません。その回数だけ又々恐しい鞭の洗礼そして又苦心した品物はおしりの上に乗せて這いもどらねばならないのでした。しかも、やつとうまくたどりついた時でも、帰りは滝尾がスリツパや、彼の体臭と垢がしみ込んだ靴下などを無理に押しつけます。くわえた口から床にひきずる品物など足をとられまいとすれば、忽ち「遅い！」とどなられ、油くさい靴下に躊躇の色を見せればうなりをあげて鞭が飛んでくるのでした。

里枝はとうとうスタジオの中央で打ちたおれてしまつたのです。それまでの苦難の往復も水泡となり忽ちはげしい滝尾の折檻が加えられ悲鳴をあげて里枝はころげまわるのでした。まさに地獄絵図。しかし、もはや鞭の恐怖では疲れ切つて、又絶望し切つた里枝の体は、一片のボロ布れの様になくなり、彼等もようやくこの遊び方にもあきて来ました。

しかしまだまだ彼等は里枝を解放する気持はありません。今度はどうしても彼等の持つていた里枝の最もいやがつている排泄行為をその光景を目前に展開させて、その里枝の羞恥に悶える苦しみを味おうと企てるのでした。そこで先ず最もその瞬間を完璧たらしめんとするかの様に、彼等は死んだ様に床の上にのびてしまつた里枝を引き起すと、木製の拷問椅子をスタジオの中央へ運び出し、その上

へ腰掛けさせてしまいました。その上、苦しそうな下腹部を突き出させて、尚里枝自身にも自らの姿をよく見る事が出来る様な浅間しい姿に、上体をまげてしぼり付け、……まで……

「さあ！もつと水が欲しいかい？……」

滝尾は、手にしたくさりを引きその血の気もない断末魔の様な苦悶を見せた顔をガクガクとゆすぶるのです。

瀬田はすばやく例の十六ミリ……ます。ついにこらえ……た苦痛も限界に達し、身を切られる様な苦しい、そして、はかない今までの努力も……小箱に落ちてゆきました。

羞恥に全身を染めた里枝は、手をたゞき、喜ぶ悪魔共の声も、遠くかすれ陶酔に似た虚脱感がぐんぐんと泥沼に引きずり込まれる様な暗黒となつて完全に意識を失つてしまつたのでした。

(二)

恐しい悪夢にうなされて、里枝が三度意識をとりもどした時は部屋はすでに明るくなつていました。其の時ドアがノックされ、開けられた気配がしました。

近くの小都市へ我が子に会いに帰つていた、この家の只一人の使用人が帰つて来たところでした。中年のおとなしそうな、この婦人はベットに横たわり、タバコをふかしている瀬田に向つて帰宅の挨拶をしているのです。滝尾はいません。瀬田の腰かけているベットの下には里枝が頑丈なテントの布で出来た大きな袋に、すつぽりと

首のところまで入れられころがされたまゝなのです。

其のあわれな姿が中年の使用人の目にふれるまでに瀬田が大声をあげていました。

「かまわんく、これから俺も出かけるところだが例によつて留守はいらん。もう一度帰つて来い、二三日暇をやる。」

瀬田の方が立ち上つてドアの処まで出て行きました。しきりにわび言を云つていた使用人は彼の言葉にすつかり喜んでる様子なのです。そして里枝の存在はついに分らず終つてしまいました。

声を上げて救いを呼びたくとも、口には厳しく猿ぐつわがはめられているのです。手足の縄はとかれていましたが、どうする事も出来ないのです。いくらもがいて見ても、袋の外へ手が出せないのです。その上例の首輪がはめられ鎖も短かくベットの足にくくりつけられているのですから、ころがされたまゝ起き上がる事も不可能なのです。だから先刻の様に瀬田もこのスタジオから出て行つてしまつても、とても逃げ出すどころかあらためて自分のおかれている屈辱の待遇に無念の涙を流すばかりだつたのです。

昨日あのまゝついに意識を失つてしまつた里枝は、気がついた時は、すつかり夜になり燈を消してある真暗いスタジオの中は高窓から洩れる星のマタタキが見えるばかりでした。里枝は夢中で起き上がろうとしてベットへ反射的に引きたおされてしまいました。依然犬の首輪が、はめられ、鎖がベットの足から無情にもその徹底的な捕われの身を思い知らされるばかりだつたのです。

見れば両手には、夫々皮製のボクサーでも使う様な袋がかけられて、ぎつしりと丈夫なひもでくくりつけられているのです。首輪と袋の外は何一つ身を蔽う物もなく、そんな姿でそれまで里枝は長

々とベツトに休息させられていたのです。がらんとしたスタジオの中には人の気配はありません。何処へ行つたのか、瀬田も滝尾の姿も見えません。ひっそりとして何の音もしません。忽ち恐しい疲労ととめない涙が里枝を深い／＼絶望のどん底へ追いやつてしまいました。しかしまだ、とても回復しない心身の疲労は、再び里枝を泥の様なぬむりに落し込みました。そして次に気がついた時は、辺りはすっかり明るくなつて、里枝の神経も幾分平静にもどつていました。今日は撮影所へどうしても行かねばならない、と、乱れた脳裡に浮かび出された時、しかしそれもすぐ悲しい諦めにかわつてしまい、里枝は人気のないスタジオのベツトに嗚咽を押えられず、泣きつゞけるのでした。

撮影所の巨大な建物や、なつかしい故郷とが、母の顔、妹……、Y監督の顔、M助カン、親しい同僚の顔々に重なり、再び……死……死が大きく小さい里枝の眼前に立ちはだかつたのでした。けれど……自殺……里枝は大きくはげしい打撃にめされた頭の中で懸命に考えつづけました。(自殺して済む事ではない。誰にも知られたくない……。死んではだめ！……)(どうすればいい？……)(私はどうなるのだ？……)整理されない。回答の出ないうちに、里枝は忽ちたつた今、これからの恐怖が先になり。とにかくこの部屋を逃がれなければと、顔を上げてスタジオを見廻しました。

ベツトから少し離れた椅子に昨日、あんなにも自からを羞しめた里枝のワンピースが下着類と一緒に里枝の汗と涙を止めて積み重ねられているのです。スタジオのいたる処に、様々な拷問道具が雑然と投げ置かれたまゝ里枝には、とてもまともに見る事も出来ない数々のいまわしい屈辱の記録を止めているのでした。瀬田も外泊

でもしたのか、全然人の気配はないまゝの地獄部屋。とにかく一刻も早く飛び出したい！里枝は逃げ出す手段を構じなければ……と、気を落ち付ける事に先ず努力しました。

手にはめられている奇妙な皮袋を、どうにかしなければなりません。首輪からベツトに繋がる鎖は別に鍵が掛つている様子はありませんが指先さえ自由になれば、とり除く事は容易な事が解りました。そこで里枝は口と歯で手くびにくい込む様にしぼられた丈夫なひもをとく事に全力を注ぎました。その光景はおそらく滑稽なものだつたにちがひありません。犬の首輪で自由にならない上体をまげて素裸の娘がじり／＼しながら、手くびのヒモを歯で解こうと努力しているのですから。

しかし里枝にとつては夢中でした。何時瀬田達が帰つて来るか知れません。音を立てぬように要心を重ねて、固く結ばれたヒモを歯でとくいらだたしさ。涙と絶望を乗り越えて、里枝はとう／＼左手を自由に出来ました。あとは簡単です。やつと自由になつた里枝はいたむ全身をこらえて服を着けに掛つたのです。一刻も早く！助かつたと思うと胸は早鐘の様にどど、思う様に手も動かないのです。それでもやつとワンピースをかぶり終えたとスタジオのドアの処へ飛んで行きノツブを廻しました。

あゝカギがかけてありません。里枝の顔にはじめて希望の光が見えました。急いでドアを引いて、飛び出そうとする一瞬血も凍る思いでした。

「アツ……………」

瀬田が仁王立ちに立ちはだかつているではありませんか。

「お願いです……帰して下さい。おねがいです……。」

「よくも無断で逃げ出そうとしたね……」

「今日は撮影があります……行かせて下さい……」
とつさに里枝はそう言っていました。

「こちらにも撮影があるんだ。まだ終つちやいないんだぞ……」

瀬田の顔から残忍な笑いが消えると、忽ち、かくし持った鞭がうなりを上げて里枝の胸に巻きつきました。

「アツ……」

さつきから瀬田は鍵穴から里枝の努力を見守つて愉しんでいたのです。一瞬の希望はもろくも消え去りそこには罰として苛酷な折檻が待つていたのです。

「服をぬげ……服をぬぐんだ！」

「おねがいで……アツ！」

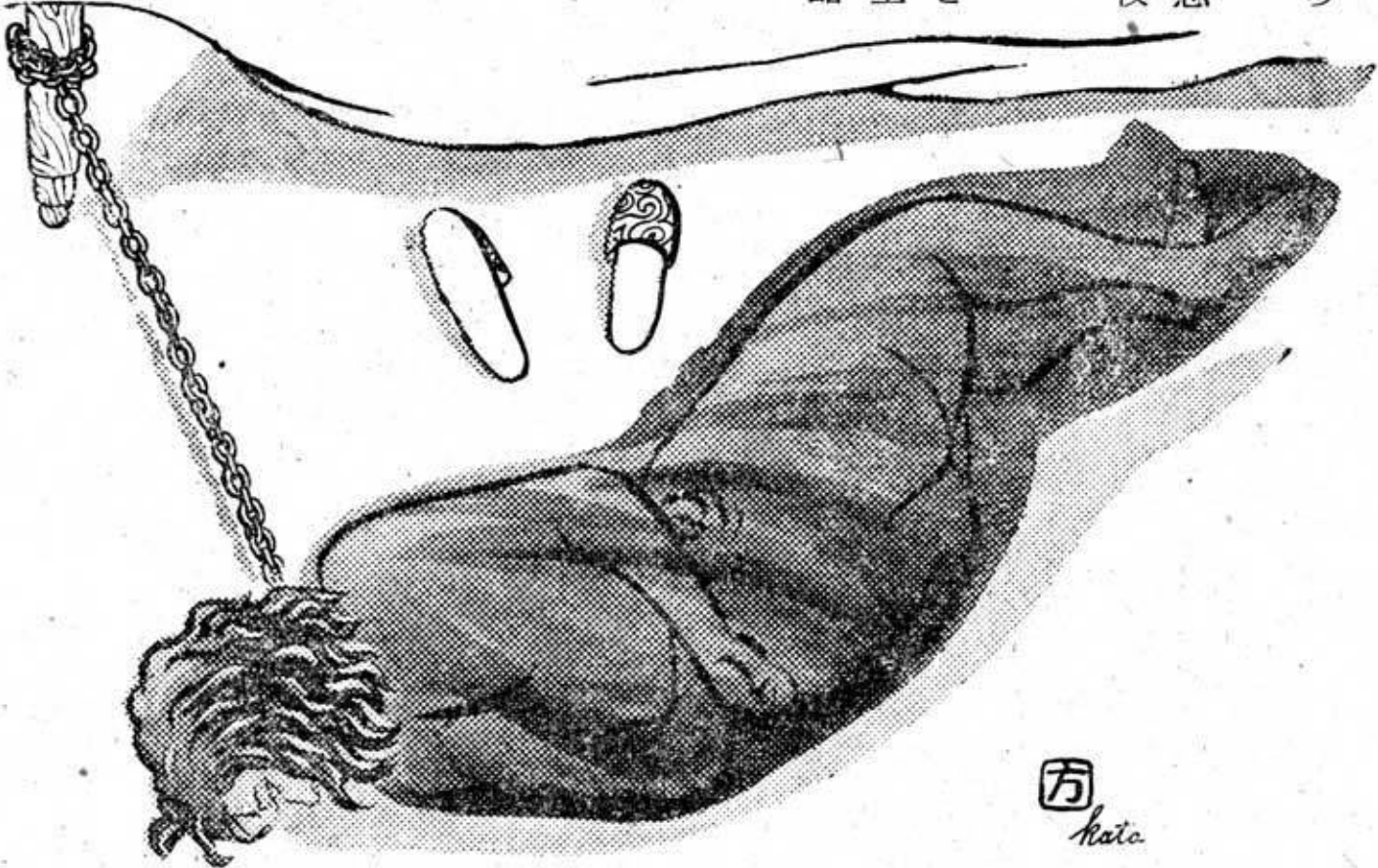
鞭がはかない里枝の哀願をさえぎります

「全部ぬぐんだッ……」

「ゆるし……アツ……」

一口も口もきけないのでした。問答無用と鞭が昨日のみず張れの上へ、よりはげしい勢いで打ち下されるばかりです。里枝は床の上へくずれるようにうずくまつてしまいました。

鞭で効果がなくなると、瀬田は里枝をひし／＼と後手にしぼり上げておいてペン先



で急所々と責め立てるのです。果てはロウソクの流れをとところかまわずした／＼らして苦悶に絶叫する里枝の美しさを心行くまで愉しむのでした。

数々の責道具が次々に動員され、とう／＼里枝は再び意識を失つてしまいました。そして悪夢にうめき続けた里枝が気が付いた時、今度は逃げ出す事が出来ない様にとテント張りの袋にくびまですつぽりと入れられてころがされていたのでした。

(三)

「おや？ 気が付いたかね……」

使用人を下へ追いやつて引返して来た瀬田は、再びベットに横たわると、床にいても虫の様にころがつている里枝を面白そうに見下して云うのでした。

「おゆるしが、出ぬうちに逃げ出そうと云う量見だから痛い目に合うんだ……」

「しかしどうだ、イモ虫コロ／＼もらくで気分も良からうが……」

「もう逃げませんから自由にして下さい、袋から出して下さい」

里枝は泣き声を出して頼んで見ました。

「すこし運動させてやるか……」
一休みした瀬田は、又々残忍な遊びを始

めたくなつたのです。やおらベツトから起き上がると袋の口の辺りで再び付けられてチリ／＼鳴る鈴がある首輪のその太いくさりの足をベツトからとくと、そのまゝぐい／＼と里枝をスタジオの中央まで引きずって行きました。

一たんはずされた猿ぐつわを再びきつしりとかまされている里枝は、息もつまりそうな苦しさに苦痛のうめきをもらしながら、どうにもならない袋の中でもがくばかりです。

「運動不足はいかんから少し愉しませてやるか」

瀬田はそんな事を独言すると足をあげて里枝を踏みつけたのです
「ウ……………」

袋の中でちようど里枝の乳を圧迫した為、里枝は苦痛にたえかねて身をよじらせました。袋の中で四肢がバタ／＼ともがく奇妙な光景を瀬田は面白そうに今度は、一けりしました。袋ごと里枝はごろ／＼とこころげ廻ります、踏む、ける、踏む――。

「どうだ！いゝ運動だろう」

悲鳴は猿ぐつわにはばまれ、その上防音装置のスタジオの中です階下にまだ居る使用人には伝わる心配はないと瀬田はすっかり喜んでイモ虫をころがし愉むのでした。

その時、不意にドアが開いて顔を見せたの滝尾だつたのです。

「ハハ……………もう始めてるねホウー何んだい？…これは――」

「馬鹿なやつさ、逃げ出そうとしたんだ。ホレお前の工夫した手袋を齒でほいてさ……面白い恰好だつたよ。二度と逃げられん様に、こうしてやった。」

二匹のそろつた毒蜘蛛は愉快そうに笑い、息もつけずにころがりあえいでいる里枝のあわれな姿を見下して語るのです。

「イモ虫はちよつと面白いが……………もう一工夫したい処だ……」

「じやどうする？、お前なら……………」

「イモ虫らしくこのまゝ天井から釣り下げて見ようじやないか……」

「なる程……」

彼等の相談が一決すると、里枝はすぐ引きずり出され、彼等ののぞむ姿に釣り下げられてしまつたのです。又具合よく、この丈夫な袋の底に当る処でテントのその様に見える大きなハト目穴があるのでした。そこへロープを通すと天井の滑車の一つへ連絡され。苦もなく里枝を閉じ込めた袋は完全な逆釣りの姿で宙に引き上げられてしまいました。しかし袋の中では里枝の四肢は束縛されていませんので釣り上げられながらも里枝は袋の中でもがいてやつと足を下へする事が出来ました。袋の口に、即ち頭部だけ露出させられている穴は袋の真下になる為、誠に妙な又苦しい姿で宙釣りにされてしまつたのです。しかも止められた高さは自由に彼等がもて遊びいたずらするのに適した位置で一先ず固定されたのです。

「どうだ、いゝ気分だろう……………」

瀬田がその無抵抗な美しく、そして苦痛にゆがんだ顔をのぞき込むのでした。頭部が下れば自然充血した里枝の顔は赤味がさして来ます。猿ぐつわをはずしましたが、里枝はもう叫ぶ力もありません。涙がポタ／＼と床に落ち首輪の鈴がかすかに鳴りました。里枝は全身で泣いているのです。二匹の毒蜘蛛は頭だけのぞかせて里枝を近々と眺め一息入るのでした。それは充分見ごたえのある美しさです。

輝やけるスター（今その第一歩を見せた若くそして清純なあくまでも美事な造物主の傑作……）その天与の美貌へ彼等は彼等の望む

期

夫人

daiana.

杉 貴 代 子

責められる女の異常な美を無理矢理に重ねて行つたのです。しかもあらゆる羞恥に尚水々しい羞恥を失なわぬ里枝でした。獲えた犠牲のすばらしさに毒蜘蛛共は今更のように酔いしれて行くのでした。

突然滝尾がつかれた様に首輪からたれさがつた鎖を手にして一本のロープで下げられた里枝の体の入つたその袋をぐいと引きました。里枝の充血した顔がガアツとるゆれと鈴がチリ／＼と鳴り、手を離した滝尾の反動で長い鎖の先で床の上にくるりと輪をかく様に揺

れくる／＼と廻りはじめたのです、大きく小さく袋は空中で輪を描きながら次第に激しく。思わず里枝は悲鳴を上げました。目が廻つて天井も床も壁もすべてが一つになつてくる／＼と恐しい勢で廻転します。滝尾が又々残酷な思いつきを実行に移したのです。完全に目が廻ると里枝は何が何んだか解らなくなり、ちやうど車に酔つた様に、いや、よりはげしい苦しみに襲われ、前後不覚になる一歩前で何も満足に入つていない胃が急激に痙攣を起して、つき上げてくる苦しみをはき続けるのでした。(未完)

人生も三十を越えようと駈けるように過ぎ去ります。私も早や四十に届いてしまいました。しかし若い頃から乗馬を続けたおかげで未亡人となつた現在でも、

「貴代子さんはお若いのね、三十二、三でなくつて……」

などと、クラスメートに冷やかされたりしますが内心はとても嬉しいのです。

夫は陸軍大佐でしたがビルマで昭和十六年飛行機事故で死にました。以来、二人の娘を抱えて遺産を頼りに細々ながら楽しく暮しています。上の娘は今年十九、次の娘は十六でいずれも健康には恵まれて居ります。これと

いうのも亡き夫が、更に遡つては私の両親が乗馬には全く反対せず、むしろ健康によいとすゝめる位だつたからだと思ひ、時々思ひ出しては感謝しております。

さて、私と乗馬について少しく申し上げましょう。私の実家は、東京世田谷で生れた頃はあたり一面畑ばかりでした。実家の父も軍人だつたので物心のついた頃には父の乗馬の鞍前などに乗せられ、よく多摩川べりなどに遠乗りに出かけたものでした。私はその頃からお転婆でもあつたせいか、案外あの大きな馬が恐ろしくなく、小学校の二、三年頃には馬場の中で一人で馬を御することが出来まし

サド女の處女 ダイア

Madam

乗

た。もつとも大人から見れば、乗るといふよりお馬様に乗せて頂いているといった方が適切であつたかも知れません。兎に角小学校を出る頃には五、六十歳の障碍は跳び越える程の腕になつていました。その頃からです、何でも物に跨がるのが好きで自転車は勿論、飼犬の太郎にも嫌がるのを無理に乗つたりしました。太郎は大きな秋田犬で多少雑種もまじつていたようですが、案外温順で子供の私などは渋々乗せて呉れました。私も馬よりも太

郎の方が小さくて跨がつた気分がよかつたのですが、やはり犬ですからすぐ嫌がります。

そこで父母に散々駄々をこね、秀才が入るといわれた府立第六高女に入学することを条件にポニー（小馬）を買ってもらふ約束をしました。入学試験に落ちたら駄目なので、それこそ子供ながら必死になつて勉強したものでした。勉強しながらも思い出したように椅子に座蒲団を折つて二、三枚重ね、それに跨りハイシ、ハイシとはしやぎ乍らポニーに乗れる日を夢見ていたわけです。そして寒い冬も過ぎ、梅の咲く頃には運よく第六高女の方はパスし入学の喜びとポニー獲得の喜びとで胸は浮き浮きし、肝心の勉強も手につかない有様でした。そんなわけで一学期も終り、楽しい夏休みに入ろうとした頃、渡された通信簿は父母の立腹を買うに充分なものでした。父は、

「二学期もこんな成績を続けたらポニーは取上げるよ。」

と叱られ、当分乗馬は一日三十分と制限されてしまいました。しかし馬は生きものですから運動が不足すると病気になります。いきおい乗れない代りに曳いて歩いてやらねばなりません。西陽の暑い夏の夕方など、やり切

れたものではないのですが、父は馬丁の庄吉爺やにも

「ポニーの運動は貴代子にさせろ、お前は手を出すな」

と厳命されているのですから、どうにもしようがないのです。そのうちに多少の過労もあつたのか私は軽い熱に侵されて丸二日寝ました。そうです、その日は八月の半ばで逗子に母と従兄弟と三人で海水浴にゆきグツタリ疲れて帰つて来た後、三十分ほどポニーを駆けさせ、さらに三十分ばかり曳馬をしたのです。母はそれ以来病氣をしたことのない私だけに心配して父に内緒で曳馬を手伝つてくれました。そのころ母は三十四、五になつていたのでしょうか、或る時父の出張中、

「私も少し馬に乗つて見ようかしら」

と云つて父の乗馬ズボン、長靴、鞭、拍車と道具一式を馬丁に持つてこさせてポニーに跨がりました。母は大柄で五尺三寸、十四貫五百位あつたでしようか、見よう見まねで一時間位馬場の中を歩かせたり駆けさせたりし



ていました。そのうちに子供用のポニーのこ
とですから汗びつしよりとなり息づかいも苦
しそうになつてきたのですが、あの優しい母
が一向、苦しんでいる馬から下りようとしま
せん。慣れて面白くなつてきたせいもあるで
しょうが、ますます激しく鞭を鳴らし、拍車
で蹴りつけるのです。色白な母の顔もうす桃
色になつて汗ばんでいます。とうとう二時間
ほど乗り廻すとポニーは動かなくなりまし
た。すると母は狂つた様に鞭で続けざまに打
ちすえ、拍車で蹴上げるのです。とうとう馬
丁が見兼ねて

「奥様、ポニーは子供用の馬ですから無理で
すよ……」

と云うか云わぬうちに

「お黙り！ お前の口出しするところじやな
いわ。」

と荒々しく叱りました。私は後にも先にも
母のこんな荒々しくなつたのを見た事があ
りません。私は何だか恐くなつて馬場からコ
ソコソと逃げ出し、自分の部屋に戻つてしま
いました。もう夕日も丹沢山頂の中に沈んで
残暑と共に何となく重苦しい空気が邸内を覆
っていました。

一番星がキラ／＼輝き出す頃、私はそお

つとポニーはどうしたかと思つて見にゆくと
馬丁の庄吉は盛んに干藁でマツサーシをして
いるところでした。私は

「庄吉、今日はポニーもお母さんを乗せたか
ら疲れたでしょうね」

と同情した声で何気なくいゝますと庄吉は
持つてましたとばかり、

「ワシの云う筋合でねえから黙つていたけど
ポニーに奥様は無理だよ。この暑さの中で二
時間以上も責め続けられちやいくら馬でもか
なわねえや……。奥様には旦那様の馬がい
ゝ、あれならアングロアラブでちよつとやそ
つと乗り過ぎたつてどおてこたあねえ……」

とこぼすようにいゝました。その時

「貴代子、貴代子」

と呼ぶ母の声が母屋の方から聞えて来まし
た。私は別に悪いことをしたわけではないの
ですが、何だか恐る恐る母のところへゆきま
すと、母はいつもの優しい言葉つきで

「貴代子、どうしたの、そんな仏頂面をして
さあ早くお風呂へお入りなさい、私が洗つて
あげるから」

といゝ乍らワンピースを脱ぎ始めました。
私も急いで汗ばんだ運動シャツを脱ぎ終りま
すとズロース一枚で風呂場へかけ込みました

その時に遅れて母がシユミーズを棚に置き、
パンティ（母はズロースは穿かずピンク色の
パンティを常に穿いていました）を脱ごうと
した時です。見るともなしに浴槽の中の私の
目に写つたのは、そのパンティの股のところ
がお小水でもしたのではないかと思われるほ
ど色が変わっているのです。私は思わず、

「お母さまのパンティどうしたの……」

ときいてしまいました。母は少々驚いた様
子でしたが、流しにつか／＼と入つてきて
「馬に乗つたので少し汗が出てね……」

と云つてすぐ

「乗馬つて気持が良いものだね。家の中でじ
つとしているより思い切り汗を出した方がよ
つぽど後が楽しいね。私もパパが帰つてきた
ら少し教えて貰おうかしら、確かに私がポニ
ーに乗るのは少し可愛想だし、パパの馬じや
まだ恐いしね……。でもあの小馬でも膝や
腰が痛くなる位だから、もつと足を拡げなけ
ればならないパパの馬じやずい分あとが痛い
だろうね……。」

と云つたあと

「ずい分腿に渗みるわね。でも何んて気持の
よいお風呂でしょう」

といゝ乍ら満足しきつた面持で深々と浴槽

にひたりました。しばらくすると先に入つた私はのぼせてきたので流しに出ましたが、続いて母も出てきて

「今日は大汗をかいたから貴代子、悪いけど流してね、私も貴代子を綺麗に洗つてあげるからね」

と云いますと、私の背中から腰にさらに股にかけて白い泡をぶく／＼立てながら磨き上げてくれました。特に股のところは何度も入念に洗い直してくれました。私も股のところは何だかくすぐった

いのですが小さい時からよく洗つてもらつたし、今更嫌がるのも変なので、母のやつてくれるまゝに大の字に開いて磨きあげてもらいました。そして次は私が母を洗う番になりました。母は

「馬に乗るとこも腰が痛むものかね、かゝむのがとてもつらいよ、貴代子、悪いけど私のお尻から前の方も洗つてね。」

といつて心持股を拡げたのでした。このようにしてその日は九時に床に就きま



した。しかし私は大分疲れていましたのにも拘わらず仲々寝つかれず、母の仕草がどうも何時もと違うような気がしました。そのうちに何となくズロースがぬれるような気がしましたので何気なく手を当てますと赤いものが付いているではありませんか、私は氣も転倒せんばかりになつて隣の母を呼び起しました。母は私の様子に驚いた様子でしたがすぐに平常に戻つて

「貴代子、お前もこれで子供から娘になつた

のだよ。何も心配はいらない。このバンドはお母さんので悪いけど突然だから仕方がない。いずれ貴代子のを買つてきてあげるからね」

と云つてお手当の仕方を丁寧に教えてくれました。

そして、これを機会に私の体は目に見えて処女らしくなり、乗馬で鍛えた筋肉や腰の線は自分ながらうつとりするような恰好になつてきました。二年の歳月はまた／＼く間に過ぎて私が十七才になりました時、父は

「お母さんもお前もポニーでは余り小さ過ぎるから大きい馬でおとなしいのを買うことにしよう」

といつて十四才(という馬では老馬です)のやはり父の馬と同様アングロアラブの牡馬を買いポニーは売つてしまいました。

それまでも私はよく父の指導のもとに大きな馬にも跨つていたので、大きい馬の快味も良く知っていました。鞭を当てゝも拍車を入れても、動きが大きくてポニーの様にこせ

くしていません。股を押し出す様にして拍車を当てる反動が大きく股部の磨擦は得もいわれぬ気持ちにさせてくれました。思わずパンティが湿つてきてたまらなくなることもあり、そんな時にはよく母がポニーに乗つてパンティが汗ばんだといったことを思い出したりしました。

女学校もそろそろ卒業する時が近づいた頃親子、馬丁の四人しかないこの家に「みよ」という山形の貧農の三女と「みよ」の従兄弟という「武男」がそれ「女中と書生」ということで働かれてきました。

というのはこの頃から父が長期出張が多くなつたこと、馬丁の庄吉が六十五才にもなつて体がだん／＼いうことをきかなくなつて来た為にとられた措置でした。そして若い武男はいきおい馬の世話もすることになりました。

二人は平凡な顔付でしたがまことに「ハイハイ」とよく働く駄馬のような性格の男女でしたがやはり育ちや主人と僕婢の相違から別人種のようなものでした。そしてこの二人が来てからです、私はだん／＼サディスト的性格が強くなつてきましたのは、しかも母は私のそうなつてゆくのを薄々知っていたのでし

ようが私の人格を尊重したのかどうか知りませんが、兎に角余程私がみよや武男に無理をさせる時以外、お叱言はい／＼ませんでした。恐らく一人娘でもあり、いずれこの家の女王になる運命にあることが分つていたので自由にして置いてくれたのでしよう。私は間もなく学業成績も五十八人中、五番という成績で女学校を卒業しました。と同時に無限に近い解放感を感じ始め、私のサディストとしての新生活が始まつたのです。

学校を卒えた私は就職などせず、お茶、お花お料理、洋裁などと片つ端しから習得に乗出したのです。勿論乗馬は健康増進のためからも缺かさず続け、乗り方も上手になつて障碍は一二〇鞭を榮々跳べる様になつていました。つまり卒業はしたものゝ案外忙がしい毎日でしたので、凡そ頭脳、技術の進歩に關係のない仕事はだん／＼みよと武男にやらすことにしました。洗濯や乗馬靴を磨くことなどは手も荒れることですし、いの一番にみよや武男に押付けました。曾てはうるさかつた父も自分の仕事に手いづばいなのか、凡べて母まかせとなり、母は母で一挙に二人も僕婢が来たものですから次第に自由マダム的な態度をとるようになりました。お風呂へ入る場合も

今ではみよと武男の二人に全身を洗わせ、木製ベツトの上にゴムマツトを敷いて二人にもさせるようになりました。何時の間にか私も父母のいない時など、二人を呼びつけてそれこそ頭のとつぺんから下腹部、さらに足の爪先まで洗わせ、特に太股等は乗馬の後など汗ばんだからと云つては海綿に香水石鹼を含ませて洗わせるのでした。勿論そのような時には私のお小遣の一部をそつと握らせるのです。二人は中々受取ろうとしません。恐らくこのようなことをするのが当然であると思つているのでしよう。メンスの後などはちよつと辱かしい気持ちもありますが、それ以上に武男に洗わせたい気持ちに駆られますし、さらに征服感を味わいたい時はみよにも手伝わせますがお互いに同年の女なのでゆつくりと見せつけてやつた方が気分がよいようでした。どうせ武男の下着は全部父のお下りですし、みよの下着とて母や私の疲れたものを下げていたもので何となく良心的にも苦痛を感じないですみました。しかし一度みよが下げもしない私のパンティを、どう感違ひしたのか、古くなつたからといつて自分で穿いていた時は無性に腹が立ち、みよを腹這いにさせてお尻をまくり、馬の鞭でみよを張れがでるほど打つて



やつた事があります。以来みよは洗濯ものには極端に注意するようになり、私がメンスで汚した時などは真白になるまで一生懸命に洗っていました。

木の葉も枯れ落ちた初冬の朝でした。私は馬を責めようと思つて武男に仕度をさせまし

だが肝心の長靴も拍車も磨いてありません、冷えて汚れたまゝの靴、馬腹の血がにじんだまゝの拍車、私は無性に腹が立つて長靴を履かせていた武男の胸元を蹴りつけました。それでも武男はあやまりもしません。私は思わず手にした細鞭で武男の右頬を打ちました。

頬はみるみるうちに赤らんできましたが、それでも武男は何事も無かつた様な顔をしています。元々この細鞭は特に女用として頼んで、中にピアノ線の入つたものでよくない、音もピシリと悲痛に響くので気に入らぬ時の馬の尻を打ちすえるのにはまことに気分をそゝるものでした。少し強く打てば忽ちあの厚い馬の尻に条痕がついてふくらむほどで私自身もどの程度痛いかと思つてふくらはぎを軽く打つた時でさえ丸一日ヒリ／＼していたくらいです。にも拘らず武男はじつとしていたのです。私はその時以来武男を馬なみに扱うことにしました

そこで早速

「お前みたいな怠け者は馬におなりッ」

といったところ何んと驚いたことに小屋の中ですぐに四つ這いになつたのです。そうなればこちらにも退くわけにゆかず、シャツ一枚の武男の背中に跨がつて馬のように鞭打ち拍車で軽く蹴つてやりました。しばらく跨つていると武男の体温が犇々と真白いジヨープス（婦人用乗馬ズボン）を通して感じてくるのです。そして心臓の鼓動さえ内股に感ずるではありませんか。私は思わず腰をくねらし、鞭を鳴らしながらハイシ、ハイシと歩かせました。ですがこんな事を何時までも馬小屋の中でやつているわけにもゆきません。そこで私は

「仕度をちやんとして置かないと承知しませんよ、今日はこれで許してあげる」

といふ終ると同時に思い切り長靴を履いた脚で武男の首すじを締め上げました。日頃の乗馬で鍛えた私の膝から内腿の力は相当強かつたのか武男は始めて

「ウウウ——」

と唸るように、しかし何か快感を味つていふような目つきで首をくねらせました。そして首締めがゆるみ、私が立よると片ひざをつ



きながら

「すみません」

と始めて一言口を動かしたのです。そこで乗馬の仕度をさせ、何時もの様に左足を鎧に右足を武男にかゝえさせて馬上の人となりました。私は何か一瞬、中世の奴隷に従えたお姫様になったような錯覚にとらわれましたが後は心ゆくまで馬を走らせました。

一時間程馬場内で責めたでしょうか、馬も肩のあたりが汗ばんできました。外気は案外冷たいのですが一時間も手縄を締めて拍車を絶え間なく使っていると馬も緊張するのです。よう、面白い位思う通りに動くのです。歩いてばかりいては却つて摩擦のため快感が出過ぎるので早足はひんぱんにお尻が上下するのを絶頂感にゆくのを防止してくれます。しかし余り続けると人馬共に疲れが激しいので並足、早足、並足、駆足という風に十分位ずつ交互にやるわけです。馬はもう息づかいも荒くなり、口に泡を噛むようになつた頃、私はそのまゝ門をくゞつて多摩川の方へ出かけま

した。いまでも父と一緒に遠乗りしたことはあつたのですが一人で出ることは禁じられていました。にも拘らずその日は何か表へ出たく、馬上の自分を他人にも見てもらいたい気持ちでいつぱいでした。世の中というものはうるさいもので女が鞭を鳴らしながら馬を走らせたりすると何か天下の一大事でもあつたかのような目で見えるのです。私は日頃からそれに猛烈な反撥を感じていましたので幾分人通りの多い道を選んでこれ見よがしに馬を進めました。やはり何かこそ／＼云つてゐるのが蹄の音に混つて聞こえてきますが要するに女のくせに／＼という声のようでした。私は女のくせに／＼ということに更に反撥を感じて人通りも少なくなつた頃を見計らい思い切り馬を鞭打ちながら駆けさせました。女のくせに／＼といった様な陰口は瞬く間にはるか後方へ蹴飛ばされて消えてなくなるような気がしたからです。そして十数分位駆けたでしょうか、馬はすっかり汗ばみ、胸のあたりには明らかに汗の流れの跡が見え、尻のあたりは鞭の痕がはつきりついていました。私は手綱を引きしぼり、はやる馬を止めて傍の小川に駒を進めました。私自身も汗ばんでいましたが特に内股のあたりは通気も悪いせいかじつと

りと汗ばんでいるのです。そこで真黒いウール地の裾の割れた乗馬用上衣を脱ぎますとジヨースをゆるめて、しばらく汗の退くのを待つ為、枯草の上へ仰向けに転りました。火照つた顔、むっちり隆起した胸が息をするたびに大きく波をうつています。私は自愛の気分で何んとなしに自分を眺めていますと一丁程離れたところでピーと口笛の音がしました。ふと見ますと角帽をかぶつた三人の学生が幾冊かの本を紐で十文字にからげ、こちらへぶら／＼歩いてきます。帽子は油で光り、ネズミ色のズボンを穿き、どう見ても善良な学生とは思われないのです。私は何か怖いものを感じ休憩もそこ／＼に再び馬に飛び乗つて駆け出しました。学生は素早く逃げた私を嫌がらせるつもりか石でも投げたのでしょうか、傍の小川にポチャンという水音がしました。嫌な奴だと思つて馬を急がしたのですが運の悪いことには行く手の小橋の桁が落ちて人は兎も角、馬は渡れそうもないのです。しばらく考えましたが、どうにも仕様がありません。決心して今来た道を引返すことにしました。学生等はどう目の前に近寄つています。「凄え、ダイアナだ」「女一人大地をゆくか」

「岸田国士の小説に『鞭を鳴らす女』ってえのがあつたな」

「案外トデシヤンじゃないか」

といった下品な声が聞えてきます。私は薄気味悪くなつて馬に一鞭くれ、拍車を強く蹴り上げてその一群の傍を駆け抜けました。学生も汗ばんだ馬が勢よく駆け抜けるのには驚いたのでしょうか、クモの子を散らす様に道を開きました。私は勝誇つたような気持で砂煙を上げ、彼等を左右に見下しながら駆け抜けました。蹄のバカ／＼という音は家にも聞えたのでしよう、門を潜ると武男が出迎えに出て居り、馬の轡を押えてくれました。母は銀座へ行つたとかで居りませんし、私も汗がひどいので武男に馬の手入れを命ずると同時にみよには急いで風呂を準備させました。その間私はトイレットに入つて心ゆくまで用便を

しました。乗馬の後の大便、それは通りがよくてまことに気分の良いものです。そしてせい／＼した気持で風呂に入ると何時もの様に武男とみよを呼びつけ、体のすみずみまで洗わせました。特に内股から肛門にかけては汚れ易いところなので入念に洗わせた後、マツサージをさせて疲れを癒しました。ついでに申しますが乗馬をしますと膝から腿の付根に

かけてしびれる様な軽い痛みを感じ、肛門や陰部は鞍のくぼみで常に磨擦されるため、パンティは平常より汚れ易くなります。そこで私はこのようにして特に香水石鹸をつけた海綿で入念に洗わせるのです。武男やみよは別に嫌がりもせず却つて貴いお姫様の大切な所に触れさせて頂いたといった感じでいるらしく、それこそかゆいところに手が届く様につてくれます。

ところで入浴が済んだ私は銀座のアメリカ

人経営の洋装店で買ったピンク色のブラジャ―、薄いパンティ、締りのよいコルセット等を着けました。そして渋好みの薄茶のワンピースに着かえ、陽当りの良い縁側の長椅子に体をもたれさせ、雑誌付録の結婚心得帖を拡げながらみよの捧げて来るコーヒーを待つていました。

こゝで処女期は一応終わります。次は人妻期さらに未亡人期が続きます。

【寄稿家への通信】

○「女性切腹写真の考察」を寄せられました熊本の水尾永生氏の御意見は大変参考になりました、御主旨は今後の誌上に実現したいと思ひます。

○乗杉貴代子さま、続稿お送り下さるか、何かの方法で連絡がとれるようにして下さい
○坂口潤子様、長らく御便り頂けませんご連絡をとる術がありませんので誌上でお呼びかけいたします。○富岡陽夫

様と那須不二夫様稿料をお送りする都合がありますので連絡場所御知らせ下さい。○吾妻京氏へ、貴方の御熱心なお便りには感激しました。是非絵の方も送つて下さい。お待ちします。○東京、R子（二十九才）さま、連絡場所御知らせ下さい。通信が来ています。○森野茂氏へ、高圧浣腸の体験談は面白いと思ひました。なんとか誌上に紹介したいものです。○神戸の有井氏へ、真面目な御意見として大

いに啓発されました。○責め方のアイディアをお送り下さる方がありますがお差支えない限り御通知下さい。○体験記、告白等を頂いた中で内容によつて公表しかねるものは保留してありますが何らかの方法で発表の手段をとりたいと思ひますから御承知おき下さい

× × ×